三重県埋蔵文化財調査報告２２９

堀　　田

第３～５次調査

２００２年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の中央部を流れる雲出川の流域は、現在では津市・久居市・一志郡および松阪市の一部を含みますが、かつては大きく一志郡とされていた地域であります。この一志郡は、著名な三重県下の歴史上でも特徴的な文化を担った地域で、重要な遺跡が数多く所在するところです。弥生時代の稲作文化がまず受け入れられたのがこの地域と考えられますし、古墳時代前期において前方後方墳が集中する地域でもあります。また、古代律令期における中央的な文化が伊勢に受け入れられる状況を考えるうえでも、この地域の動向は非常に重要です。

今回発掘調査を行いました堀田遺跡は、雲出川の支流中村川が雲出川へと合流する付近にあたる遺跡で、現在の一志郡嬉野町地内にあたります。嬉野町は三重県内でも屈指の遺跡密集地域でありますが、この堀田遺跡付近はとくにそれが顕著です。付近はとくに筒野１号墳や天花寺山丘陵内の数多くの古墳をはじめ、律令期の一志郡家がこの付近に想定され、また天花寺廃寺・一志廃寺・中谷廃寺などの古代寺院が密集する地域でもあります。また戦国時代では、織田信長軍と北畠具教・具房軍が激突した天花寺城跡があります。このように、堀田遺跡周辺は、様々な時代に頻繁に地域史の表舞台に立ったところといえるでしょう。

堀田遺跡の調査は、これまで５次にわたって行われており、今年度にも第６次調査を行ったところです。今回は県道改良工事に伴う一連の調査である３・４・５次分をまとめて報告します。古墳時代と飛鳥・奈良時代を中心とした土器類にはとくに見るべきものが多く、貴重な歴史資料となりました。このような貴重な成果の影には、開発による遺跡の部分的な消滅という残念なことがありますが、ここで得た成果を迅速かつ明確なかたちで、県民の皆様はもとより全国的に向けて、三重県がいにしえに育んだ重要な文化を公表していきたいと考えます。

発掘調査にあたっては、地元嬉野町および近隣在住の方々をはじめ、嬉野町教育委員会、県土整備部道路整備課・津地方県民局津建設部から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

２００２年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　桂　川　　哲

例　言

1　本書は、三重県一志郡嬉野町宮古字築山ほかに所在する堀田遺跡の、第３・４・５次発掘調査にかかる報告書である。

2　調査は、主要地方道松坂一志線緊急地方道路整備事業に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。調査は、平成７年度（第３次）、平成11年度（第４次）、平成12年度（第５次）の３ヶ年で行った。

3　発掘調査は、次のような体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

＜第３次＞　主事　中川　明　　技師　西村美幸　技術補助員　山田康博

＜第４次＞　技師　伊藤裕偉　技術補助員　濵辺一機

＜第５次＞　主事　中川　明　技術補助員　濵辺一機

4　調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構写真は各調査次の担当者がそれぞれ撮影し、遺物写真は中川・伊藤・萩原義彦が撮影した。報文の執筆は、中川・伊藤・濵辺が分担して行い、文末・目次などに明記した。全体の編集は、調査第一課主査兼第二係長野原宏司（平成13年度）の調整のもと伊藤が行った。

6　第３次調査については、すでに『堀田遺跡第３次発掘調査概報』（1996年三重県埋蔵文化財センター）を刊行しているが、今回の報告をもって正式報告とする。なお、第３次調査の遺構と木製品については、概報をもって正式報告とする。

7　調査にあたっては、津市・久居市・嬉野町在住の各位、嬉野町教育委員会、および県土整備部道路整備課・津地方県民局久居建設部から多大な協力を受けたことを明記する。

8　報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等を頂いている。記して感謝いたしたい。

青木哲哉（立命館大学）、赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）、泉　雄二（斎宮歴史博物館）上村安生（三重県史編さん室）、金原正明（天理大学）、小林　秀（三重県史編さん室）田口一郎（群馬県箕輪町教育委員会）、林部均（奈良県立橿原考古学研究所）、樋上　昇（愛知県埋蔵文化財センター）、水橋公恵（斎宮歴史博物館）、山中　章（三重大学）、和気清章（嬉野町教育委員会）

9　当地は国土座標第Ⅵ系に属する。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏6°40′、真北方位は西偏0°17’34”（平成10年）である。

10　当報告書での遺物は、調査次数毎で通番とした。挿図と写真図版の遺物番号は次数毎での実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

11　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき‥‥‥‥‥「坏」があるが、「杯」を用いた。

わん‥‥‥‥‥「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

12　当報告書での遺構は、調査次数に関係なく通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

ＳＡ‥‥柱列　ＳＢ‥‥掘立柱建物　ＳＤ‥‥溝・流路　　ＳＫ‥‥土坑　　ＳＲ‥‥流路

ＳＺ‥‥落ち込み　など　　pit ‥‥ピット、柱穴

13　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

14　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……中川…（1）
　1　調査の契機……（1）
　2　調査の経過……（1）
　3　調査の方法……（3）
Ⅱ　堀田遺跡とその周辺環境……伊藤…（4）
Ⅲ　第3次調査……（9）
　1　遺構の概要……中川…（9）
　2　出土遺物～第3次調査区～……伊藤…（11）
Ⅳ　第4次調査……（40）
　1　調査区の基本層位……伊藤…（40）
　2　検出した遺構……伊藤…（40）
　3　出土遺物～第4次調査区～
　　a土器類……伊藤…（48）
　　b木製品……濵辺・伊藤…（50）
Ⅴ　第5次調査……（65）
　1　検出した遺構……濵辺…（65）
　2　出土遺物～第5次調査区～
　　a土器類……濵辺…（68）
　　b木製品……中川・濵辺…（68）
Ⅵ　調査のまとめと検討……伊藤…（71）
　1　堀田遺跡の地形状況……（71）
　2　古墳時代前期の堀田遺跡……（71）
　3　古代の遺構・遺物と一志郡家への展望……（75）

挿　図　目　次

fig. 1　遺跡位置図
fig. 2　事業地内調査区位置図
fig. 3　第3・4・5次調査区平面図
fig. 4　第3次調査区出土遺物（1）
fig. 5　第3次調査区出土遺物（2）
fig. 6　第3次調査区出土遺物（3）
fig. 7　第3次調査区出土遺物（4）
fig. 8　第3次調査区出土遺物（5）
fig. 9　第3次調査区出土遺物（6）
fig.10　第3次調査区出土遺物（7）
fig.11　第3次調査区出土遺物（8）
fig.12　第3次調査区出土遺物（9）
fig.13　第3次調査区出土遺物（10）
fig.14　第3次調査区出土遺物（11）
fig.15　第3次調査区出土遺物（12）
fig.16　第3次調査区出土遺物（13）
fig.17　第3次調査区出土遺物（14）
fig.18　第4次調査区東壁土層
fig.19　第4次調査区北部 流路SR41平面図
fig.20　第4次調査区流路SR41杭列2平面・立面図
fig.21　第4次調査区流路SR41導水路土層
fig.22　第4次調査区溝SD42遺物出土状況・土層断面図
fig.23　第4次調査区掘立柱建物SB69平面・断面図
fig.24　第4次調査区出土遺物（1）
fig.25　第4次調査区出土遺物（2）

fig.26　第４次調査区出土遺物（３）
fig.27　第４次調査区出土遺物（４）
fig.28　第４次調査区出土遺物（５）
fig.29　第４次調査区出土遺物（６）
fig.30　第４次調査区出土遺物（７）
fig.31　第４次調査区出土遺物（８）
fig.32　第４次調査区出土遺物（９）
fig.33　第４次調査区出土遺物（10）
fig.34　第５次調査区掘立柱建物ＳＢ 75 平面・断面図
fig.35　第５次調査区土坑ＳＫ 81 遺物出土状況
fig.36　第５次調査区流路ＳＲ 77 杭列平面・立面図
fig.37　第５次調査区出土遺物（１）
fig.38　第５次調査区出土遺物（２）
fig.39　堀田遺跡周辺の旧河道を中心とした旧地形
fig.40　堀田遺跡における布留系要素の受容

表　目　次

tab.1　第３次調査区遺構一覧表
tab.2　出土遺物観察表（第３次１）
tab.3　出土遺物観察表（第３次２）
tab.4　出土遺物観察表（第３次３）
tab.5　出土遺物観察表（第３次４）
tab.6　出土遺物観察表（第３次５）
tab.7　出土遺物観察表（第３次６）
tab.8　出土遺物観察表（第３次７）
tab.9　出土遺物観察表（第３次８）
tab.10　出土遺物観察表（第３次９）
tab.11　第４次調査区遺構一覧表
tab.12　出土遺物観察表（第４次１）
tab.13　出土遺物観察表（第４次２）
tab.14　出土木製品観察表（第４次）
tab.15　第５次調査区遺構一覧表
tab.16　出土遺物観察表（第５次）
tab.17　出土木製品観察表（第５次）

図　版　目　次

ＰＬＡＴＥ表紙　第３次調査区出土の暗文土師器
PL.1　第３次調査区　遺物（１）
PL.2　第３次調査区　遺物（２）
PL.3　第３次調査区　遺物（３）
PL.4　第３次調査区　遺物（４）
PL.5　第３次調査区　遺物（５）
PL.6　第３次調査区　遺物（６）
PL.7　第３次調査区　遺物（７）
PL.8　第３次調査区　遺物（８）
PL.9　第３次調査区　遺物（９）
PL.10　第４次調査区　遺構（１）
PL.11　第４次調査区　遺構（２）
PL.12　第４次調査区　遺構（３）
PL.13　第４次調査区　遺構（４）
PL.14　第４次調査区　遺物（１）
PL.15　第４次調査区　遺物（２）
PL.16　第５次調査区　遺構（１）
PL.17　第５次調査区　遺構（２）
PL.18　第５次調査区　遺構（３）・遺物

Ⅰ 前　言

1　調査に至る経緯

主要地方道松阪一志線は松阪市南部域から一志町、嬉野町を経由して久居市へ縦貫する通勤者利用の幹線道路である。近年の交通渋滞の増加と目的地への時間短縮のため、またこれらの弊害として起こってきた地域住民に対する交通事情の悪化から緊急改良工事が実施されることになった。この改良工事の実施区域が堀田遺跡の範囲内に重複し、遺跡の保存が危ぶまれてきたため、当センターが事前の発掘調査をここ数年間実施してきた。その調査結果をふまえて本年も、緊急発掘調査を実施した。当路線に関係するかつての発掘調査の履歴は第３～５次の３回を数える。

堀田遺跡ではじめて調査がなされたのは、昭和53年のほ場整備事業に伴う試掘調査で、同年11月から12月にかけて行われた。面積は236㎡である。調査の結果、土坑、溝、柱穴等を確認した。遺物は軒丸瓦・平瓦や暗文土師器が出土した。この結果と分布調査結果を受けて農林水産商工部と担当課と3者協議を行った。この協議により昭和56年度に実施したのが、第2次の発掘調査である。ただ、この調査は遺跡の範囲確認調査を兼ねており、制約あるなかでトレンチとテストピットによる調査方法をとった。

第3～5次の発掘調査は、県道の拡幅工事に先立つ発掘調査であり、今回の報告対象である。第3次調査は平成7年10月3日～平成8年2月9日に実施し、調査面積は1,500㎡である。この調査は上・下層2面を掘削し、古墳時代の流路および井堰と土坑や飛鳥～奈良時代の流路等を確認した。

第4次調査は平成11年10月18日～同年11月22日に実施し、調査面積は850㎡である。この調査では第3次調査に連続する流路を確認している。

第5次調査は平成12年10月18日～12月4日に実施しており、面積は600㎡である。である。奈良時代の掘立柱建物、流路及び杭列、土坑を検出した。流路については４次調査区から連続するものが確認できた。

なお、県道松阪一志線の改良工事に伴う堀田遺跡の発掘調査は、平成14年度も実施しており（第6次）、この事業にかかる調査がようやく終結することとなった。

この間、平成8年11月にも農道改良に伴う試掘調査を実施した。この調査では、平安時代の土師器・須恵器、中世の山茶椀・施釉陶器などが出土している。

2　調査の経過と方法

(1) 調査区の設定

第３次・４次・５次調査区ともに県道のセンターライン（南北方向）とほぼ平行に落としたラインを基軸とし、東西、南北に各４ｍのメッシュを区切った。この基軸を使用し、第3次は西から東へのアルファベットのＡ～Ｄを、北から南へは数字の1～26を割り振った。隣合せの4・5次調査区は西から東へアルファベットのｚ～ｅを、北から南へ数字の1～24を割り振った。それらの組み合わせで各グリッドを呼称した。したがって、グリッドの設定については、第4・5次調査区は同一基準で、第3次調査区は別基準で行っていることになる。なお、このグリッド設定は任意であり、国土座標との対応はない。

(2) 掘削の方法

掘削は表土及び一部の包含層掘削を重機で行い、それ以下の遺構掘削は人力で行っている。

(3) 調査の方法

調査は、調査区が狭まり、しかも湧水に看まわれる箇所から着手し、排水管理を行き届かせて後、遺構検出にあたった。一部は北半、南半と分割し、移行しながら調査を進めた。

(4) 図面作成について

3次調査は遺構平面図を縮尺1／50で作成し、断面図は1／20で作成した。4次調査では平面図と断面図を1／20で作成した。5次調査の土層断面は4次調査区から連続する南壁と単独の西壁で観察し1／20で作成した。また、個別遺構のうち重要なものについては、それぞれ1／10あるいは1／20で作図を行ったものもある。

(5) 遺構写真について

調査区全景と主な遺構写真を６×９ウィスタカメ

ラ、6×6ペンタックス、および35mmニコンカメラを使用した。フィルムは、モノクロはネオパンss、ブローニーカラーはPROVIAⅡ、35mmカラーリバーサルはSENSIAⅡである。

[調査日誌（抄）]

＜第3次＞平成7年

9月27日　表土掘削予定、調査計画の打ち合わせ。事業担当課の久居土木・藤田組・埋文とで3者協議。

10月3日　重機による表土掘削。砂層中に溝、土坑等を検出。土師器甕、山茶椀出土。

10月4日　発電機、ベルコン等設置。

10月9日　安全対策。表土掘削、中央部まで終了。基準杭設定。

10月11日　人力掘削開始。南側の25列グリッドから古銭出土。

10月16日　23～20列グリッドの遺構検出。包含層より石鏃、瓦、須恵器杯身出土。

10月23日　17～19列で重機掘削開始。南側の溝掘削。

10月25日　北半部の重機掘削続行。

11月1日　17～16列のPit掘削。遺物出土状況写真撮影。

11月8日　上層遺構検出面までの調査区東壁土層断面図作成。

11月14日　22列トレンチ掘削。下層から木製品（垂木・杭・槽）、古式土師器出土。

11月16日　13～12列掘削。溝肩で杭列を検出。

11月21日　西村・山田康弘で23～17列の遺構を平板測量。

11月22日　調査区南半部清掃。6×7ペンタで全景写真撮影。

11月30日　下層南壁の土層断面図作成。

12月1日　上層の溝を完掘。井戸の断ち割り実施。

12月4日　ベルコン撤去。調査区北半部、全景写真撮影。

12月5日　北半部の遺構を平板測量（中川・山田）。

12月14日　18～19列グリッド掘削。溝から木製品出土、出土地点をカードに記録。

12月18日　17～18列グリッド掘削。東壁から中州状の地山を検出。木製品の地点を平板測量。

12月26日　重機による埋め戻し。（北半部のみ）

平成8年

1月5日　下層の溝掘削再開。粘土層までで止める。

1月9日　11列トレンチ掘削完了。土層図作成。木製品の取り上げ、水槽へ一時保管。

1月16日　下層溝の木製品の平板測量。円筒埴輪出土。

1月22日　立命館大学青木哲哉氏来訪、現地土層観察、分析。

1月30日　木製品の取り上げ。発掘用具片付け。調査区北半部の全景写真撮影。作業員終了。

2月2日　下層溝の重機による下層確認。

2月6日　下層東壁、土層断面図作成。

2月8日　下層溝の層序確認。

2月9日　土層断面図の補足、現地調査終了。

＜第4次＞平成11年

10月18日　重機による表土掘削。東側溝から布留甕出土。

10月20～22日　表土掘削続行。ダンプで搬送。

10月25日　作業員の人力掘削開始。流路SD41を検出。水田？検出。

10月26日　SD42検出。水田上層に洪水痕を確認。

11月2日　SD42からS字甕多数出土。13ラインまで検出終了。

11月5日　SD413層から須恵器出土。北半部の掘削ほぼ終了。

11月8日　SD55を検出。SD42の遺構実測、遺物取り上げ。

11月11日　南半部の遺構掘削。清掃。掘削作業終了。東壁土層断面図作成。

11月16日　発掘用具片づけ、現地作業終了。土層断面図作成続行。

11月17日～19日　遺構実測。SD41、杭列1・2を1／20で作成。

11月22日　レベル測量。流路の確認。道具撤収。現地調査終了。

＜第5次＞平成12年

10月18日　一部重機で表土掘削、東壁湧水のため補強する。

10月19日　北端の黒褐色土層を重機掘削。土師器、須恵器出土。

10月23日　調査区水没。トイレ、テント設営。
10月26日　表土掘削２日目続行。地区杭設定。
10月27日　地区杭設定続行。一部崩落が予想されるため土層断面図作成。
11月２日　排水管理。掘削予定打ち合わせ。川合、清水研修員測量研修。
11月６日　作業員14名で包含層掘削開始。21グリッドまで終了。ベルトコンベア設営。
11月７日　南北方向の大溝、柱列検出。
11月８日　南側調査区で溝、３条を検出。北側で落ち込み部分を掘削開始。
11月９日　遺構掘削開始。柱列は４×２間以上の掘立柱建物と想定。
11月13日　溝２条を掘削。大溝の護岸に杭列確認。
11月14日　溝を清掃後写真撮影。
11月15日　調査区拡張し、重機で包含層掘削。
11月16日　遺構平面図作成準備。紙配り図（11枚）を作成。
11月21日　遺構平面図５枚を作成完了。レベル終了。
11月22日　杭列北側部分から土坑を検出。土師器高杯他を確認。
11月24日　掘立柱建物（検出）及び土坑の完掘写真撮影。
11月27日　調査区全景、遺構別写真撮影。発掘用具片付け。掘立柱建物（掘形）掘削完了。平面図作成。
11月29日　平面図作成（８枚）続行。掘立柱建物各柱穴の断ち割り。土層断面を写真撮影。ベルトコンベア、発電機他を回送。
12月１日　杭列断面図作成後各杭を取り上げ。土層断面図作成、補足終了。
12月４日　下層確認のため、重機掘削。５次調査終了。（２地点とも遺構遺物ともになし）ＪＲ付近の試掘調査実施。

なお、第３次～５次調査は嬉野町、一志町、三雲町、津市在住の方々の協力を得た。

３．文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

［第３次］

・ 法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成７年７月20日付け、道建第825号（県知事通知
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成７年９月１日付け、教文第1710号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成８年３月18日付け、教文第18－17号（県教育長通知）

［第４次］

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成７年７月20日付け、道建第825号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成11年11月30日付け、教生第1244号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成12年３月９日付け、教生第4－59号（県教育長通知）

［第５次］

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長あて）
平成12年10月19日付け道整第236号（県知事通知）
・法第58条の２第１項（県教育長あて）
平成12年10月20日付け教埋第237号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（久居警察署長あて）
平成13年1月19日付け教生第229－11号（県教育長通知）

Ⅱ　堀田遺跡とその周辺環境

1　堀田遺跡の位置

堀田遺跡（fig. 1－①、以下遺跡は番号のみ表記）は、一志郡嬉野町宮古字築山・堀田ほかに所在する遺跡群である。嬉野町と一志町の境目にあたる、通称「小鳥山」山塊から東方へ派生する低丘陵の北東裾部で、一志郡各所の最奥部を水源とする雲出川と、その支流で嬉野町の最奥部から流れ出る中村川とが合流する地点付近の標高約10mの低位段丘上である。つまり、当遺跡は中村川の下流域であるとともに、雲出川が下流域にさしかかる地点である。雲出川は、旧伊勢国（以下、「伊勢」と表記）のほぼ中央部を流れる河川で、この川を遡れば、青山峠を経て旧伊賀国へと至る。

一志郡は伊勢のなかでもとくに重要な遺跡が数多く認められるところである。堀田遺跡周辺の歴史的環境については別に詳述している[1]ので、ここでは、堀田遺跡の中心的な時期である古墳時代と飛鳥・奈良時代の歴史的状況を中心に概観する。

2　古墳時代の堀田遺跡周辺

中村川流域は、古墳時代前期の前方後方墳が4基以上築造されるという極めて特徴的な様相を示す地域である。堀田遺跡近隣では、当遺跡の南西にある通称天花寺丘陵で古墳時代前期から継続的に古墳群が形成されており、前期に相当する西野古墳群②や、前期から中期前葉に相当する片野池古墳群③などがある。天花寺丘陵の南支脈には、全長約40mの前方後方墳である筒野1号墳④が立地する[2]。

天花寺丘陵内には以後、馬ノ瀬古墳群⑤・小谷古墳群⑥・清水谷古墳群⑦などの中～後期にかけての群集墳が形成され続け、濃密な古墳分布を示している。直径約20mの小規模円墳である小谷13号墳からは、三角板鋲留短甲や鉄製武器・工具類などの優秀な副葬品が出土した[3]。これまでに調査された西野・片野池古墳群などの資料から、天花寺丘陵内では古墳時代を通じてかなりの基盤を有した勢力が造墓活動を行っていたことが判明しつつある。

今回の堀田遺跡で確認された灌漑施設などは、これら堀田遺跡近隣に築かれた古墳との関連でも注目できる。これは、前方後方墳である西山1号墳⑧と、その麓に形成された片部遺跡⑨[4]で確認された大規模灌漑施設との関係にも窺うことができる。

3　飛鳥・奈良時代の堀田遺跡周辺

10世紀前葉頃に成立した『倭名類聚抄』[5]には、一（壱）志郡内の郷として「八太・日置・島抜・民太・神戸・須可・小川・呉部・宕野・餘戸」が見え、郷名ではない「神戸」と「余部」を除くと、一志郡には8つの郷が存在していたことになる。現在の地名から現地比定の可能な郷を見ると、「八太」が一志町八太、「日置」が一志町日置、「島抜」が津市雲出島貫町、「民太」が松阪市美濃田町、「須賀」が嬉野町須賀となる。堀田遺跡遺跡付近は八太郷か、あるいは、小川郷が嬉野町中川付近に比定できるとすれば、小川郷になるのかも知れない。

7世紀後半から8世紀にかけて、一志郡内には古代寺院が密集して建立されている。中村川流域で5寺院、雲出川中流域の一志町側で2寺院が確認されている。また、場所の特定こそされていないものの、雲出川中・上流域の白山町川口には「川口関跡」の存在が確かである[6]。さらに、文献史料からは「一志駅家」の存在も知ることができる[7]。

堀田遺跡付近では、天花寺廃寺⑩・中谷廃寺⑪・一志廃寺⑫が極めて近距離に密集する。このうち天花寺廃寺は発掘調査され、法起寺式の伽藍配置であることや、複線鋸歯文を施す広義の川原寺式の軒瓦を出土することなどが確認されている[8]。一志廃寺付近には「郡一」の小字名、堀田遺跡近隣には「郡市神社」がかつて存在しており、この地域が古代律令制下における一志郡の中枢部であったことを物語っている。

当該時期の集落跡は、中村川流域に広範囲に展開している。堀田遺跡からは畿内系暗文土師器が多数出土しているが、近隣の片野遺跡⑬や平生遺跡⑭で

fig. 1　遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院「大仰」1：25,000による〕 ▲＝前方後方墳 ■＝古代寺院

も同じ傾向がある。[9] とくに片野遺跡では、近年の調査で土器生産遺跡と考えられるような状況が確認されており、畿内系暗文土師器の当地での状況が改めて注目されている。

5　小結

ここでは堀田遺跡近隣の古墳時代と飛鳥・奈良時代に限定して遺跡の状況や歴史的背景を見てきた。この時代に限っても堀田遺跡近隣には重要な遺跡の多いことが理解されよう。

註

(1)　伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1996年）

(2)　伊勢野久好ほか『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年）

(3)　三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報』平成11年度（1999年）

(4)　和気清章ほか『片部遺跡発掘調査現地説明会資料』（嬉野町教育委員会　1995年）

(5)　京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（1968年　臨川書店）

(6)　川口関に関する検討は、山田猛「川口関小考」（『かにかくに』八賀晋先生退官記念文集　1998年）、田坂仁「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（上）」（『斎宮歴史博物館研究紀要』10　2001年）など。

(7)　田中家本『春記』長暦２（1038年）年９月条。古瀬奈津子「『田中家本春記』について～長暦２年８・９月条の紹介」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　1993年）、および榎村寛之「十一世紀斎王群行の社会的背景～『田中家本春記』に見る伊勢への旅～」（『Miehistory』vol. 8　1996年）

(8)　山田猛「天花寺廃寺」（『昭和５５年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981年）ほか

(9)　早川裕己「堀田遺跡」（『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1982年）、吉村利男『平生遺跡発掘調査報告』（平生遺跡発掘調査団　1976年）、福田哲也・野口美幸『平生遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）など

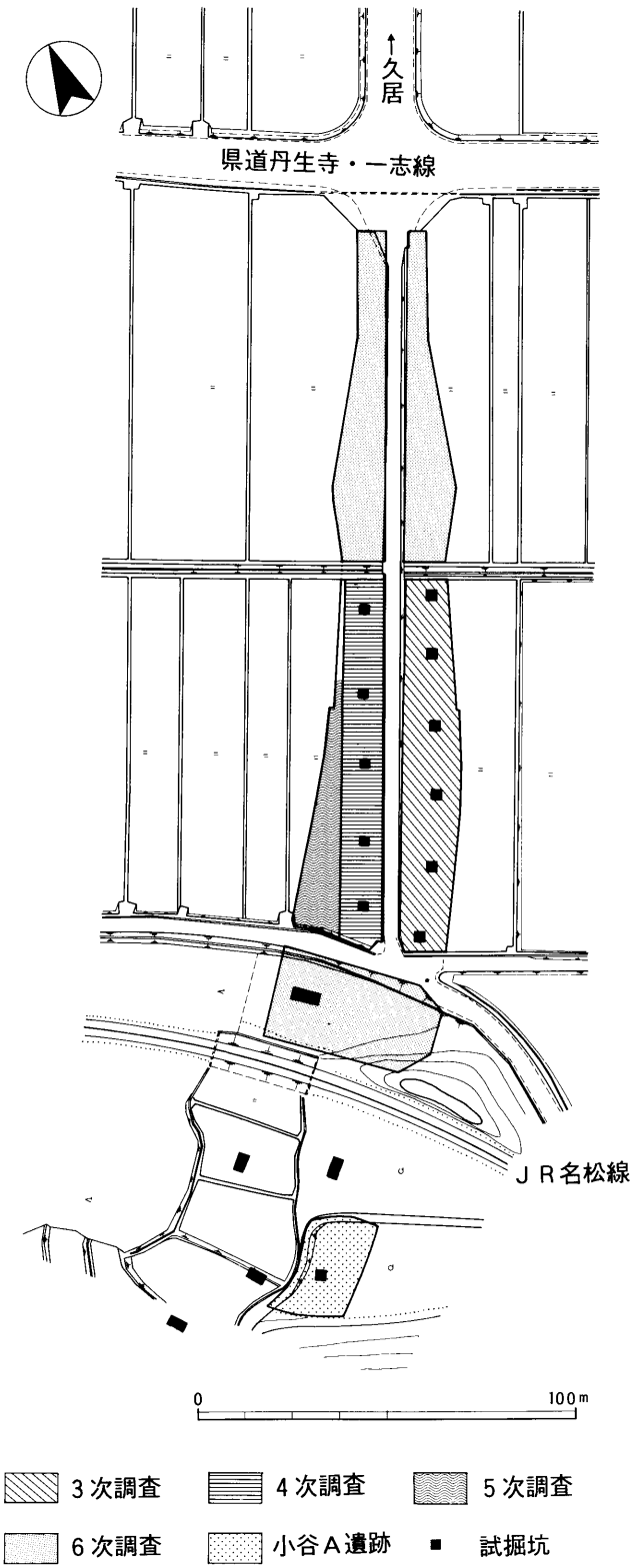


fig.2　事業地内調査区位置図（１：2,000）

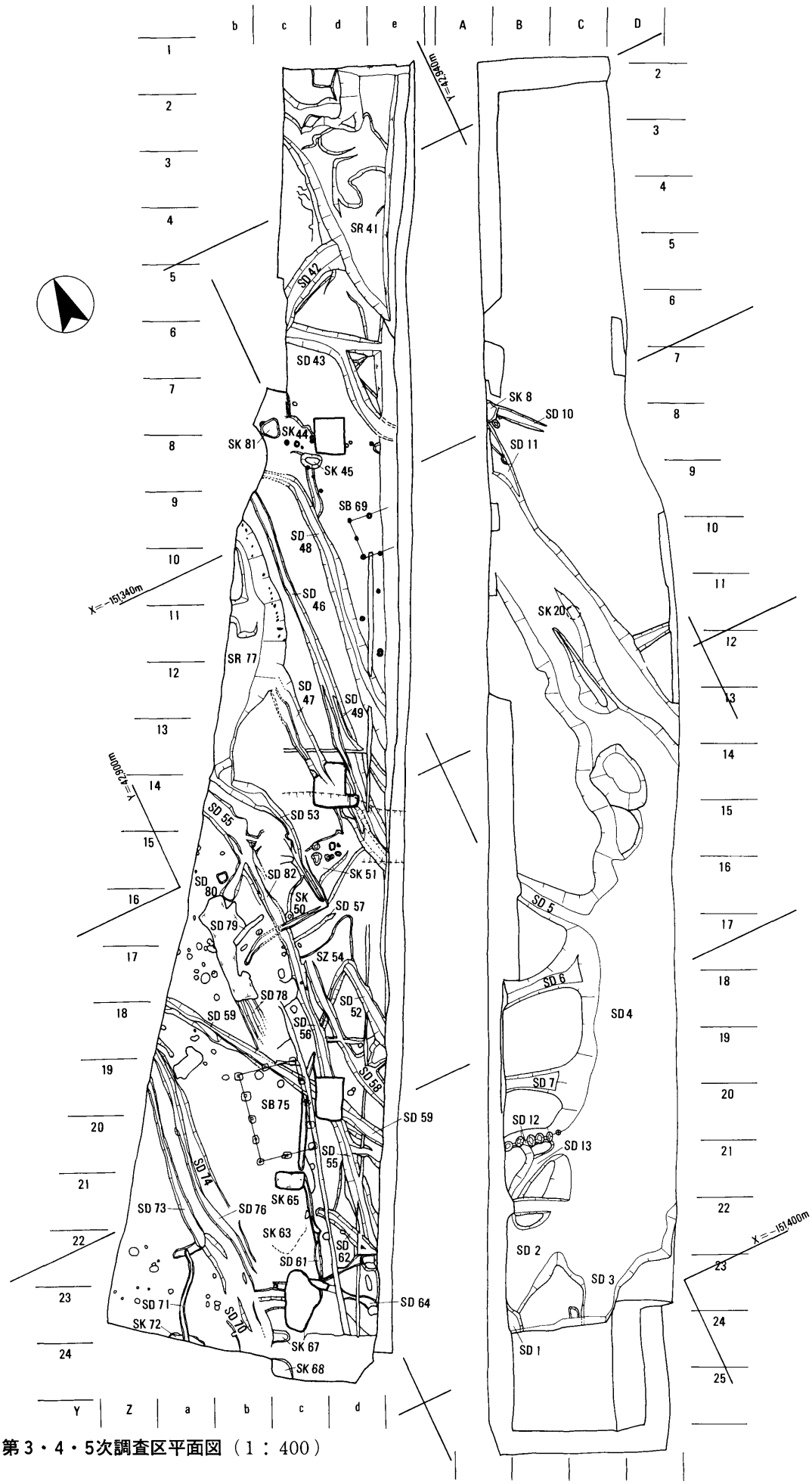


fig. 3　第3・4・5次調査区平面図（1：400）

Ⅲ　第３次調査

１　遺　構～第３次調査区

(1)　層序

基本的な層序は第3次概報でも記述したとおりで、以下順に整理する。

第１層：明灰色土（耕作土）
第２層：黄褐色土（床土）
第３層：淡灰色砂質土（粗砂混入）［遺物包含層］
第４層：灰褐色シルト［上層地山］
第５層：青灰色シルト［下層地山］
第６層：有機層と砂の互層
第７層：暗灰色粘土
第８層：青灰色粘土
第９層：灰褐色砂質土

(2) 下層遺構

確認した遺構は古墳時代の土坑２基と弥生時代中期から古墳時代にかけての流路・溝が７条、井堰が２基である。概報と重複する部分はあるが、その後整理中に時期決定した遺構もあるので一通り記述する。なお、概報で記述した遺構についても本報告で再度整理し報告する。

［弥生時代中期］

流路ＳＤ３　D22グリッド、調査区東壁で確認した。幅3.2m、深さ0.9mで断面は幅広のＵ字形である。検出面は不明瞭であったが、シルト層が帯状に西に延び、やや西側が低くなっていたことから西流する遺構である。SD4に切られる。白色砂と有機層の互層である埋土から細頸壷(27)が出土している。

［古墳時代前期］

溝ＳＤ１　上層の撹乱が検出面まで影響し、遺構全体が確認できなかったため、大規模なトレンチを掘削した。その結果、調査区南壁断面で確認した遺構である。おそらく北に流出する遺構である。SD20が重複する。侵食作用によりB～C23･24グリッドに微高地が形成されている。S字状口縁台付甕（以下、「S字甕」、37）が出土している。

溝ＳＤ２　A23グリッド、西壁付近で検出した。ＳＤ1と重複する。最大幅は6.4mである。概報段階で自然木の流れ込みと考えていたものは灌漑施設の「しがらみ」であると判断した。有機層からＳ字甕(36)が出土している。

流路ＳＤ４　A8～D22グリッドまでの延長58m間で検出した遺構である。概報で述べたが、埋没層は大別してⅠ～Ⅳ期に分かれる。Ⅰ層からは古墳後期中心の土器が出土した。Ⅱ～Ⅲ層では前期のS字甕を確認した。Ⅳ層では布留式土器が出土した。

なお、概報でも記述したが、第Ⅳ層埋没後にD16～21グリッドに青灰色シルトが分厚く堆積し、中州（流路の東肩）が形成された。

溝ＳＤ５　Ｂ16グリッドで確認した。幅2.3m、深さ0.4mである。ＳＤ４へ流出する。

溝ＳＤ６　ＳＤ５の南側、Ｂ17から18グリッドで検出した。幅は２m、深さは0.4mである。
東へ流れ、ＳＤ４と合流する。

溝ＳＤ７　さらにＳＤ６の南側、Ａ・Ｂ19グリッドで検出した。幅1.8m、深さ0.5mである。ＳＤ５・６と同様にＳＤ４へ流れ込む。

井堰１　C21～22グリッドで確認した。幅3.2 mの遺構である。矢板が0.1～0.18m間隔で打ち込まれていた。これらの列に平行して、東側に丸杭を１m間隔で検出した。部材の小片が散乱していたので他にも構造物があったとも考えられる。

井堰２　Ｃ19グリッドで検出した。幅は2.3mで、矢板は約0.3m間隔で打ち込まれていた。構造は上記1と同様である。SD4と同時期に機能していたとみられる。

(3) 上層遺構

20列グリッド以南では、第3層（灰褐色土）の堆積状況が不安定であった。これを奈良時代の遺構検出面と判断したが、南端では撹乱を受けて遺構が確定しにくかった。その後、整理段階で確定した遺構もあった。古代の遺構が主要で、近世のものもある。遺構数は溝が８条と流路が８条、土坑が３基である。

以下、概略報告する。

溝ＳＤ１　C･D24～26グリッドで検出した。幅0.6m、長さ8mを検出した。時期的には山茶椀等の鎌倉時代の遺物も見られるが、掘削時期は古代と考えられる。

流路ＳＤ２　C･D23～26グリッドで検出した。23列付近ではSD8と重複し、消滅する遺構である。最大幅は3.5mである。

流路ＳＤ３　東壁のC24グリッドで検出した。西から流入するＳＤ４と交わる。

流路ＳＤ４　A～D24グリッドで検出した東西方向の遺構である。

流路ＳＤ５　B23･24で検出したがSD2の影響を受けて前後関係が不明瞭であった。幅は0.8mである。

流路ＳＤ６　A18･19グリッドで検出した。幅1.8mで北流し、SD9に合流する。底から須恵器壷(316)が出土している。

流路ＳＤ７　A･B16グリッドで検出した。SD6と同方向に流れる。

流路ＳＤ８　上層でも最大の遺構で、幅10m、深さ0.5mである。南北方向に流れる遺構である。埋土(茶褐色砂質土)から暗文土師器杯(120～131、133～134、143～152)･皿(158～174)に加え、概報段階で未報告の須恵器杯(181～251)が出土した。

流路ＳＤ９　A・B18グリッドで検出した。深さ0.3mの浅い流路である。東壁に近い、ＳＤ８の底で確認した。　(中川)

遺構番号	性　格	時　　期	次数	グリッド	規　模(方向)	遺　　物	特　記　事　項
SD1	溝	中世初頭	3次	C24･25、D26	深さ0.1m	山茶椀片、土師器片	SD2を切る。
SD2	流路	中世初頭	3次	C･D23～26	深さ0,5m　N62°E	土師器	
SD3	流路	中世？	3次	D23～24	深さ0.2m　E5°N	土師器	埋土は灰色土。
SD4	流路	古代末～中世？	3次	A～D24	深さ0.2m　N28°W	土師器	
SD5	流路	平安末	3次	B23～24	深さ0.1m　N65°W	土師器	
SD6	流路	奈良前期	3次	AB18～19	深さ0.1m　N65°E	須恵器壷	南北方向
SD7	流路	平安末	3次	A～B16	深さ0.1m　E0°N	土師器小片	南北方向、埋土は単層。
SD8	流路	飛鳥～奈良	3次	A～D7～19	深さ0.3～0.4m	土師器杯、皿、須恵器杯	南北方向、
SD9	溝	飛鳥	3次	A～B18、B17	深さ0.3m	土師器甕	SD8の下層で確認
SK9	落ち込み	飛鳥？	3次	B11		土師質杯、土師器甕	検出後消滅
SD10	溝	奈良後期末	3次	B15	深さ0.2m　N67°W	土師器鉢	SD8と交差する。
SD11	溝	近世以降？	3次	B13～14、C13	深さ0.1m?	土師器片、陶器椀	SD8を切る。検出後消滅。
SD12	溝	近世以降？	3次	B12～13	深さ0.2m　E5°N	陶器片、陶管、祥符通寶	SD8を切る。
SD13	溝	近世以降？	3次	C～D8～9	深さ0.8m	陶器小片	
SR14	流路	平安初	3次	B～C13	最大幅1.8m	須恵器杯身・火打ち石	SD8の直上。
SD15	溝	飛鳥	3次	D12	深さ0.25m	土師器杯、甕	
SK16	土坑	奈良末～平安初	3次	B14	南北2.7m　深さ0.3m	須恵器小片	SD11の下層に相当。
SD17	溝	平安？	3次	D10	SD12に平行	皇宋通寶	検出後消滅。
SK18	土坑	飛鳥	3次	B9	2.2m×1.5m、深0.4m	土師器杯、甑	SD8の東肩を掘削。
SD19	溝	飛鳥	3次	A11･12、B12	深さ0.15m	土師器小片	
SK20	土坑	古墳後期？	3次	B11	深さ0.4m	土師器甕	SD8の底に掘削した遺構
下層SD1	溝	古墳前期	3次	A23～24	深さ0.5m	S字甕	調査区南壁断面と一致。
下層SD2	溝	古墳前期	3次	A～B22～23	深さ0.6m	S字甕	しがらみ?を検出。
下層SD3	溝	古墳前期	3次	D21～22	深さ0.9m	S字甕、土師器高杯	南へ方向転換する。
下層SD4	流路	古墳前～中期	3次	A～D9～23	最深1.2m	弥生土器・土師器	容器･垂木･杭等多量の木製品が出土。
下層SD5	溝	古墳時代	3次	B～C16～17	深さ0.8m	土師器甕小片	SD4に流入。
下層SD6	溝	古墳時代	3次	B～C17～18	深さ0.4m	土師器小片	SD4に流入。
下層SD7	溝	古墳時代	3次	B～C19	深さ0.2m	土師器小片	SD4に流入。

tab. 1　第３次調査区遺構一覧表

2　出土遺物～第３次調査区～

第３次調査区から出土した遺物は、整理箱にして約80箱である。時期的には縄文時代晩期から中世にまで及び、古墳時代前期の土器が最も多い。土器が大部分で、若干の木製品・石製品などを含む。

以下、各調査区ごとの出土遺物を、遺構単位となるものを中心に記述する。個々の土器の詳細については、遺物観察表（tab.２～10）を参照されたい。

a　石器（１～４）

遺構には伴っていないが、石器が数点出土している。

１～３は石鏃。いずれもサヌカイト製で、無茎式のものである。縄文時代相当のものと考えてよかろう。４は磨製石斧で、緑泥片岩製。刃部の破片である。弥生時代のものであろう。

b　縄文土器（5～15）

数点の縄文土器が出土しているが、これらも遺構には伴っていない。流路などに混入していたものである。

5～15は、いずれも縄文時代晩期に相当すると考えられるものである。５・６は口縁部付近に沈線文様を施している。５はU字形の文様が少なくとも３単位以上は連続して施されており、その下は突帯状に隆起している。

7～15は、突帯文土器に相当する。7･8は五貫森式に相当するもので、突帯上には二枚貝による押し引き刺突文がある。15は体部屈曲部分の破片で、上部に条痕、下半にケズリが見られ、やはり五貫森式に相当しよう。12･13は馬見塚式に相当するもので、外面には二枚貝条痕が見られる。

c　弥生土器・古式土師器（16～35）

これらも、遺構には伴わずに出土したものである。

16･17･29は、弥生時代前期に相当する土器である。16･17の外面には半裁竹管による横線文が施されている。29の口縁端部には、刻目文がある。いずれも前期新段階に相当する、いわゆる亜流遠賀川系のものである。

18～21、24～28、30～35は、いずれも弥生時代中期に相当する土器である。20･21は粗雑な櫛描文が施されており、中期でも前葉に相当するものであろう。26は口縁部に凹線文を施すもので、中期後葉に相当する。

27は壺の頸部で、5条の複合櫛描文間に刻目文と斜格子文を線描し、さらにその上に棒状浮文を貼付し、その浮文上に押圧文を加えている。上部の複合櫛描文下端は、凹線状となっている。28は頸部片で、沈線を巡らした上に二枚貝縁辺部で刺突文を施している。

31･32は台付甕の脚台部で、中期後葉に相当するものであろう。

22は弥生時代中期末から後期初頭にかけての壺である。23は古墳時代前期に相当する、いわゆる瓢形壺である。櫛描横線文と二枚貝口縁部による山形刺突文が施されている。

d　古墳時代の土器類

大半が、流路ＳＤ４出土の土器である。

溝ＳＤ１～３出土土器類（36～40）　37･38がＳＤ１、36がＳＤ２、39･40がＳＤ３の、それぞれ出土土器である。36･37･39は、いわゆるＳ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」と呼称）で、36は雲出島貫遺跡における川崎志乃氏の分類（以下、川崎分類）[1]のＡ類に、37・39はＣ類に相当する。38は叩き目が施されている甕で、おそらくは平底になるものと考えられる。生産地までは言えないが、伊賀ないしはそれ以西の近畿地方からの影響を受けたものと考えてよい。40は高杯の脚部で、脚柱部には櫛描横線文が２ヶ所に施されている。

流路ＳＤ４出土土器類（41～118）　ここで採り上げた土器類には、土師器類・埴輪・須恵器類がある。第４次調査区の流路ＳＤ41は、このＳＤ４の続きである。同じ個体がＳＤ４・ＳＤ41にわたって出土したものもある。

41～43は小形壺。41は粗雑な整形で、口縁部が非

常に短い。一応小形壺とするが、壺のミニチュアと見ることもできる。42は鉢形を呈する。いずれも雲出島貫遺跡の編年による島貫Ｃ４期[2]（以下、この表現とする）に併行するものである。

44･45は高杯。44は杯部が椀形を呈するもので、島貫Ｃ3期古相に相当する。44は内弯する杯下部に外反する杯上部が付くもので、脚柱内面にはケズリが施される。伝統的な伊勢の土器系統には乗らないが、しばしば確認される器形である。島貫Ｃ４期からＤ期古相にかけての時期であろう。

48は手焙形土器の体部。体部最大径よりも下に突帯を貼り付け、斜め方向の刻目文を施す。

49～76はＳ字甕。49～60は、川崎分類の0類ないしはＡ類に相当するものである。脚台部のみであるが、72～74もＡ類相当のものと考えてよかろう。63･69はＢ類に相当するもの。63･70はＣ類の古い段階、64～66はＤ類の古いところ、67･68はＤ類の新しいところのものであろう。75･76は脚台部のみであるが、外面に残るハケメと脚裾内面の折り返しが明瞭であることから、Ｄ類い相当するものと考えられる。71は、体部下半のみであるが、Ｄ類の古いところに併行するものであろう。

Ｓ字甕の細部で、とくに重要と思われるところを触れる。口縁部外面に見られるハケ状工具による刺突文の施文方法を見ると、器壁に対して垂直に押圧するのみのもの（49）、押圧してわずかに押し引くもの（50･51）、押し引きが長いもの（52～58、60）、押し引きを施さないもの（59）がある。口縁端部の整形は、上端の面に対するヨコナデが弱いものがあり（49･50･52）、これは上記口縁部外面の押し引きが弱いものと概ね対応しているようである。

56は、口縁部外面の押し引き刺突文が棒状の工具によって施されており、これは頸部下の沈線施文具と同一と見られる。同じことは57・58などの押し引き刺突文と横方向「ハケメ」との関係にも見られ、これらは、体部に施される羽状ハケメの工具とは異なっており、それは69や70のように、より新しい段階のＳ字甕においても確認される傾向である。筆者も含め、これまで漠然と体部外面の横方向「ハケメ」を調整手法のひとつと見てきたが、これはどちらかといえば文様の比重が大きい手法として扱うべきかと考える。

71は、脚台部を欠損後、その付け根部分を研磨している。つまり、台付甕ではなく、「平底甕」ないしは「丸底甕」状に使用していると推測できる。74の脚裾部は、端部上方１～２cmのところから黒・赤変が認められ、炉内に脚裾を一部埋め込んで使用していた可能性がある。

77･78は丸底を呈すると考えられる甕である。いずれも口縁部は「く」の字形に屈曲して開く。

78は、口縁部および丸底と考えられる底部形態から、須恵器出現前後に近畿地方方面からの影響を受けた土器と考えられるが、外面に施されたハケメの状況からはＳ字甕を中心とした伊勢伝統の手法との関係も窺われる。その意味では折衷的な土器である。また、体部下半のケズリ手法は、台付甕消滅以後の伊勢において一般的な手法にもなる。このことから、この甕は伊勢における古墳時代後期以降の祖形ともいえるものである。

79～93は壺類。79～83は二重口縁壺で、口縁屈曲部に明確な擬口縁を持たない79～81と、明瞭な擬口縁を持つ82･83がある。79･80の口縁部には焼成後の円孔があり、蓋か何かと縛るためのものと考えられる。80の外面は部分的に赤みが残っており、当初は全体にベンガラで赤彩されていたものと考えられる。81は外面に煤、内面に炭化物が付着しており、壺形態であるものの、中に有機物を入れて煮沸用具として用いられたことが明らかである。80・81ともに体部下半に擬口縁を有しており、Ｓ字甕などと共通する土器整形技法に拠っている。83の内面にはヘラミガキが認められ、丁寧な作りのものである。84は、口縁部外面を見ると通常の広口壺であるが、内面は有段で二重口縁を意識したものとすることも可能である。

85･86は、体部上半から頸部に至る曲線がやや上広がりのもの。85はそのまま「く」の字形に開くもので、あるいは東海東部地域からの搬入品とも考えられる。86は、頸部が直立気味となり、口縁端部付近で急激に外反している。口縁部の内外面にはヘラミガキが見られる。弥生時代後期後半頃のものである可能性もある。

87･88は広口壺。88の頸部外面には、赤塚次郎氏

が「S字甕頸部調整技法」と呼んでいる[3]、S字甕に特徴的な調整手法と同種のものが認められ、S字甕との手法的同一性をうかがうことができる。89・90は壺の体部および底部で、広口壺ないしは二重口縁壺になるものと考えられる。

91は丸底を呈する壺で、口縁部はやや長で直線的に開く形態と考えられる。外面に煤が付き、これも煮沸用に用いられたものと考えられる。92・93は底部で、92は弥生後期のものかも知れない。

94～97は須恵器。94は無蓋高杯の杯部。外面には精緻な波状文がある。田辺昭三氏による陶邑編（以下、「田辺編年」と呼称）[4]のMT 15型式に併行するものであろう。95～97は蓋杯類で、95は杯身、96・97は杯蓋である。96の外面上部には十字形のヘラ記号がある。97の内面上部には同心円当て具痕が見られる。いずれも田辺編年のTK43型式に併行するものであろう。

fig. 7には、古墳時代前期後半頃と考えられる甕類を図示した。

98～102は尖底ないしは丸底の甕である。101・102は口縁部形態に布留形甕の伝統を残すもので、その他は外反して開く口縁部となっている。98・101は外面にケズリが見られ、98はさらに内面もケズリを施している。98は体部下半に明瞭な単位を形成する擬口縁があり、丸底を呈するとはいえ、台付甕の整形手法とも共通するといえる。100の体部外面にはハケメが見られるが、これはS字甕に見られるそれと使用工具や施し方などが類似している。

103～105は台付甕。これらは、体部外面に見られるハケメが羽状に施されていること、脚台部外面のナデ処理の方法などの点は、S字甕のそれと基本的に同じである。しかし、103・104に見られる口縁端部が内面に肥厚するという特徴は、口縁部全体が外反気味という点を除けば布留形甕の特徴に極めて類似する。完形土器であるからこそ台付甕と確認できたが、これがもしも口縁部片のみの個体であったら、布留形甕として扱われていたと考えられる。105では体部内面にケズリが見られ、これもS字甕など従来の台付甕には見られなかった手法である。

このように、ここで見られる丸底・尖底甕と台付甕とは、それぞれは形態的な系統こそ異なっているものの、細部形状や手法の点からは、極めて緊密な関係にあると考えられる。

fig. 8には、古墳時代前期中葉頃と考えられる埴輪類を集めた。

106～108は二重口縁壺形埴輪と考えられるものである。106は口縁部の屈曲部破片。屈曲部の擬口縁は摘み上げ状に明確に整形する。口縁部内面にのみベンガラと思われる赤彩が観察できるが、本来は口縁部内外面に施されていたものと考えられる。107は体部上半部分、108は下半部分で、両者は同一個体の可能性が高い。107の外面、および108の外面上部にはベンガラと考えられる赤彩がある。108下半には赤彩が無く、器表面の遺存状況から見て、もともと施されていなかったものと考えられる。108は底部に焼成前の穿孔がある。

111～118は朝顔形埴輪と考えられるものである。109～112は口縁部片、113は口縁部から壺形体部を経て円筒部上端部分、114～117は円筒部分体部片、118は基底部片である。これらの破片は、いずれも良質の土師器を思わせるほど薄く精緻なものである。これらの部分から見られるこの遺跡出土の朝顔形埴輪の特徴を見る。

まず、口縁部は二重口縁を呈する。口縁屈曲部には明瞭な擬口縁がある。口縁端部は、外面に面を有しながら上方に突出させている。これらは、手法的には深長古墳（松阪市）をはじめとする伊勢の二重口縁壺形埴輪のものと基本的に同一である[5]。

壺形体部部分は、その最大径で円筒部上端の突帯が取り付いているかたちであり、体部として独立させている印象はない。それは、円筒部から壺形体部にかけて、断絶のない連続成形であることからも窺えよう。全体をナデで調整し、三角形透孔を4方向に穿っている。

円筒部分には、突帯が巡らされていたことがわかる。それは、116の破片が突帯間のものであることから推測すると、突帯間は18cmほどであったと考えられる。ただし、壺形体部部分と円筒部分との境目付近は、あるいはもう少し近接した状態で突帯が存在していた可能性もある。突帯は、上部が突出する形態をなし、非常に丁寧に作られている。

体部外面調整には、壺形部分と同様、ハケメは用

いずに比較的丁寧なナデで全体を調整している。また、117の破片から、体部にも三角形透孔が穿たれていたことが分かるが、その上下突帯間関係は分からない。

なお、この遺跡から確認されている透孔は全て三角形であり、さらにそれには逆三角形状に施されたものは認められなかった。

基底部はやや外反し、接地部分の器壁は外側にやや突出する。基底部接地面には板状の圧痕が観察できる。基底部外面の下半にのみ横ハケが認められ、その上からナデを施している。

113～115の外面には、ベンガラと思われる赤彩が施されている。

なお、113・118は、第4次調査区の流路SD41（第3次SD4と一連の遺構）から出土したものが接合している。

e　飛鳥・奈良時代の土器類

大半が、流路SD4の上層部分に相当する、流路SD8出土の土器で、少量の他遺構出土土器などがある。

飛鳥・奈良時代の土器については、便宜上飛鳥・藤原・平城京の都城における土器分類と編年（以下、「都城分類」「都城編年」と呼称）[6]を併記する。

流路SD8（SD4上層）出土遺物（119～310）

SD8からは大量かつ良好な土師器・須恵器類が出土している。

fig. 9～11にかけての119～180は土師器杯皿類および高杯である。都城分類に対応させることができるのは、杯A（119～133）、杯B（136・137）、杯C（143～154）、杯H（157）、皿A（167～174）、皿B（158～162）、杯B蓋（175～179）である。それ以外のものは、上記分類の粗製品とするか、あるいは当遺跡を含む近隣地域の特徴的な土器類である。都城編年に対応するものは、都城編年の飛鳥Ⅳから平城Ⅱにかけてのものが見られ、その多くは飛鳥Ⅳと考えられるものである。近隣の雲出島貫遺跡における編年に対応させると、島貫E期古相2の古い段階[7]に概ね相当する時期でる。

杯Aには、119・132のように内面暗文の無いものもある。130・132の外面には焼成後に刻んだ文字？がある。130は「木屏」？132は「伊」、131は不明である。

134は、口径と器高の関係から杯Aと考えたが、内面の暗文が一段であることからは杯Cとするべきかも知れない。135は杯Aの粗製品と考える。

杯Bには、暗文を施す136と、外面底部にケズリが見られるのみの137がある。

138～142は、伊勢において古墳時代後期以降から伝統的に存在する小形鉢の系統にあたるものと考えられる。[8]古墳時代のものであれば小形鉢と呼称するべきものだが、ここでは杯類に含める。全体をオサエ・ナデで成形し、口縁部にヨコナデを施すものである。その点からは、典型的な杯Hである157とも基本的に共通するといえる。141のように、底部に木葉圧痕を持つものもある。141・142については、全体の形状は杯Aと関連すると考えられる。

杯Cは、内面に放射状の暗文を施すのを基本とする。144は内面に煤、153は内面に漆の付着が見られ、供膳以外の使用を行っているものも見られる。155・156は、暗文やミガキが欠落してるが、形態的にはいずれも杯Cの範疇で考えられよう。

158～162は皿Bと考えたが、161は杯Bの可能性もある。160の高台内面には焼成後に刻んだ「井」の字形の記号？がある。162の内面には煤が付着している。

163～165のような、ミガキや暗文の粗雑なものは、形態的には皿Aに相当しよう。166は、皿Cに相当するかと考えられる。

杯B蓋としたもののうち、175・176は高杯の可能性もある。180は粗製の高杯である。

これらの土師器類のうち、冒頭に示した都城分類に合致するものについては、精緻な暗文を施し、素地粘土も精製されたものを使用している。いわゆる「畿内系暗文土師器」[9]のなかでも、より優秀な一群として扱うことができよう。

fig. 12・13の181～274には、須恵器類を図示した。181～252は蓋杯類、253～274には高杯・壺・甕・その他を図示した。

蓋杯類には、古墳時代以来の伝統的な杯身形態と考えられるものは含まれていない。そのため、198～203は、側面形態が丸みを帯びているために杯蓋と見ることもできるが、上記理由により杯身として扱っ

た。例えば184は、形態的には蓋とするのにやぶさかではないが、頂部外面が研磨され、口縁部には油煙痕（タール状）が付着しており、灯明皿として用いられたものと考えられる。この時期のものは、形態的から杯蓋か杯身かの議論はあまり有効ではなく、どちらかといえば丸くても杯身と考えるのが妥当のようである。

杯蓋は摘みが付くもので、内面に返りのあるもの（181～ 190）と無いもの（191～197）がある。このうち、191は壺の蓋であろう。196の内面には墨書があるが、破断面に近く、記載内容は不明である。

198～234は高台の付かない杯身類で、都城分類では概ね杯Gに相当するが、215･217などは杯Aに相当すると見ることもできる。また、198～203が図示を天地逆転すれば、杯H蓋と区別ができないことは前述のとおりである。201･208の口縁部には油煙痕が付く。222の内側には墨と思しきものが見られる。223の内側には漆が付着している。226･230･234は非常に薄手のものである。224は焼成後の発色が赤く、この特徴は三重県では北勢地方によく見られるものである。

235～251は高台の付く杯B、252は皿Aに相当する。235の高台内面には「十」字形の墨書がある。

253は何かの蓋であろうか。よく分からない。254･255は高杯で、254の内面にはヘラ記号がある。256は擂鉢。257～259は壺で259の底部には「一」字形のヘラ記号がある。260は鉢。261～264は長頸壺と考えられる。261の体部は提瓶と同じ作りであり、いわゆる「フラスコ形壺」と考えられる。263は脚部が取り付くと考えられる。264は体部片で、施文はスタンプ状に押圧して施している。265は双耳壺、266は短頸壺。267は脚付短頸壺で、素地粘土には黒色の吹き出し物が多い。268は俵瓶と呼ばれているもの。269は杯蓋の転用で、口縁部と摘み縁辺部を除去して丸く成形しており、内面には墨の付着が認められる。

270は甕の体部片で、焼成後に刻んだ文字がある。比較的しっかりと書かれており、一文字構成のなかに「田」字形のものが見られることが分かるに過ぎない。271～274は壺・甕類である。

fig. 14 ･15の275～300には、土師器煮沸具類を図示した。

275～288は甕。口縁部が緩く外反して開き、底部は丸底になるものである。体部外面にハケメ・ナデ、内面にハケメ・ケズリを施す、この時期の伊勢では通有の形態のものである。283～287は長胴形を呈するものであろう。

289は口縁部がやや内弯して開くもので、いわゆる近江系のもの。伊賀方面からの搬入品[10]と考えられる。290は底部が平底を呈するもので、いわゆる濃尾型の長胴甕[11]と考えられる。これも搬入品の可能性がある。291は、体部は甕と同じ調整と形態であるが、高台が取り付く異質な形のものである。

292～297は把手付の甕ないしは鉢･鍋である。把手は、292のみが器壁に付加する方法で、他はいずれも器壁に穴を開けて取り付けるものである。292は口縁部に焼成前の穿孔がある。

298は甑で、底部は一文字に削り出している。299･300は竈形土器の破片と考えられる。299は突帯が付き、直径7cmほどの円孔を有する。300は円弧状の部分がある破片で、把手状のものが取り付いていた穴が残っている。

301～310には、上記以外の特徴的な遺物を図示した。301･302はミニチュアの鉢ないしは甕で、回転台成形の可能性がある。

303は土馬。下半身のみ遺存している。背中の部分に見られる剥離痕から、鞍が取り付いていたと考えられる。

304～308は土錘。309･310は砥石で、309には携帯用の穴が開けられている。

落ち込みＳＫ９出土土器(311～314)　311は土師質を呈する杯で、回転台成形である。極めて珍しい遺物といえる。312･313は土師器杯で、313は都城分類の杯Ａ相当である。314は土師器長胴甕。

これらは概ね７世紀後半頃のものと考えられる。

溝ＳＤ９出土土器(315)　土師器甕を図示した。７世紀前半代のものであろう。

溝ＳＤ６出土土器(316)　須恵器壺である。長頸壺で、脚台が付くと考えられる。７世紀代であろう。

溝ＳＤ15出土土器(317～319)　317は土師器甕。SD8出土のものと手法･形態ともに類似する。318･319は土師器杯で、ともに都城分類では杯Cに相当するが、319の方がより精緻である。都城編年では飛

鳥Ⅳに相当すると考える。

溝ＳＤ10出土土器(320)　土師器鉢である。外面にケズリが見られる。８世紀代のものか。

土坑ＳＫ18出土土器(321･322)　321は土師器杯で、都城分類では杯Ａに相当するが、あまり精緻なものではない。322は甑で、底部は一文字に削り出している。体部外面下半にはケズリがみられる。都城編年では、概ね平城Ⅰに併行しよう。

包含層・ピットなど出土土器(323～339)　ピットや包含層から出土した当該時期相当の土器をここで扱う。「包含層」とは、遺構認識前に出土したものを便宜的にこのように呼称しているものである。

323は土師器杯Ｂの小形のもの。内面には緻密な暗文が施されている。胎土・施文ともに極めて精緻なものである。324･325は土師器杯Ｃ。326は皿と考えたが、蓋の可能性もある。327は土師器杯蓋、328～330は須恵器杯蓋、331～334は須恵器杯身である。328の内面は研磨されている。330と331の内面には漆が付着している。334は杯Ｇの底部で、外面にはヘラで「十」字形の記号？がある。

f　包含層・その他出土の遺物

fig. 17の340～368には、飛鳥･奈良時代のものも含め、それ以降の時期における特徴的な遺物を抽出した。

340～343は須恵器。340は把手部分。342は瓦質を呈する脆弱な焼成である。

344は土師器で、須恵器の提瓶を模したものと考えられる。345～347は土錘。348･349は平瓦で、凸面には格子目叩き痕、凹面には布目痕と糸切り痕が見られる。近隣には天花寺廃寺があり、その関連の瓦であろう。

350～353は、稜線の敲打による摩耗状態から、火打石と考えられるものである。いずれもやや赤みがかった白濁色を呈する石英である。時期の特定は難しい。[12] 354は砂岩製の砥石で、荒砥と考えられる。

355は緑釉陶器の椀で、硬胎である。356～358は灰釉陶器の椀で、358は折戸53号窯式、357は百代寺窯式のものであろう。[13]

359～365は貿易陶磁器類。359は越州窯系の青磁椀。伊勢において越州窯系の製品が出土するのは極めて珍しい。360は白磁椀で、太宰府･博多分類のⅧ類に相当する。[14] 361～365は青磁椀で、いずれも竜泉窯系のもの。

366･367は土師器小皿。366は雲出島貫遺跡の分類では小皿ｄ３に相当し、[15] 12世紀前半代のものと考えられる。367は台付小皿で、11世紀後半頃のものかと考えられる。

368は銅製の鋳造容器。口縁部の上面幅が場所によって変化しているようである。中世後期以降、おそらくは近世のものかと考えられる。

369～374は銭貨。開元通寶(369)、祥符通寶(370)、皇宋通寶(371･372)、元祐通寶(373･374)である。いずれも中世に流通した渡来銭と考えられる。

（伊藤）

＜註＞

(1)　川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」(『嶋抜』Ⅲ　三重県埋蔵文化財センター　2001年)

(2)　註（1）に同じ

(3)　赤塚次郎『廻間遺跡』((財) 愛知県埋蔵文化財センター　1990年)

(4)　田辺昭三『須恵器大成』(角川書店　1981年)

(5)　伊藤裕偉「古墳時代前期における土器製作技法の検討～伊勢地域における事例を通して～」(『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年)

(6)　都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』(1992年) を参照した。

(7)　伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古代の土器」(註(1) 文献)

(8)　伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土器」(註(1)文献)

(9)　「畿内系暗文土師器」については、畿内の都城における出土土器と比較して、微妙な違いがあるにしても、大枠ではほとんど差が無いものを示す用語として用いる。つまり、都城出土土器のなかに「畿内系暗文土師器」を混ぜたら、ほとんど見分けが付かないもの、という意味である。

(10)　笠井賢治「北伊賀地域における古代前半期の土師器甕」(『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集　1999年)

(11)　考古学フォーラム座談会３(「長胴甕とその時代」『考古学フォーラム』11　1999年)

(12)　火打石については、小林克「火打石研究の現状と今後」(『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』日本考古学協会　2001年) を参照した。

(13)　斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」(『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３－』古代の土器研究会　1994年)

(14)　山本信夫「土器の分類」(『太宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市教育委員会　1983年)、森本朝子「博多出土貿易陶磁分類表」(『博多－高速鉄道関係調査（1）－』　福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　福岡市教育委員会　1984年)

(15)　伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」(『嶋抜』Ⅱ　三重県埋蔵文化財センター　2000年)

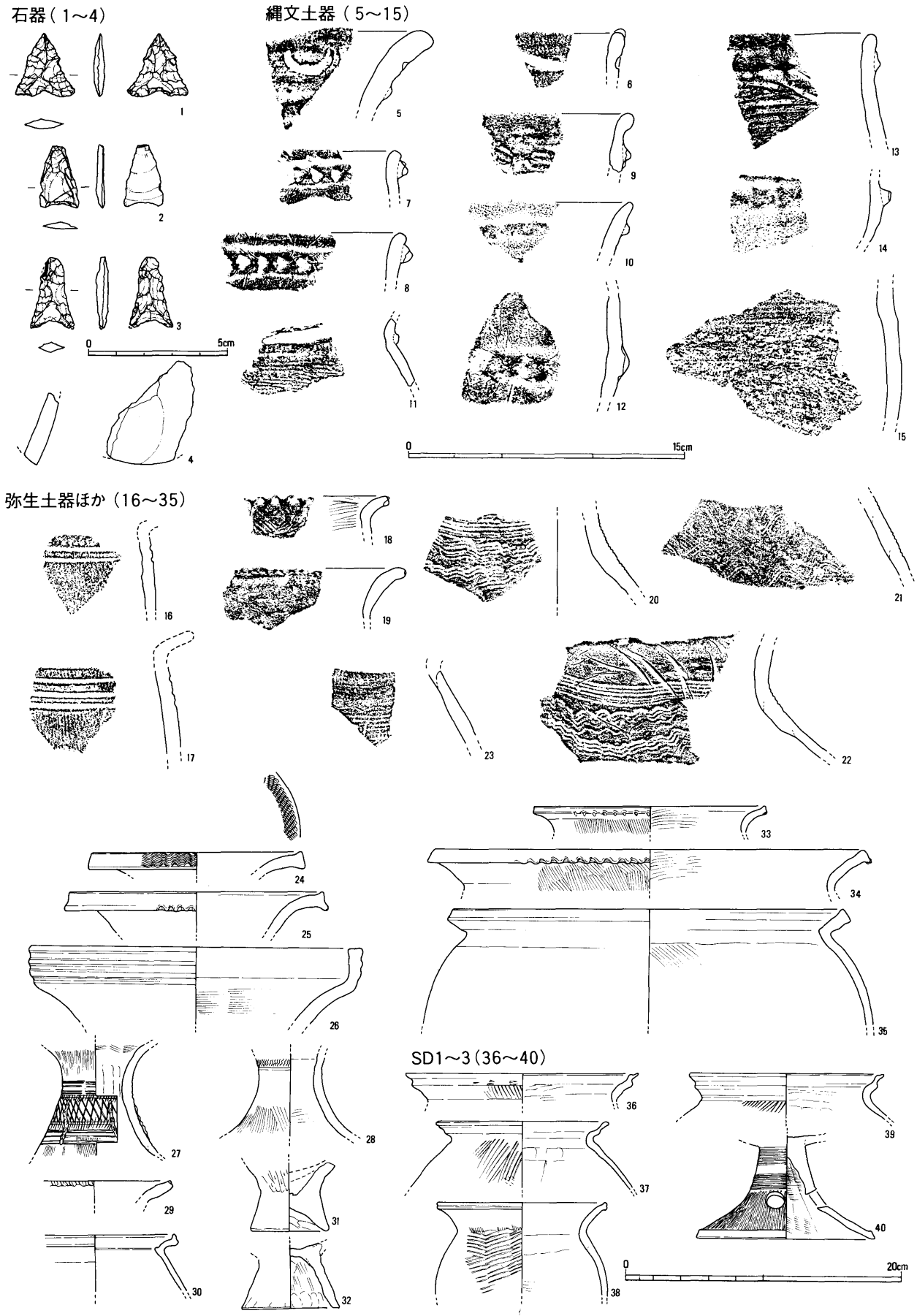


fig. 4　第3次調査区出土遺物(1)（1～3は1：2、4～23は1：3、他は1：4）

SD4（41～78）

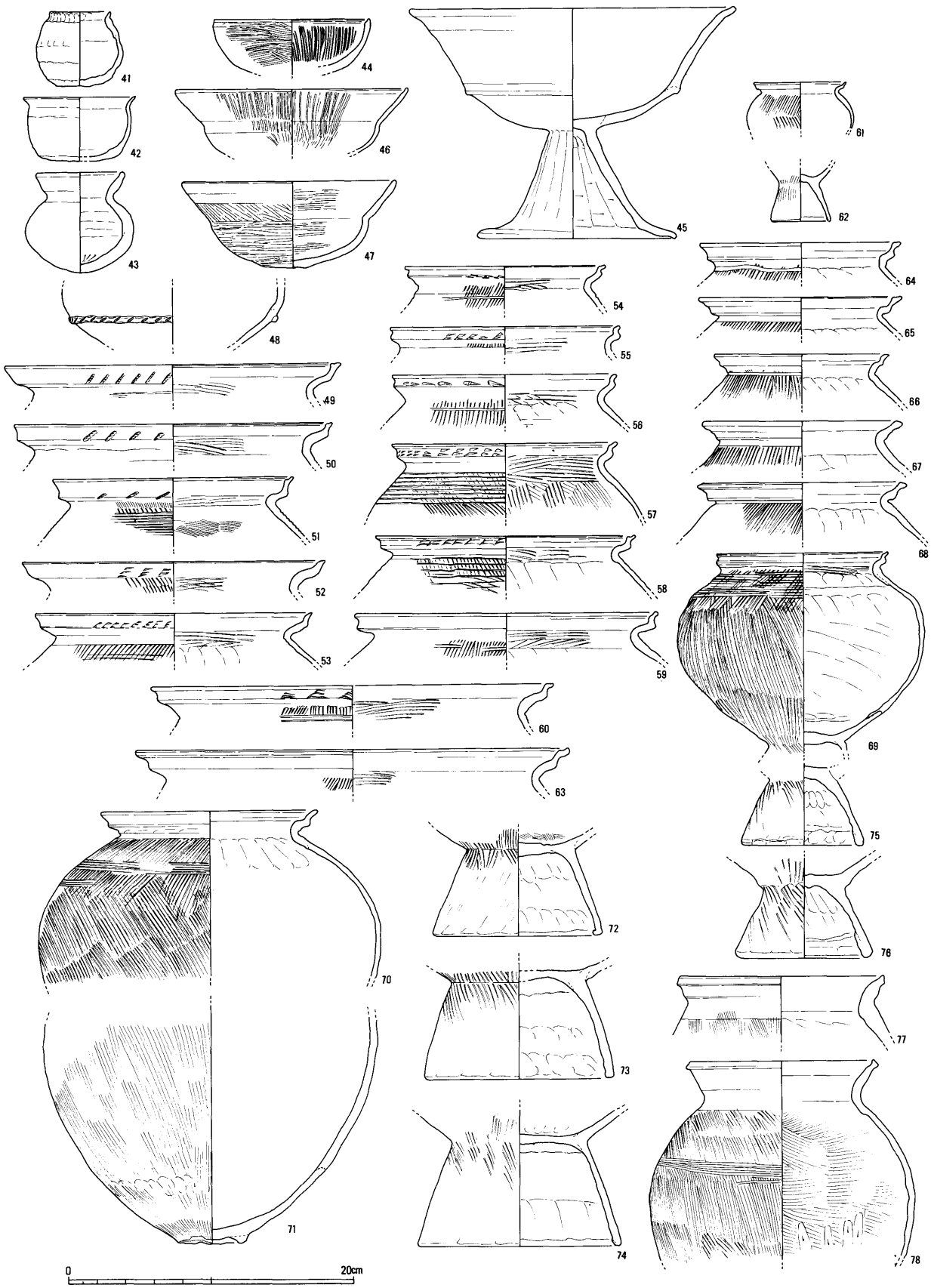


fig. 5　第３次調査区出土遺物(2)　SD４（１：４）

SD4 (79～97)

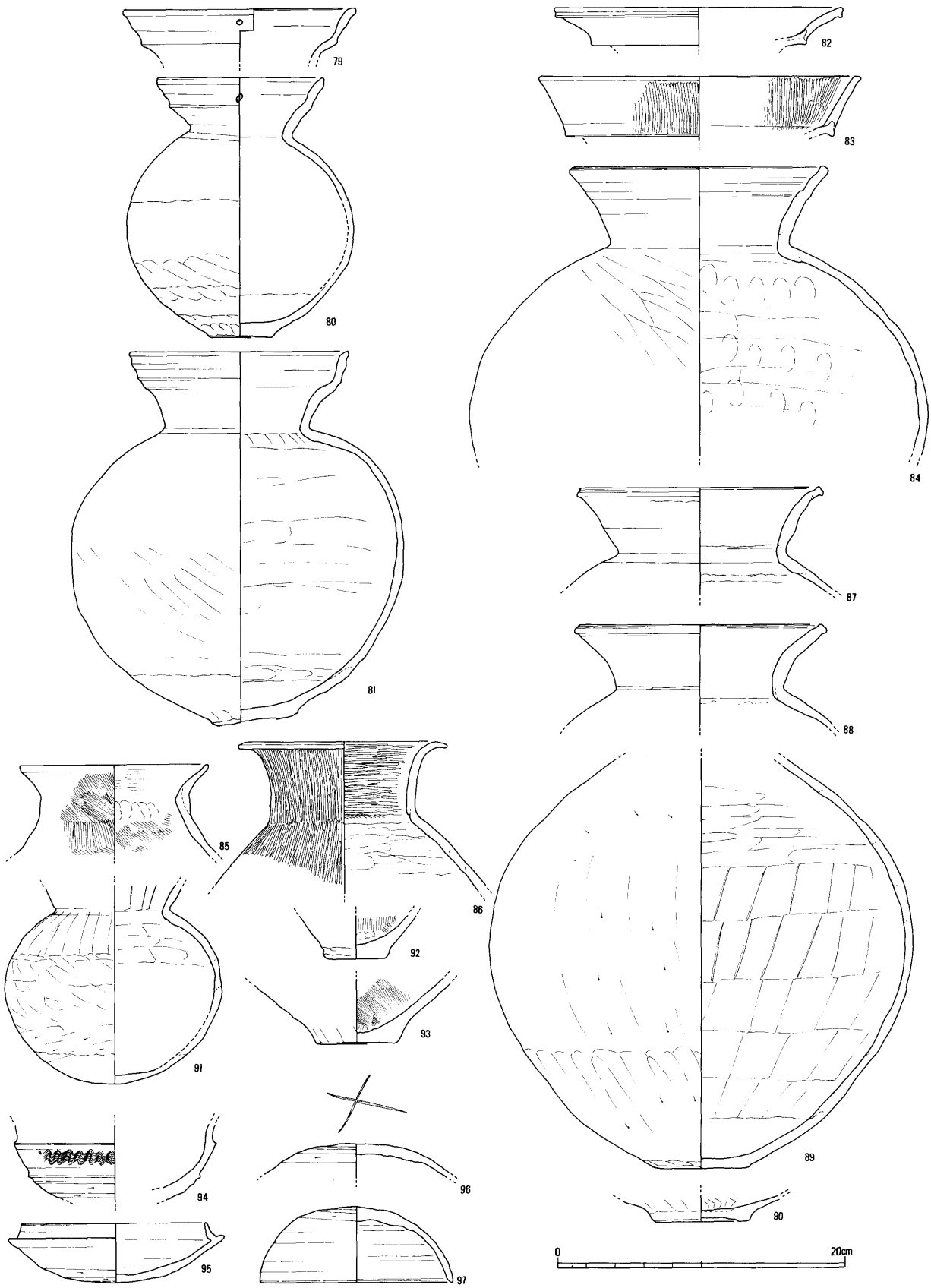


fig. 6　第3次調査区出土遺物(3)　SD4（1：4）

SD4 (98～105)

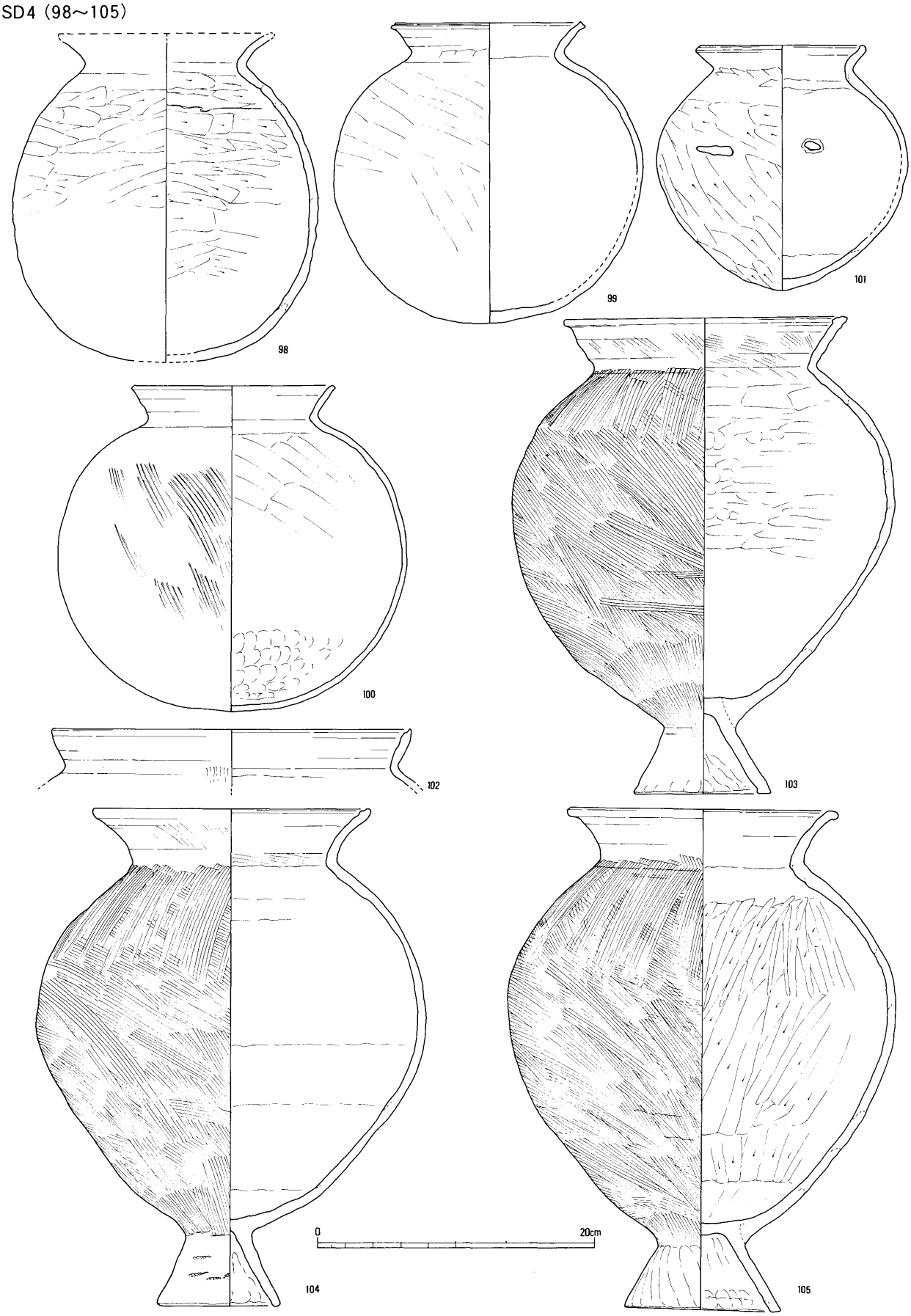


fig. 7　第３次調査区出土遺物(4)　SD４（１：４）

SD4（106～118）

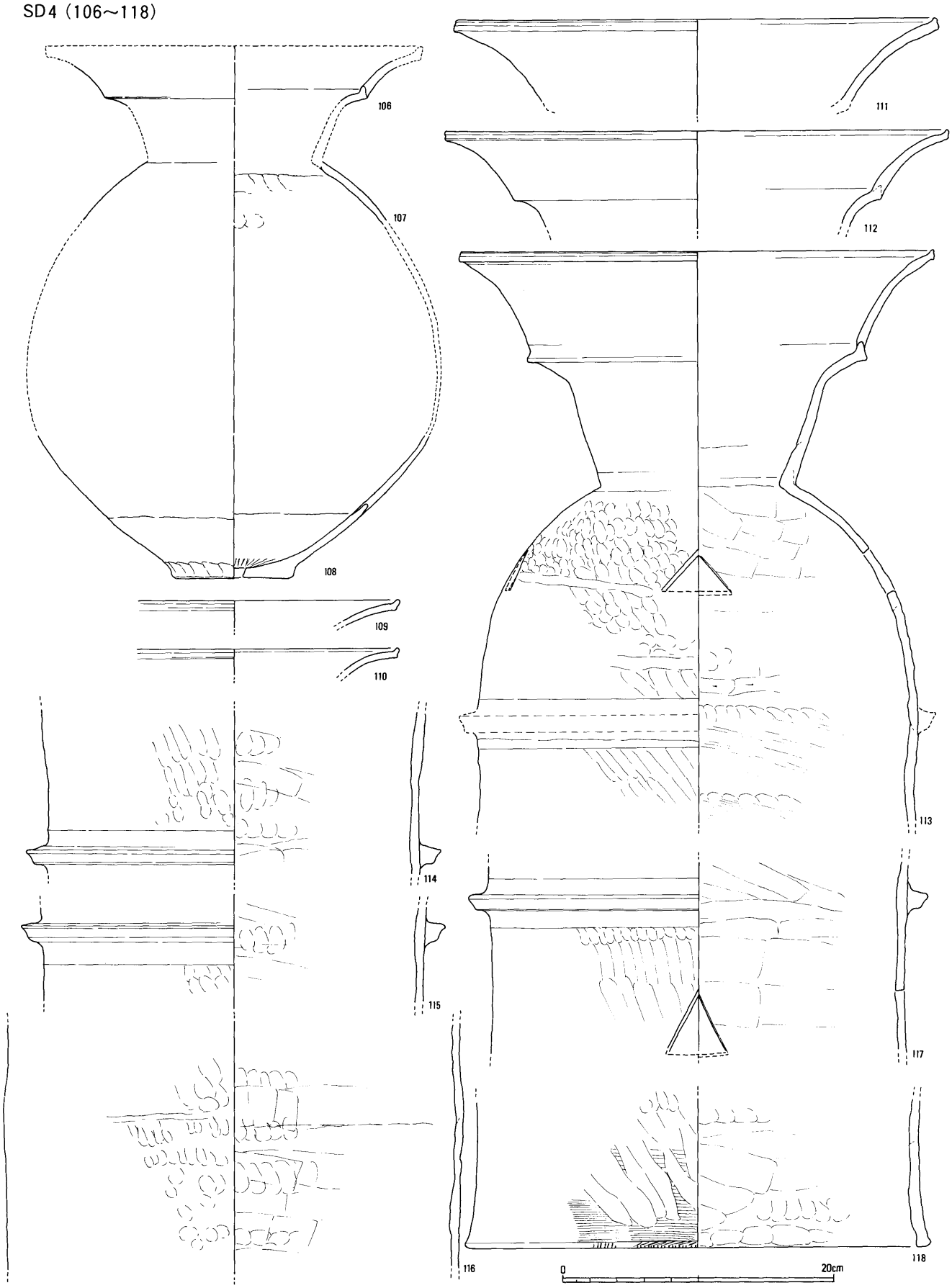


fig. 8　第３次調査区出土遺物(5)　SD４（１：４）

SD8（119～142）

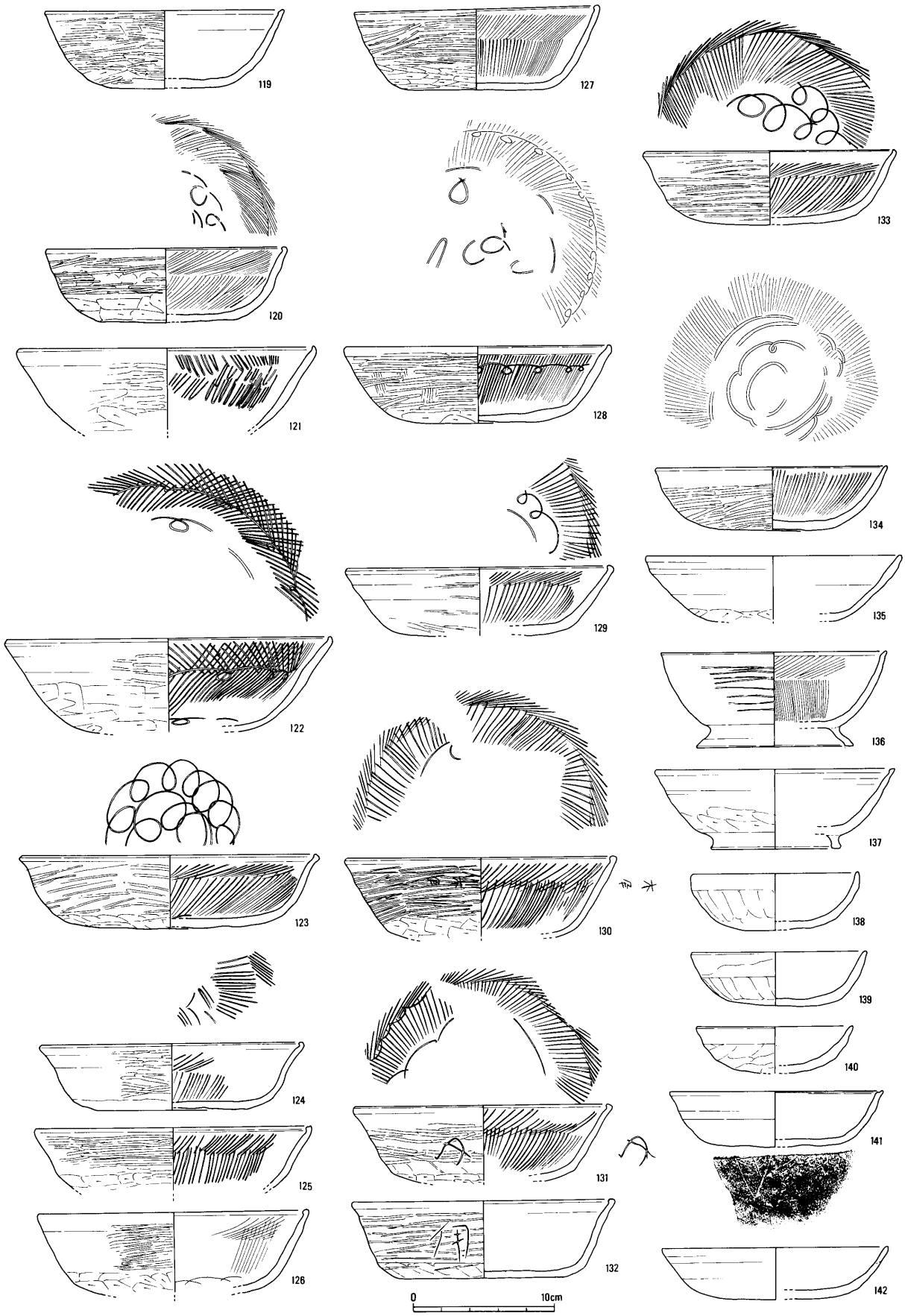


fig. 9　第３次調査区出土遺物(6)　ＳＤ８（１：４）

SD8（143～162）

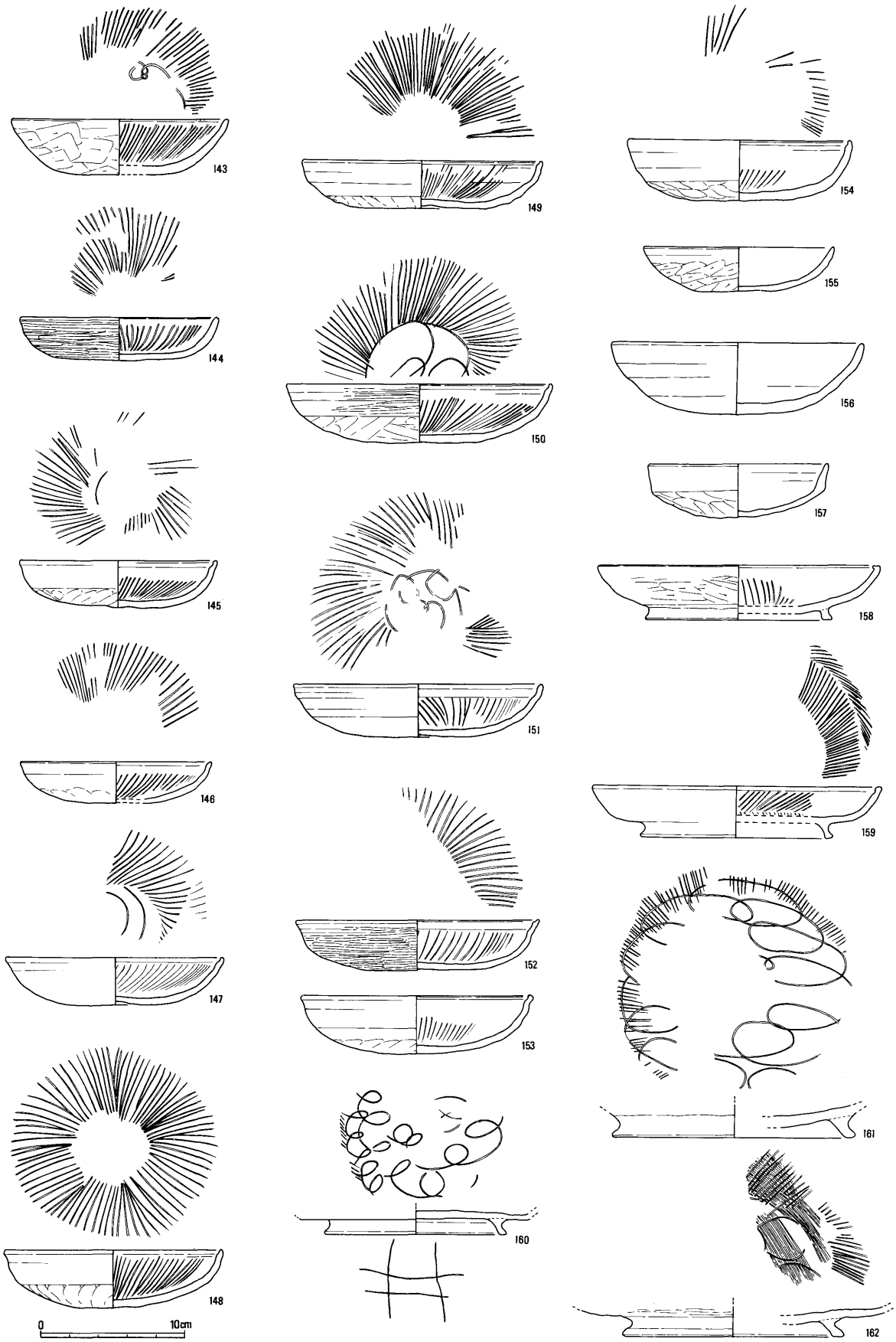


fig. 10　第３次調査区出土遺物(7)　SD８（１：４）

SD8（163～180）

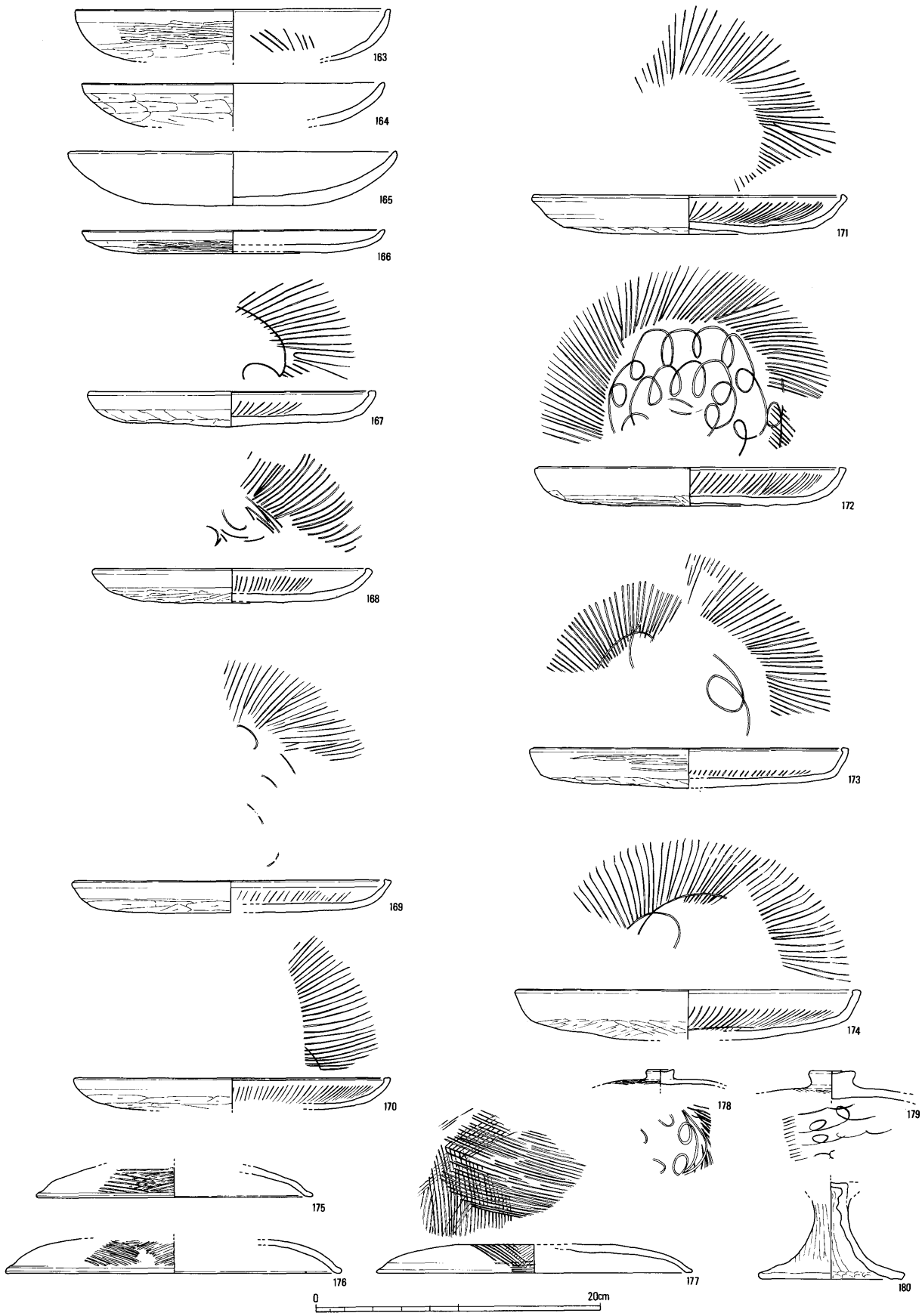


fig. 11　第３次調査区出土遺物(8)　ＳＤ８（１：４）

SD8（181～252）

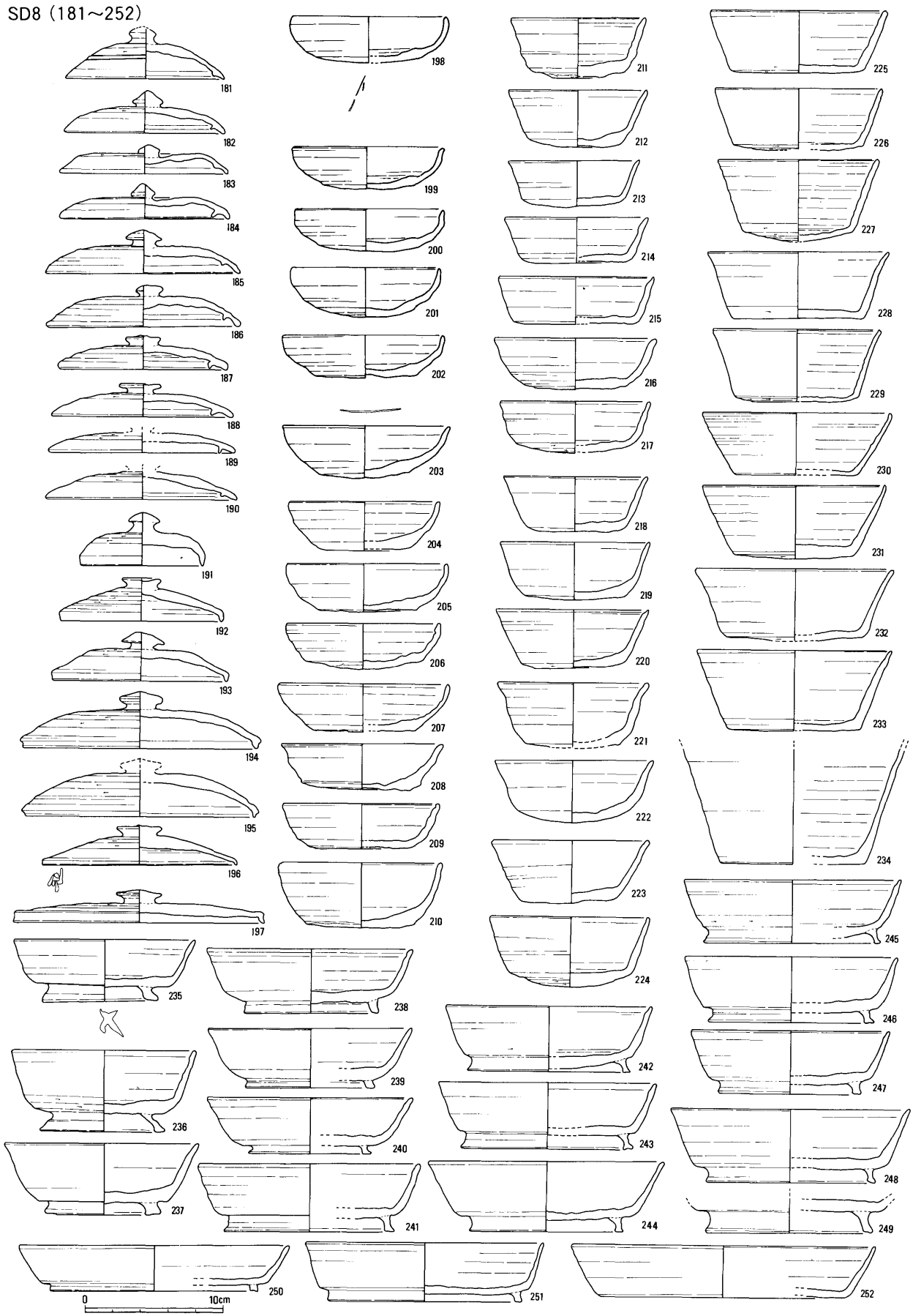


fig. 12　第３次調査区出土遺物(9)　SD８（１：４）

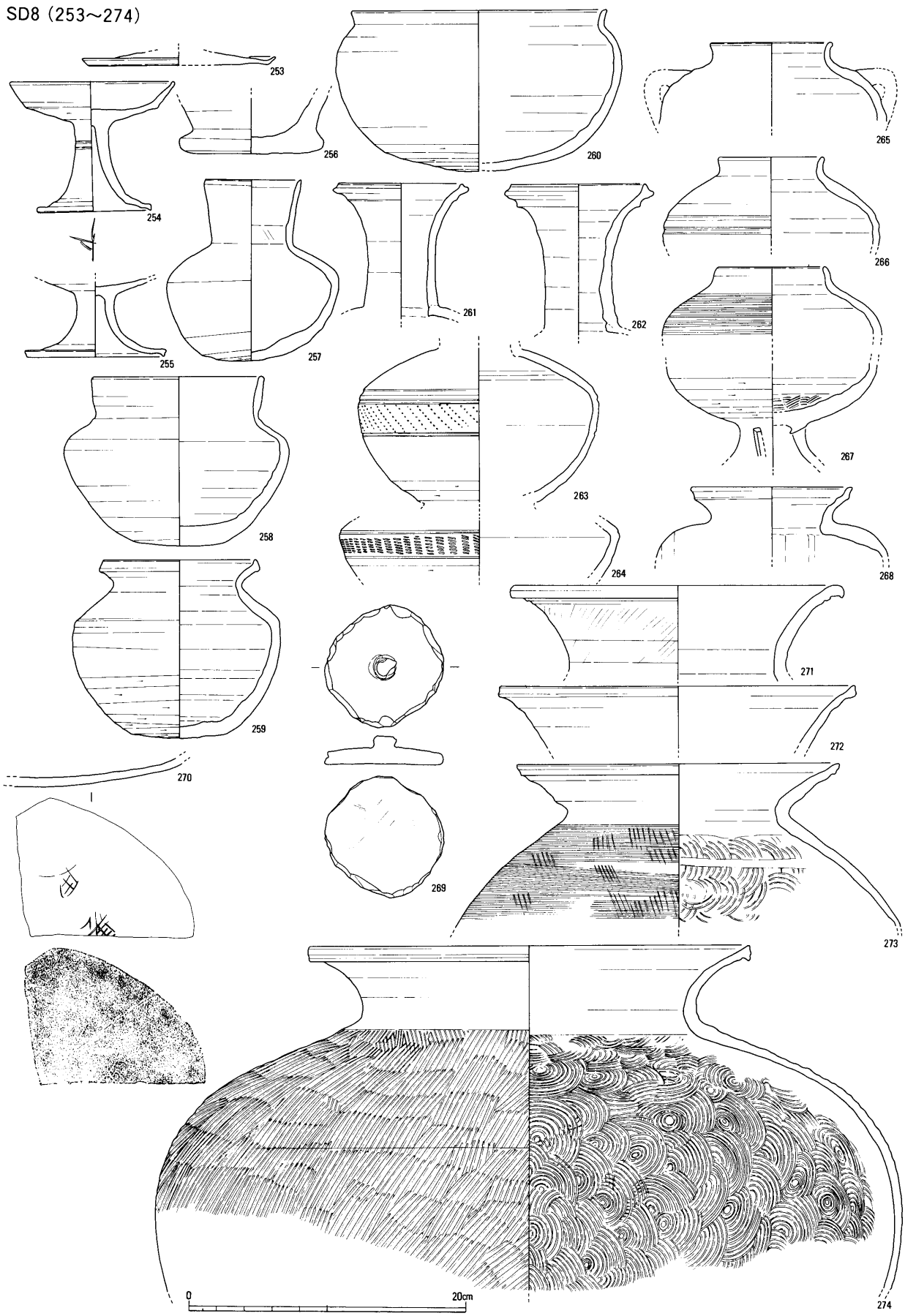


fig. 13　第３次調査区出土遺物(10)　ＳＤ８（１：４）

SD8（275～295）

fig. 14　第３次調査区出土遺物(11)　SD８（１：４）

SD8 (296～310)

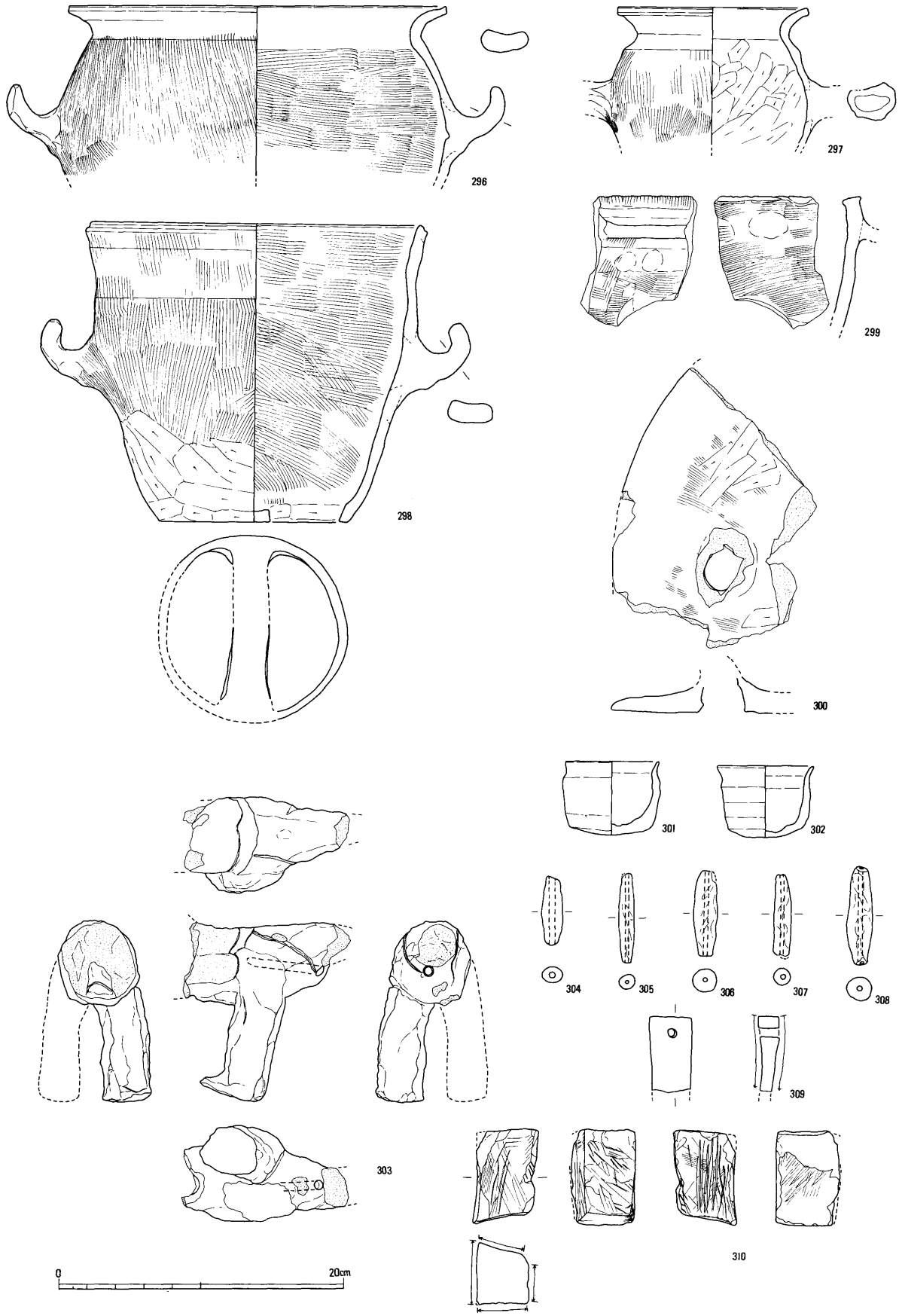


fig. 15　第３次調査区出土遺物(12)　SD８（１：４）

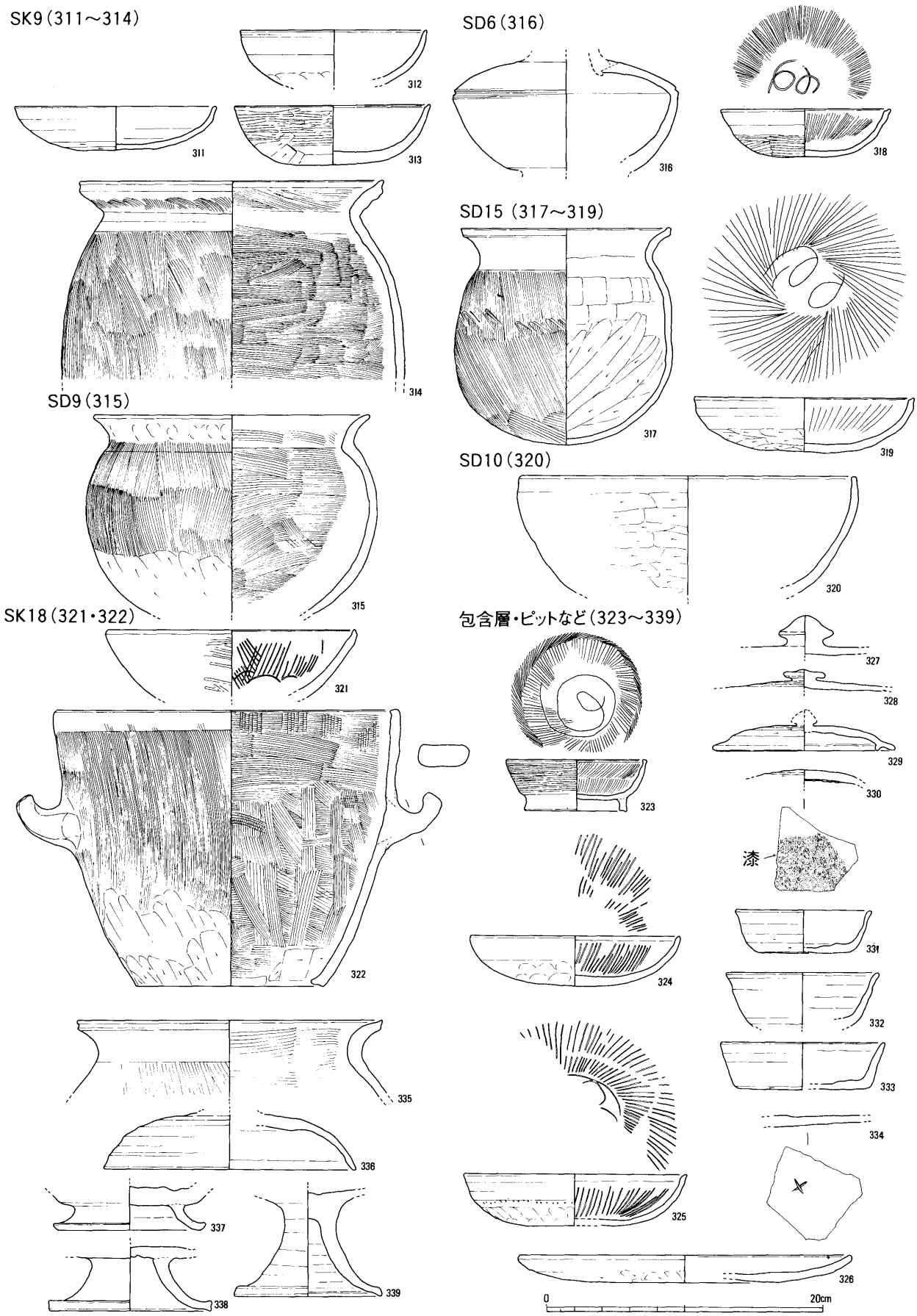


fig. 16　第3次調査区出土遺物(13) 各遺構（1：4）

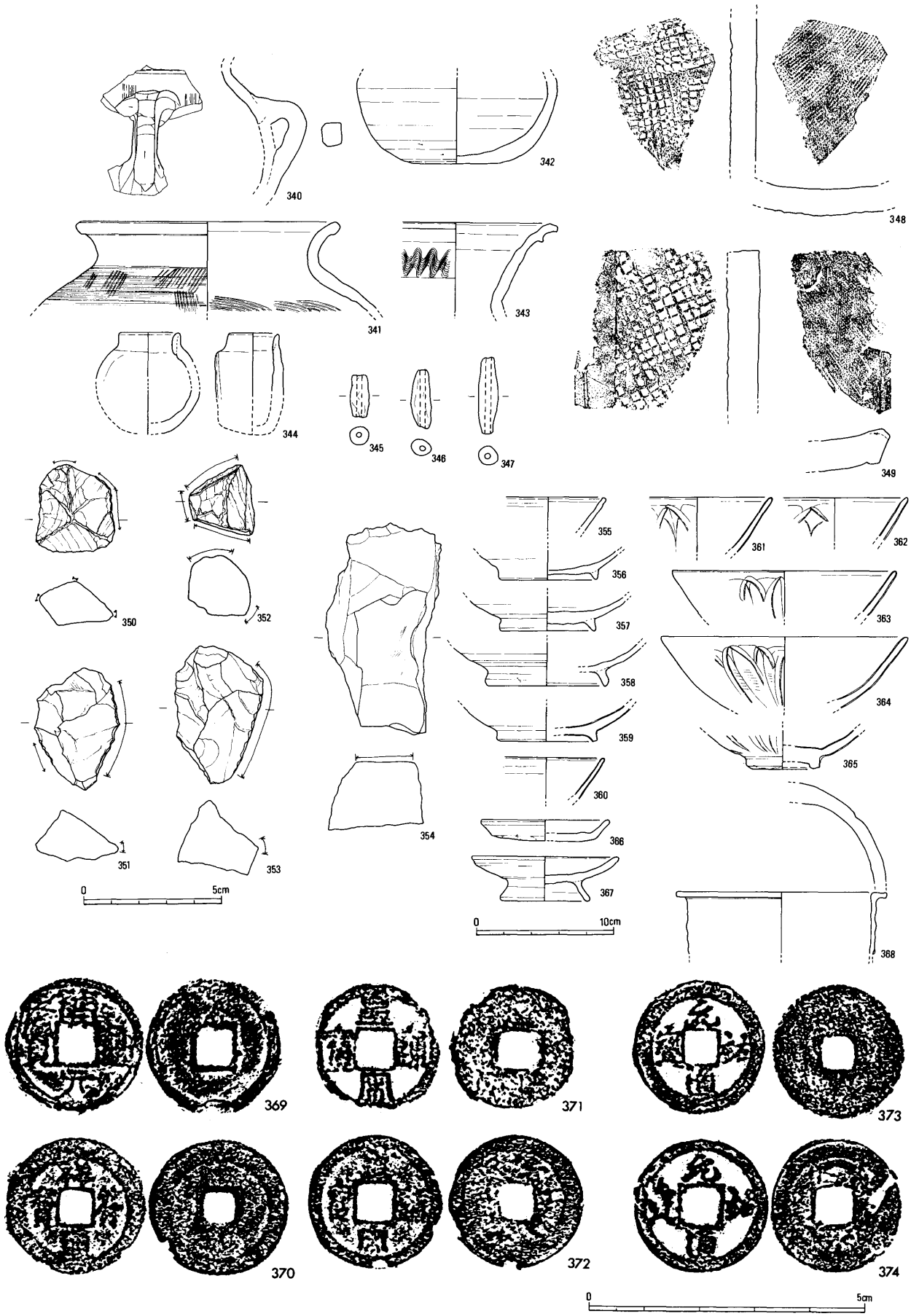


fig. 17　第３次調査区出土遺物(14)（350～353は１：２、369～374は１：１、他は１：４）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
1	9201	石鏃	3次	c21	包含層	長2.3	重さ1.2g				サヌカイト製
2		石鏃	3次	d21	包含層	長2.18					サヌカイト製
3	9202	石鏃	3次	d21	包含層	長2.60	重さ1.2g				サヌカイト製
4	9408	磨製石斧	3次	d15	SD4		磨製				緑泥片岩
5	3006	縄文土器　深鉢	3次	c13	SD4粗砂	(口)−	外；突帯・U字状沈線文	粗	淡黄橙	口縁部片	晩期
6	9404	縄文土器　深鉢	3次	b10	SD4		外；ナデ→沈線 内；ナデ	粗	灰黄褐	口縁部片	
7	9405	縄文土器　深鉢	3次	c12	SD4		外；突帯上に押し引き刻目 内；ナデ	粗	褐灰	口縁部片	
8	9406	縄文土器　深鉢	3次		排土		外；突帯上に押し引き刻目 内；ナデ	粗	灰黄褐	口縁部片	
9	5302	縄文土器　深鉢	3次	d21	SD4	(口)−	外；突帯上に二枚貝押し引き 内；ナデ	粗	黄灰	口縁部片	
10	5306	縄文土器　深鉢	3次	b20	SD4	(口)−	外；突帯上に刻みなし 内；ナデ	粗	黄灰	口縁部片	
11	5305	縄文土器　深鉢	3次	c19	SD4	(頸)−	外；条痕 内；ナデ	粗	灰黄褐	頸部片	
12	5304	縄文土器　深鉢	3次	d19	SD4	(体)−	外；突帯上の刻み原体不明 内；ナデ	粗	灰黄褐	体部片	
13	9407	縄文土器　深鉢	3次	b10	SD4		外；二枚貝？条痕・突帯 内；ナデ	粗	灰黄	口縁部片	
14	5303	縄文土器　深鉢	3次	d14	SD4		外；突帯上の刻み原体不明 内；ナデ	粗	褐灰	体部片	
15	9402	縄文土器　深鉢	3次	d15	SD4	(口)−	外；条痕・ケズリ 内；ナデ	粗	褐灰	体部片	
16	9403	弥生土器　甕	3次	c20	SD4	(頸)−	外；ハケメ→半裁竹管の横線文 内；ナデ	粗	淡黄橙	頸部片	弥生前期
17	3007	弥生土器　甕	3次	c21	SD4	(口)−	外；ハケメ→半裁竹管文 内；ナデ	粗	明褐灰	頸部片	前期、亜流遠賀川
18	3009	弥生土器　甕	3次	c13	SD4	(口)−	外；ハケメ→ヨコナデ→刻み目 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁部片	中期
19	5301	弥生土器　甕	3次	c21	SD4	(頸)−	外；ナデ・刻目 内；ナデ	粗	灰黄褐	口縁部片	
20	2802	弥生土器　壺	3次	c20	SD4	(頸)−	外；櫛描波状文・横線文 内；ナデ	粗	灰黄	頸部1／5	
21	2803	弥生土器　壺	3次	b9	SD4	(頸)−	外；櫛描波状文 内；ナデ	粗	淡黄橙	頸部1／5	外面に煤
22	2304	弥生土器　壺	3次	b11	SK9	(頸)−	外；櫛描波状文・横線文 内；ナデ	粗	灰黄	頸部片	
23	3008	土師器　壺	3次	c16	SD4	(口)15.6	外；櫛描横線文・二枚貝山形文 内；ナデ	密	淡褐	頸部片	瓢壺か？
24	5205	弥生土器　壺	3次		表土	(口)19.0	外；波状文（口縁外面）・ナデ 内；波状文（口縁内面）・ナデ	粗	淡黄橙	口縁1／8	
25	2906	弥生土器　壺	3次	c22	SD4	(口)22.0	外；ヨコナデ→刻み目 内；ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1／12	
26	5602	弥生土器　壺	3次	c11	SD8	頸5.2	外；ヨコナデ・凹線文 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／5	
27	2606	弥生土器　壺	3次	c23	SD3　土器5	(頸)4.6	外；ハケメ→凹線→5条の複合櫛描文2ヶ所→刻目文→格子目文→棒状浮文5本	密	淡黄橙	頸部完存	
28	5204	弥生土器　壺	3次	c21	SD4砂層	(口)−	外；貝殻刺突・沈線・ハケメ 内；ナデ・ハケメ	粗	淡黄橙	頸部完存	
29	9304	弥生土器　甕	3次	d15	SD4	(脚裾)5.3	外；ヨコナデ→刻目文 内；ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁部片	弥生前期
30	5504	弥生土器　甕	3次	d15	SD4	(脚裾)7.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁部片	
31	3302	弥生土器　甕	3次	c13	SD4	(口)16.8	外；ナデ→ケズリ 内；オサエ・ナデ	粗	淡橙	脚部1／3	
32	3301	弥生土器　甕	3次	c16	SD4　粗砂	(口)32.0	外；ナデ 内；オサエ・ナデ	粗	灰黄	頸部完存	
33	2703	弥生土器　甕	3次	b9	SD4	口縁1／8	外；ハケメ→ヨコナデ→刻目文 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／8	脚部完存
34	2801	弥生土器　甕	3次	c2	SD4	口縁1/12	外；ハケメ→ヨコナデ→刻み目 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1／12	
35	9305	弥生土器　甕	3次	b10	SD4	(口)29.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1／8	
36	2601	土師器　台付甕	3次	b13	SD2	(口)16.6	外；ハケメ→ヨコナデ→刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1／12	
37	2603	土師器　台付甕	3次	a23	SD1	(口)12.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1／5	
38	2602	土師器　甕	3次	a24	SD1	(口)12.2	外；ハケメ→タタキメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁1／5	外面に煤
39	2604	土師器　台付甕	3次	d22	SD3	(口)14.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／8	
40	2605	土師器　高杯	3次	c24	SD3	(脚裾)13.0	外；ナデ→櫛描横線文・ミガキ 内；ハケメ・ナデ	密	淡黄橙	脚裾1／3	
41	4703	土師器　小形壺	3次	b10	SD4	(口)4.1	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	粗	黄灰	口縁1／2	
42	4702	土師器　小形壺	3次	c21	SD4	(口)7.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／2	

tab. 2　出土遺物観察表（第3次ー1）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
43	3601	土師器　小形壺	3次		SD4	(口)6.1	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁5／6	
44	5803	土師器　高杯	3次	c11	SD4	(口)11.0	外；ヨコナデ→ヘラミガキ 内；ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	淡黄橙	口縁1／2	
45	4701	土師器　高杯	3次		SD4	(口)22.7	外；板ナデ（脚柱）・ナデ→ヨコナデ 内；ケズリ（脚柱）ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／2	
46	2705	土師器　小形鉢	3次	b10	SD4	(口)16.1	外；ミガキ 内；ミガキ	密	灰黄褐	口縁1/3	
47	5502	土師器　小形鉢	3次	d19	SD4	(口)14.6	外；ヘラミガキ→ヨコナデ 内；ヘラミガキ	密	灰褐	口縁2/3	内外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
48	2707	土師器　手焙形	3次	b12	SD4	突帯10.4	外；ナデ→貼付突帯→刻目文 内；ナデ	密	淡黄橙	突帯1/5	外面に煤
49	2701	土師器　台付甕	3次	b7	SD4	(口)23.4	外；ハケメ→ヨコナデ→刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1/12	
50	2904	土師器　台付甕	3次	c20	SD4	(口)22.0	外；ハケメ→ヨコナデ→刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/8	
51	2607	土師器　台付甕	3次	b11	SD4	(口)16.8	外；ハケメ→ヨコハケ→ヨコナデ→刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1/12	
52	3202	土師器　台付甕	3次	c16	SD4	(口)21.0	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1/12	外面に煤
53	3102	土師器　台付甕	3次	b10	SD4	(口)19.0	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤
54	3201	土師器　台付甕	3次	c18	SD4	(口)14.0	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/8	
55	3204	土師器　台付甕	3次	d16	SD4	(口)15.9	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1/8	
56	3002	土師器　台付甕	3次	b22	SD4	(口)15.6	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/5	
57	3001	土師器　台付甕	3次	c22	SD4	(口)15.7	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/3	
58	3103	土師器　台付甕	3次	d19	SD4	(口)18.0	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	暗灰黄	口縁1/5	
59	2905	土師器　台付甕	3次	c20	SD4	(口)21.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/10	外面に煤
60	2902	土師器　台付甕	3次	c20	SD4	(口)28.1	外；ハケメ→ヨコナデ→押引刺突 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰褐	口縁1/12	
61	4301	土師器　台付甕	3次		SD4	(口)6.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/6	
62	5202	土師器　台付甕	3次	c20	SD4	(脚裾)4.3	外；ハケメ・ナデ 内；ナデ	粗	褐灰	脚部完存	被熱により外面赤変
63	2901	土師器　台付甕	3次	c20	SD4	(口)30.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/9	外面に煤
64	3106	土師器　台付甕	3次	d18	SD4	(口)13.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	明褐灰	口縁1/6	
65	3105	土師器　台付甕	3次	d17	SD4	(口)14.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	暗灰黄	口縁1/4	
66	3104	土師器　台付甕	3次	c18	SD4	(口)12.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰	口縁1/4	
67	3203	土師器　台付甕	3次	c18	SD4	(口)14.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1/8	外面に煤
68	3003	土師器　台付甕		c20	SD4	(口)14.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/4	外面に煤
69	4801	土師器　台付甕	3次	d19	SD4	(口)12.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1/2	外面に煤，脚台内面に砂粒多い素地付加
70	10001	土師器　台付甕			SD4	(口)14.8	外；ハケメ→→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁3/5	外面に煤付着
71	9301	土師器　台付甕	3次	d14	SD4	(脚上)4.8	外；ハケメ・ナデ 内；ナデ	粗	灰黄褐	底上完存	底部は意図的に除去→研磨　外面に煤付着
72	3501	土師器　台付甕	3次		SD4	(脚裾)11.8	外；ナデ→ハケメ 内；ナデ→ハケメ	粗	褐灰	脚裾11／12	脚台内面に砂粒多い素地付加
73	3503	土師器　台付甕	3次		SD4	(脚裾)13.2	外；ナデ→ハケメ 内；ナデ	粗	褐灰	脚裾2/3	脚台内面に砂粒多い素地付加
74	5501	土師器　台付甕	3次	d19	SD4	(脚裾)14.2	外；ハケメ・ナデ 内；ナデ	粗	暗灰	脚裾7/8	外面黒化・赤変
75	3502	土師器　台付甕	3次		SD4	(脚裾)8.5	外；ナデ→ハケメ 内；ナデ	粗	灰褐	脚裾完存	
76	3504	土師器　台付甕	3次		SD4	(脚裾)9.5	外；ナデ→ハケメ 内；ナデ	粗	淡褐	脚裾1／2	
77	3404	土師器　甕	3次		SD4	(口)14.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁1/8	破断面に煤付着
78	5601	土師器　甕	3次	d14	SD4	(口)13.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	粗	淡黄	脚裾1／4	
79	3205	土師器　壺	3次	c18	SD4	(口)16.2	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	灰黄	頸部1/7	口縁部に焼成後穿孔1カ所残
80	3602	土師器　壺	3次		SD4	(口)11.4	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	黄灰	ほぼ完存	口縁部に焼成後穿孔2ヶ所，外面に赤彩（ベンガラ）
81	4302	土師器　壺	3次		SD4	(口)15.1	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁11／12	外面に煤、内面に炭化物
82	5203	土師器　壺	3次	d19	SD4	(口)20.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	密	褐灰	口縁1／8	
83	9303	土師器　壺	3次	c20	SD4	(口)22.3	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ミガキ	粗	灰黄	口縁1/12	
84	4501	土師器　壺	3次		SD4	(口)18.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	黄灰	口縁5／8	口縁内面は二重口縁状をなす

tab. 3　出土遺物観察表（第3次－2）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
85	2706	土師器　壺	3次	c21	SD4	(口)13.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／12	
86	4601	土師器　壺	3次		SD4	(口)14.4	外；縦ヘラミガキ 内；ナデ→横ヘラミガキ	密	灰白	頸部3／4	
87	3401	土師器　壺	3次		SD4	(口)17.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁4／5	
88	9002	土師器　壺	3次	d17	SD4	(口)16.7	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／10	頸部外面にS字甕状の沈線
89	9101	土師器　壺	3次	c14	SD4	(底)6.8	外；ナデ・ケズリ 内；ナデ・板ナデ	粗	暗灰黄	底完存	外面に煤付着
90	5201	土師器　壺	3次	c19	SD4砂層	(底)6.8	外；オサエ・ナデ 内；板ナデ	密	灰黄褐	底部完存	底面に砂粒多く付着
91	3402	土師器　壺	3次		SD4	(頸)7.9	外；ナデ・オサエ→ケズリ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	体部完存	外面に煤、内面に炭化物
92	3004	土師器　甕	3次	c21	SD4	(底)4.2	外；ナデ 内；ナデ→ハケメ	粗	灰	底部完存	外面に煤
93	3101	土師器　壺	3次	c20	SD4	(底)5.4	外；ナデ 内；ナデ→ハケメ	密	灰白	底部完存	
94	2503	須恵器　有蓋高杯	3次	c11	SD4	(口下)14.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→波状文 内；回転ナデ	密	灰白	杯下部1／5	
95	2501	須恵器　杯身	3次	d13	SD4	(口)12.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁11／12	
96	6404	須恵器　杯蓋	3次	c12	SD4		外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	紫灰	頂部のみ	ヘラ記号あり
97	9302	須恵器　杯蓋	3次	b10	SD4	(口)13.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／6	内面上に同心円当て具痕
98	9001	土師器　甕	3次		SD4	(口)25.2推	外；ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内；ケズリ状板ナデ→ケズリ・ヨコナデ	粗	灰黄	頸部1／3	体部下半に鬚口縁あり、外面に煤付着
99	3701	土師器　甕	3次		SD4	(口)13.9	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	黄灰	完存	底は平底風
100	4401	土師器　甕	3次		SD4	(口)14.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／3	外面のハケメはS字甕的
101	3603	土師器　甕	3次		SD4	(口)12.0	外；ナデ・ケズリ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰	体部完存	体部に焼成後穿孔2ヶ所
102	2903	土師器　甕	3次	b13	SD4	(口)25.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1／12	
103	4101	土師器　台付甕	3次		SD4	(口)20.2	外；ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→板ナデ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁完存	
104	4201	土師器　台付甕	3次		SD4	(口)19.8	外；ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	黄灰	口縁1／2	
105	4001	土師器　台付甕	3次	d14	SD4	(口)19.3	外；ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ケズリ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／4	口縁部は内面に肥厚する
106	10003	土師器　壺	3次	c13	SD4		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡橙	口縁部片	内面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
107	10301	土師器　壺	3次	c13ほか	SD4	(頸)12.8	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	粗	淡褐	頸部1／8	体部上半外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
108	10302	土師器　壺	3次	c13ほか	SD4	(底)8.9	外；オサエ・ナデ（底部焼成前穿孔） 内；ナデ	粗	淡褐	底部完存	底部焼成前穿孔
109	10102	朝顔形埴輪　口縁	3次	c13	SD4		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	橙	口縁部片	
110	10101	朝顔形埴輪　口縁	3次	c13	SD4		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡橙	口縁部片	内外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
111	10202	朝顔形埴輪　口縁	3次	c13	SD4	(口)35.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／10	内外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
112	10201	朝顔形埴輪　口縁	3次	b10	SD4	(口)37.0	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡赤褐	口縁1／16	内外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
113	10401	朝顔形埴輪　上半	3·4次	3−c13 4−c5	SD4　SD41	(口)34.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ、上半の三角透かしは4方向　内；オサエ・ナデ	粗	灰褐	口縁1／3	体部外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
114	10501	埴輪	3次		SD4	(突帯)30.2	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ	粗	灰褐	突帯1／6	体部外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
115	10602	埴輪	3次	c13	SD4	(突帯)31.0	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ	粗	淡黄橙	突帯1／8	体部外面に赤色顔料（ベンガラ）塗布
116	10502	埴輪	3次	c3	SD4	(体)33.6	外；オサエ・ナデ 内；オサエ・ナデ	粗	淡黄橙	突帯間1／6	
117	10601	埴輪	3次	b11	SD4	(突帯)33.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ	粗	淡黄橙	突帯1／6	黒斑あり
118	10701	埴輪　基底部	3次	c11·b10	SD4·SD41(4次)	(底)24.0	外；ナデ→ヨコハケ→ナデ 内；オサエ・ナデ→板ナデ	粗	淡褐	基底部1／8	3片　底面に板？圧痕あり
119	7301	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)16.8	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ	密	橙	口縁2／3	素地B
120	401	土師器　杯	3次	b9	SD8	(口)17.0	外；ケズリ→ミガキ 内；放射状暗文(2)·螺旋状暗文	密	橙	口縁1／4	底部に板状圧痕
121	5801	土師器　杯	3次	b10	SD8	(口)21.0	外；ヨコナデ→ケズリ→ヘラミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／8	素地C
122	6602	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)23.0	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／3	素地C
123	9801	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)21.0	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡黄橙	口縁1／3	素地B　黒斑あり
124	5705	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)18.7	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／6	素地B
125	5704	土師器　杯	3次	b11	SD8	(口)19.6	外；ヨコナデ→ケズリ→ヘラミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／5	素地C
126	703	土師器　杯	3次	c13	SD8	(口)20.0	外；ケズリ→ミガキ 内；放射状暗文(2)·螺旋状暗文	密	橙	口縁1／5	

tab. 4　出土遺物観察表（第3次ー3）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
127	2104	土師器　杯	3次	d16	SD8	(口)17.5	外；ケズリ→ミガキ 内；放射状暗文(2)	密	橙	口縁1／2	剥離多い
128	202	土師器　杯	3次	d17	SD8　土器2	(口)19.0	外；ケズリ→ミガキ 内；放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁3／8	よく使われてる
129	6503	土師器　杯	3次	a7	SD8	(口)19.0	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／8	素地B
130	6801	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)19.0	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／2	素地B　黒斑あり　刻書「木屏」か?
131	6601	土師器　杯	3次	a8	SD8	(口)18.2	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡黄橙	口縁1／2	素地B　黒斑あり　刻書あり
132	2102	土師器　杯	3次	c11	SD8　土器3	(口)18.5	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁3／4	素地B　外面に焼成後刻文字「伊」
133	6502	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)18.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁3／8	素地B　黒斑あり
134	6501	土師器　杯	3次	a12	SD8	(口)16.5	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	粗	橙	口縁1／2	素地C
135	803	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)17.9	外；ケズリ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1／5	
136	604	土師器　杯	3次	c16	SD8	(口)15.8	外；ヨコナデ→ミガキ・貼付高台 内；放射状暗文(2)	密	橙	口縁1／4	
137	602	土師器　杯	3次	a21	SD8　土器3	(口)16.8	外；ヨコナデ→ケズリ→貼付高台 内；ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／4	
138	7306	土師器　杯	3次	b9	SD8	(口)12.0	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	黄橙	口縁1／2	素地A
139	7302	土師器　杯	3次	b11	SD8	(口)12.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰褐	口縁1／3	素地A
140	804	土師器　杯	3次	a8	SD8	(口)11.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／4	
141	701	土師器　杯	3次	b11	SD8	(口)15.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1／4	底に木葉圧痕
142	802	土師器　杯	3次	b10	SD8	(口)16.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1／2	
143	7403	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)14.8	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／6	素地B
144	7906	土師器　杯	3次	a12	SD8	(口)13.6	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡褐	口縁1／6	素地B
145	9803	土師器　杯	3次	b11	SD8	(口)13.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁2／3	素地C
146	6802	土師器　杯	3次	a10	SD8	(口)13.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／4	素地B
147	704	土師器　杯	3次	d16	SD8	(口)14.9	外；オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁1／4	
148	1801	土師器　杯	3次	c12	SD8　土器2	(口)14.8	外；オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文	密	淡橙	口縁10／12	内面に煤
149	2402	土師器　杯	3次	c11	SD8	(口)16.5	外；オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文	密	淡橙	口縁3／8	
150	9802	土師器　杯	3次	b12	SD8	(口)18.1	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／6	素地C
151	201	土師器　杯	3次	d17	SD8　土器3	(口)17.1	外；オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文・螺旋状暗文	密	淡橙	口縁3／8	
152	102	土師器　杯	3次	d18	SD8　土器5	(口)16.8	外；ヨコナデ→ミガキ 内；放射状暗文	密	橙	口縁3／4	
153	2103	土師器　杯	3次	b9	SD8　土器6	(口)16.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文	密	橙	口縁1／4	内面に漆付着
154	2401	土師器　杯	3次		SD8　89層土器2	(口)15.4	外；オサエ→ヨコナデ 内；放射状暗文	密	淡橙	口縁1／2	
155	1904	土師器　杯	3次	b13	SD8　土器2	(口)13.0	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	ほぼ完存	
156	2101	土師器　杯	3次	b12	SD8	(口)17.5	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1／2	
157	7305	土師器　杯	3次	c12	SD8	(口)12.4	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ状板ナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1／2	杯H　素地C
158	10002	土師器　皿	3次	d19	SD8	(口)19.6	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文？	密	橙	高台1／3	素地C
159	2404	土師器　皿	3次	c11	SD8	(口)20.0	外；ナデ・ヨコナデ→貼付高台 内；放射状暗文(2)	密	淡橙	口縁1／8	
160	5701	土師器　皿	3次	b12	SD8	(高台)12.4	外；ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	高台1／2	底部外面に焼成後記号
161	8701	土師器　皿	3次	d13	SD8	(高台)16.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→暗文	密	橙	高台7／8	素地C
162	5703	土師器　皿	3次	b12	SD8	(高台)15.2	外；高台貼付ヨコナデ→ヘラミガキ 内；ヘラミガキ→暗文	密	淡橙	(高台)1／4	素地C
163	7402	土師器　皿	3次	b9	SD8	(口)21.8	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／4	素地B
164	801	土師器　皿	3次	a12	SD8	(口)21.0	外；ケズリ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1／5	内面に煤
165	5101	土師器　皿	3次	b9	SD8	(口)22.8	外；剥離、一部ミガキ残る 内；剥離	密	橙	口縁3／5	素地C類
166	6803	土師器　皿	3次	b9	SD8	(口)21.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／10	素地B　蓋か？
167	8702	土師器　皿	3次	b11	SD8	(口)20.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→暗文	密	橙	口縁1／6	素地C
168	6201	土師器　皿	3次	a12	SD8	(口)19.8	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／8	素地C

tab. 5　出土遺物観察表（第３次－４）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
169	302	土師器　皿	3次	d16	SD8	(口)22.2	外；ヨコナデ→ケズリ 内；放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁1／4	
170	702	土師器　皿	3次	a8	SD8	(口)22.0	外；ヨコナデ→ケズリ 内；放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁1／6	
171	6702	土師器　皿	3次	b10	SD8	(口)22.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／6	素地C
172	101	土師器　皿	3次	b10	SD8　土器1	(口)21.7	外ヨコナデ→ケズリ 内；放射状暗文・螺旋状暗文	密	橙	口縁1／2	黒斑あり
173	6701	土師器　皿	3次	b14	SD8	(口)22.1	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／2	素地B
174	9901	土師器　皿	3次	c11	SD8	(口)24.0	外；ヨコナデ→ケズリ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁1／3	素地C
175	8002	土師器　蓋	3次	c11	SD8	(口)19.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ	密	橙	口縁1／10	素地D
176	7903	土師器　蓋	3次	b12	SD8	(口)23.4	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ	密	橙	口縁1／10	素地B
177	9902	土師器　蓋	3次	c11	SD8	(口)22.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ	密	橙	口縁1／8	素地C
178	7904	土師器　蓋	3次	b12	SD8	(摘)2.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	摘完存	素地C
179	603	土師器　蓋	3次	d19	SD8　土器6	(摘径)3.2	外；ヨコナデ→ミガキ 内；螺旋状暗文	密	淡橙	摘完存	
180	904	土師器　高杯	3次	c12	SD8　土器1	(脚裾)10.1	外；面取り風のナデ 内；ナデ	密	淡橙	脚部完存	
181	1602	須恵器　杯蓋	3次	d16	SD8	(口)11.4	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
182	1605	須恵器　杯蓋	3次	c11	SD8	(口)11.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	明青灰	口縁1／4	
183	1603	須恵器　杯蓋	3次	d17	SD8　土器4	(口)12.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	
184	7806	須恵器　杯蓋	3次	c16	SD8	(口)12.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／2	
185	6205	須恵器　杯蓋	3次	a8	SD8	(口)14.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／8	
186	1601	須恵器　杯蓋	3次	b9	SD8　土器2	(口)13.7	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
187	6202	須恵器　杯蓋	3次	b11	SD8	(口)12.1	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
188	1604	須恵器　杯蓋	3次	b10	SD8	(口)12.8	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／8	
189	8404	須恵器　杯蓋	3次	b20	SD8	(口)13.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
190	7901	須恵器　杯蓋	3次	d19	SD8	(口)13.7	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	
191	9703	須恵器　杯蓋	3次	b11	SD8	(口)8.8	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁3／4	
192	6306	須恵器　杯蓋	3次	b10	SD8	(口)11.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰褐	口縁1／2	北勢産？
193	1606	須恵器　杯蓋	3次	d17	SD8	(口)12.6	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	
194	1701	須恵器　杯蓋	3次	b10	SD8	(口)16.8	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰	口縁7／12	
195	6401	須恵器　杯蓋	3次	b10·11	SD8	(口)17.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁2／3	
196	6305	須恵器　杯蓋	3次	b9·d14	SD8	(口)14.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰褐	口縁1／10	墨書か？　北勢産？
197	1607	須恵器　杯蓋	3次	d12	SD8	(口)18.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／8	
198	7303	須恵器　杯身	3次	b11	SD8	(口)11.4	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／2	底部外面にヘラ記号？
199	8202	須恵器　杯蓋	3次	c19	SD8	(口)11.0	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／4	内面研磨
200	1307	須恵器　杯身	3次	d17	SD8	(口)10.9	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／8	
201	5902	須恵器　杯身	3次	c19	SD8	(口)108	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／2	口縁部に油煙痕
202	1304	須恵器　杯身	3次	b12	SD8	(口)11.7	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／2	
203	1305	須恵器　杯身	3次	c11	SD8	(口)12.1	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／8	内面にヘラ記号
204	7304	須恵器　杯身	3次	7a9	SD8	(口)10.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／5	
205	1306	須恵器　杯身	3次	c16	SD8　土器6	(口)11.5	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／8	
206	6403	須恵器　杯身	3次	a12	SD8	(口)11.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	外面の研磨顕著
207	6402	須恵器　杯身	3次	b10·c11	SD8	(口)12.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	青灰	口縁1／3	
208	1404	須恵器　杯身	3次	a7	SD8　土器1	(口)11.4	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／4	口縁部に油煙痕
209	6206	須恵器　杯身	3次	b12	SD8	(口)11.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／4	
210	7206	須恵器　杯身	3次	b10	SD8	(口)11.7	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／2	外面底部に板状圧痕

tab. 6　出土遺物観察表（第3次－5）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
211	5901	須恵器　杯身	3次	b13	SD8	(口)9.8	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／6	
212	1403	須恵器　杯身	3次	c16	SD8　土器9	(口)10.0	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	
213	1402	須恵器　杯身	3次	b11	SD8	(口)9.5	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	
214	8505	須恵器　杯身	3次	c11	SD8	(口)10.2	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／5	
215	7204	須恵器　杯身	3次	a12	SD8	(口)11.2	外；回転ナデ→ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	
216	8503	須恵器　杯身	3次	c12	SD8	(口)11.5	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	底部に板状圧痕
217	7805	須恵器　杯身	3次	c12	SD8	(口)10.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
218	8504	須恵器　杯身	3次	c15·d17	SD8	(口)10.3	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／2	
219	1505	須恵器　杯身	3次	c14	SD8	(口)10.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／2	
220	5904	須恵器　杯身	3次	b21	SD8	(口)10.8	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／2	
221	7401	須恵器　杯身	3次	b9	SD8	(口)10.8	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	青灰	口縁1／3	
222	7602	須恵器　杯身	3次	c17	SD8	(口)11.4	外；回転ナデ→ナデ 内；回転ナデ	密	淡赤褐	口縁1／10	内面に墨？付着　北勢産？
223	8204	須恵器　杯身	3次	d17	SD8	(口)11.5	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／7	内面に漆付着
224	8502	須恵器　杯身	3次	a21	SD8	(口)11.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	赤灰	口縁1／10	北勢産？
225	7201	須恵器　杯身	3次	b11	SD8	(口)12.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁2／3	
226	6301	須恵器　杯身		b14	SD8	(口)12.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	
227	6302	須恵器　杯身	3次	b12	SD8	(口)11.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／8	
228	9702	須恵器　杯身	3次	b11	SD8	(口)13.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	外面底に墨痕？
229	6204	須恵器　杯身	3次	b12	SD8	(口)12.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／2	
230	7205	須恵器　杯身	3次	b9·10	SD8	(口)13.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	オリーブ	口縁1／3	
231	1501	須恵器　杯身	3次	c11	SD8	(口)13.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	粗	灰	口縁1／2	
232	1502	須恵器　杯身	3次	c16	SD8	(口)14.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	
233	7503	須恵器　杯身	3次	c16	SD8	(口)14.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／8	
234	6304	須恵器　杯身	3次	c11	SD8	(底)10.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	黄灰	底1／3	
235	2504	須恵器　杯身	3次		SD8	(口)13.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰白	高台完存	
236	1401	須恵器　杯身	3次	b9	SD8　土器1	(口)13.2	外；回転ナデ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／8	
237	1405	須恵器　杯身	3次	d18	SD8	(口)14.0	外；回転ナデ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／4	猿投産？
238	7202	須恵器　杯身	3次	a12	SD8	(口)14.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／4	
239	7804	須恵器　杯身	3次	c13	SD8	(口)14.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／10	
240	6303	須恵器　杯身	3次	c11	SD8	(口)14.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	青灰	口縁1／5	
241	7502	須恵器　杯身	3次	d16	SD8	(口)16.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／6	
242	9701	須恵器　杯身	3次	a12	SD8	(口)14.7	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
243	1003	須恵器　杯身	3次	d17	SD8　土器1	(口)15.5	外；回転ナデ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
244	1302	須恵器　杯身	3次	b11	SD8	(口)17.0	外；回転ナデ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／2	
245	5805	須恵器　杯身	3次	b12	SD8	(口)15.6	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／4	
246	1303	須恵器　杯身	3次	c17	SD8　土器1	(口)15.4	外；回転ナデ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰白	高台3／8	
247	6903	須恵器　杯身	3次	b12	SD8	(口)14.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／8	
248	7203	須恵器　杯身	3次	a8	SD8	(口)17.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／10	
249	6203	須恵器　杯身	3次	b14	SD8	(高台)12.0	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰	高台1／4	
250	7802	須恵器　杯身	3次	c11	SD8	(口)19.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／8	
251	1301	須恵器　杯身	3次	b10	SD8	(口)17.2	外；回転ナデ→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／4	
252	1503	須恵器　皿	3次	b10	SD8	(口)22.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	

tab. 7　出土遺物観察表（第３次－６）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
253	7803	須恵器　蓋？	3次	a8	SD8	(口)14.0	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／6	
254	4902	須恵器　高杯	3次	b11	SD8	(口)11.9	外；回転ナデ・回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	脚内面にヘラ記号
255	8304	須恵器　高杯	3次	a9	SD8	(脚裾)10.2	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰	脚裾1／2	
256	1902	須恵器　練鉢	3次	d17	SD8　土器7	(底)7.6	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	底部完存	
257	8205	須恵器　壺	3次	西壁	SD8	(口)7.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	
258	9501	須恵器　壺	3次	d19	SD8	(口)12.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	淡褐	口縁7／8	焼成不良
259	9502	須恵器　壺	3次	c19	SD8	(口)11.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁2／3	
260	1702	須恵器　壺	3次	a9	SD8	(口)18.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／12	
261	1802	須恵器　壺	3次	d18	SD8　土器4	(口)9.8	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁3／4	
162	8303	須恵器　壺	3次	d16	SD8	(口)10.7	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁完存	
263	8302	須恵器　脚付壺	3次	b10	SD8	(体)17.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→刺突文 内；回転ナデ	密	灰	体部1／2	
264	8402	須恵器　壺	3次	a21	SD8	(体)20.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→スタンプ文 内；回転ナデ	密	灰白	体部1／3	
265	8005	須恵器　壺	3次	c15	SD8	(口)8.9	外；回転ナデ→把手貼付 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／10	双耳壺
266	7207	須恵器　壺	3次	b12	SD8	(口)7.6	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	紫灰	口縁1／3	
267	7504	須恵器　脚付壺	3次	a10	SD8	(口)8.1	外；回転ナデ・カキメ→回転ケズリ 内；タタキメ痕（底）→回転ナデ	密	灰	口縁1／10	黒色吹き出し粒多い
268	1803	須恵器　俵瓶	3次	b19	SD8　土器6	(口)11.6	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	
269	8203	須恵器加工品	3次	c11	SD8	(幅)8.6	須恵器蓋の摘部と口縁部を打ち欠く	密	灰		内面研磨　墨付着　硯？
270	9503	須恵器　甕？	3次	a10	SD8		外；研磨 内；ナデ？	密	灰白	体部片	外面に刻書「□□」
271	1901	須恵器　甕	3次	d18	SD8　土器3	(口)24.0	外；ハケメ→回転ナデ 内；回転ナデ	粗	灰白	口縁1／4	
272	8301	須恵器　甕	3次	b10	SD8	(口)25.8	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／10	
273	8401	須恵器　甕	3次	a21	SD8	(口)23.2	外；叩き→回転ナデ→カキメ 内；叩き→回転ナデ	密	灰	口縁1／10	
274	6101	須恵器　甕	3次	b15	SD8	(口)31.8	外；平行文叩き→ヨコナデ 内；同心円文叩き→ヨコナデ	密	灰	口縁1／3	
275	7703	土師器　甕	3次	d20	SD8	(口)16.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／5	
276	3802	土師器　甕	3次	b9	SD8	(口)13.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁3／4	
277	3801	土師器　甕	3次	b9	SD8	(口)15.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	粗	淡橙	口縁3／4	
278	3803	土師器　甕	3次	c11	SD8	(口)14.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ケズリ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁3／4	外面に煤付着
279	502	土師器　甕	3次	c16	SD8	(口)13.9	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	灰黄褐	口縁1／4	外面に煤
280	503	土師器　甕	3次	c15	SD8　土器5	(口)13.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ケズリ・ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／3	外面に煤、内面に炭化物
281	8603	土師器　甕	3次	b11	SD8	(口)16.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	外面に煤付着
282	1001	土師器　甕	3次	d18	SD8	(口)20.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／4	
283	1202	土師器　甕	3次	a8	SD8	(口)19.7	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡橙	口縁1／5	外面に煤
284	501	土師器　甕	3次	b10	SD8	(口)20.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／4	
285	1101	土師器　甕	3次	b9	SD8	(口)21.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／4	外面に煤
286	1102	土師器　甕	3次	c15	SD8　土器5	(口)22.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／5	
287	1201	土師器　甕	3次	c11	SD8　土器1	(口)23.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／6	
288	7701	土師器　甕	3次	c11	SD8	(口)29.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	
289	504	土師器　甕	3次	d16	SD8　土器2	(口)23.1	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	淡褐	口縁1／8	外面に煤
290	8003	土師器　甕	3次	c17	SD8	(底)7.0	外；ハケメ 内；ナデ→板ナデ	粗	褐灰	底2／3	濃尾型甕
291	903	土師器　台付甕？	3次	d12	SD8	(高台上)7.6	外；ハケメ→ケズリ→貼付高台 内；ナデ	密	淡黄橙	底部1／2	上は甕形をなすと思われる
292	1002	土師器　把手付鍋	3次	b10	SD8	(口)22.7	外；ナデ→ヨコナデ・貼付把手 内；ナデ→ヨコナデ・焼成前穿	密	橙	口縁1／4	
293	8201	土師器　把手付鍋	3次	d13	SD8	(口)23.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／3	把手部は挿入
294	601	土師器　把手付鍋	3次	b11	SD8　土器3	(口)25.1	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／4	把手部は挿入

tab. 8　出土遺物観察表（第３次－７）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
295	7601	土師器　把手付鍋	3次	c17	SD8	(口)28.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	
296	8901	土師器　把手付鍋	3次	c11	SD8	(口)26.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／4	把手は挿入
297	8001	土師器　把手付鍋	3次	c16	SD8	(口)13.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ケズリ→ヨコナデ	粗	淡褐	口縁1／10	把手部は挿入,1つのみ残　外面に煤
298	8801	土師器　甑	3次	c11	SD8	(口)23.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁3／4	把手は挿入、底は一文字
299	8601	土師器　竈	3次	a9	SD8		外；ハケメ・ナデ 内；ハケメ・ナデ	粗	淡黄橙		
300	5102	土師器　竈	3次	b10·c11	SD8		外；ハケメ・ナデ・ケズリ 内；ナデ・ケズリ	粗	淡黄橙		外面に煤付着
301	9704	土師器　小形鉢	3次	b11	SD8	(口)6.5	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	ほぼ完存	回転成形かもしれない
302	9705	土師器　小形鉢	3次	c16	SD8	(口)6.7	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／2	回転成形かもしれない
303	901	土馬	3次	d23·c22	SD8		下半身部分。左足のみ残る。足と胴体は別部品。	密	淡黄橙	下半身の一部	
304	9602	土錘	3次	b11	SD8	(長)4.9	外；ナデ 内；ナデ	密	淡黄橙	完存	重さ6.19g
305	9603	土錘	3次	a10	SD8	(長)6.3	外；ナデ 内；ナデ	密	淡橙	完存	重さ6.33g
306	9604	土錘	3次	b8	SD8	(長)6.1	外；ナデ 内；ナデ	密	淡黄橙	完存	重さ13.87g
307	9607	土錘	3次	b11	SD8	(長)5.9	外；ナデ 内；ナデ	密	橙	完存	重さ7.1g
308	9606	土錘	3次	b11	SD8	(長)7.9	外；ナデ 内；ナデ	密	淡橙	完存	重さ16.65g
309	1804	砥石	3次	c15	SD8	残長5.4	携帯用の穿孔あり				変成岩
310	5103	砥石	3次	b12	SD8	(幅)4.4	使用面４面				削痕あり　砂岩
311	2303	土師質土器　杯	3次	b11	SK9　No.1	(口)14.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	淡橙	口縁1／2	外面に煤
312	5802	土師器　杯	3次	b11	SK9	(口)13.4	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／4	素地D
313	2302	土師器　杯	3次	b11	SK9　No.3	(口)14.0	外；ケズリ→ミガキ 内；ナデ	密	淡橙	口縁1／4	
314	7001	土師器　甕	3次	b11	SK9	(口)22.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／2	外面に煤付着
315	4901	土師器　甕	3次	a18	SD9	(口)19.7	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	
316	5503	須恵器　壺	3次	b19	SD6	(体)16.1	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	灰	体部完存	脚台が付く　甕部は擬口縁をなす
317	2201	土師器　甕	3次	d12	SD15　土器2	(口)15.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密	淡黄	口縁3／4	外面に煤
318	2403	土師器　杯	3次	b12	SD15	(口)12.2	外；ヨコナデ→ミガキ 内；螺旋状暗文・放射状暗文	密	淡橙	口縁1／4	
319	5001	土師器　杯	3次	d12	SD15	(口)15.7	外；ケズリ→ヨコナデ 内；ナデ→放射状暗文	密	淡橙	口縁10／12	素地B類
320	2301	土師器　鉢	3次	a8	SD10	(口)24.1	外；ヨコナデ→ケズリ 内；板ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1／5	
321	9601	土師器　杯	3次	b9	SK18	(口)18.0	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ナデ→暗文	密	橙	口縁1／4	素地C
322	3901	土師器　甑	3次	b9	SK18	(口)24.6	外；ハケメ→ケズリ・ヨコナデ 内；ハケメ・ケズリ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁2／3	幅約5.0cmの一条の底
323	5002	土師器　杯	3次	c16	pit1	(口)10,1	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ナデ→放射状暗文→螺旋状暗文	密	淡橙	口縁9／12	素地B類
324	5702	土師器　杯	3次	d11	包含層	(口)15.0	外；ナデ・オサエ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／6	素地C
325	10104	土師器　杯	3次	c11	包含層	(口)15.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	橙	口縁2／5	素地C
326	8602	土師器　皿	3次	c11	包含層	(口)24.0	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1／7	素地C
327	8604	土師器　蓋	3次	a22	包含層	(摘)4.0	外；ヨコナデ→ミガキ？ 内；ナデ→ミガキ？	密	橙	摘完存	素地C
328	6902	須恵器　杯蓋	3次	b19	包含層	(摘径)2.9	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	摘完存	内面研磨
329	6901	須恵器　杯蓋	3次	b19	包含層	(口)13.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／2	
330	7902	須恵器　杯蓋	3次	b18	包含層		外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰白	底部片	内面に漆付着
331	8506	須恵器　杯身	3次	a18	包含層	(口)9.8	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／6	内面に漆付着
332	6904	須恵器　杯身	3次	b19	包含層	(口)11.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
333	6905	須恵器　杯身	3次	b19	包含層	(口)11.8	外；回転ナデ→ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／3	
334	6907	須恵器　杯身	3次	b13	SR14		外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	底部片	外面にヘラ記号
335	7702	土師器　甕		a18	包含層	(口)21.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／4	
336	8403	須恵器　高杯蓋	3次	b20	包含層	(口)18.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→ヨコナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	

tab. 9　出土遺物観察表（第３次－８）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
337	5804	須恵器　壺	3次	c11	包含層		外；回転ナデ→高台貼付ヨコナデ 内；ナデ	密	灰白	高台1／2	底部外面に煤付着
338	6906	土師器　台付皿	3次	b19	包含層	(高台)10.8	外；回転ナデ→ナデ 内；回転ナデ	密	灰	脚部1／2	
339	7002	須恵器　高杯	3次	b19	包含層	(脚裾)11.6	外；回転ナデ→ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	脚裾1／2	
340	7505	須恵器　壺	3次	a2	包含層	(脚裾)10.6	外；叩き→回転ナデ→ケズリ（把手） 内；叩き→回転ナデ	密	灰	把手部のみ	
341	7501	須恵器　壺	3次	a21	包含層		外；叩き→回転ナデ・カキメ 内；叩き→回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
342	8501	須恵器　壺	3次	b19	包含層	(口)19.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	粗	淡黄	体部1／2	瓦質を呈する
343	5905	須恵器　甕	3次	b16	包含層	(体)14.4	外；回転ナデ→波状文 内；回転ナデ	密	灰	口縁部片	
344	6001	土師器　提瓶形	3次	b20	包含層	(口)－	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁3／4	ミニチュア土器
345	9608	土錘	3次	c11	包含層	(長)7.3	外；ナデ 内；ナデ	密	淡橙	完存	重さ4.08g
346	9609	土錘	3次	a12	包含層	(長)3.1	外；ナデ 内；ナデ	密	淡黄橙	完存	重さ5.74g
347	9605	土錘	3次	a12	包含層	(長)4.3	外；ナデ 内；ナデ	密	淡黄橙	完存	重さ8.87g
348	7102	平瓦	3次	d19	包含層	(長)5.7	凹；布目痕・糸切り痕 凸；格子目叩き	粗	灰		
349	7101	平瓦	3次	b23	包含層	(厚)1.9	凹；布目痕・糸切り痕 凸；格子目叩き	粗	灰		
350	6002	火打ち石	3次	c12	SR14	(厚)2.2	稜線上に敲打痕				石英
351	5402	火打ち石	3次	d22	包含層	(長)3.2	稜線上に敲打痕				
352	5403	火打ち石	3次	d20	包含層	(長)4.5	稜線上に敲打痕				
353	5401	火打ち石	3次	d21	包含層	(長)2.4	稜線上に敲打痕				
354	7801	砥石	3次	c18	包含層	(長)5.0	使用面1面				砂岩製
355	8107	緑釉陶器　椀	3次	b10	包含層	(幅)4.5	外；施釉 内；施釉	密	釉;ｵﾘｰﾌﾞ灰	口縁部片	硬胎
356	1504	灰釉陶器　椀	3次	d14	SD8		外；ロクロナデ→糸切り→貼付高台 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／3	内面に重ね焼き痕
357	5903	灰釉陶器　椀	3次	b26	包含層	(高台)7.3	外；回転ナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	密	灰	高台1／3	
358	5806	灰釉陶器　椀	3次	a24	包含層	(高台)7.0	外；回転ナデ→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／6	
359	8102	青磁　椀	3次	b20	包含層	(高台)8.9	外；施釉 内；施釉	密	釉;灰ｵﾘｰﾌﾞ	(底)1／5	越州窯系
360	8108	白磁　椀	3次	b10	包含層	(高台)6.5	外；施釉 内；施釉	密	釉;灰白	口縁部片	博多・太宰府Ⅶ類
361	8103	青磁　椀	3次	d17	包含層		外；鎬蓮弁文→施釉 内；施釉	密	釉;ｵﾘｰﾌﾞ灰	口縁部片	竜泉窯系
362	8104	青磁　椀	3次	c12	包含層		外；鎬蓮弁文→施釉 内；施釉	密	釉;ｵﾘｰﾌﾞ灰	口縁部片	竜泉窯系
363	8106	青磁　椀	3次	c23	包含層	(口)18.2	外；鎬蓮弁文→施釉 内；施釉	密	釉;ｵﾘｰﾌﾞ灰	口縁1／12	竜泉窯系
364	8105	青磁　椀	3次	c23	包含層	(口)18.8	外；鎬蓮弁文→施釉 内；施釉	密	釉;ｵﾘｰﾌﾞ灰	口縁1／12	竜泉窯系
365	8101	青磁　椀	3次	c12	包含層	(高台)4.5	外；ケズリ→鎬蓮弁文→施釉 内；施釉	密	釉;ｵﾘｰﾌﾞ灰	底1／3	竜泉窯系
366	8004	土師器　小皿	3次	c17	包含層	(口)9.3	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁11／12	島貫Ｆ期土師器小皿ｄ3
367	7907	土師器　台付小皿	3次	c22	包含層	(口)10.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／4	
368	7603	青銅製品	3次	d24		(口)15.2	口縁部は楕円状に広がる			口縁1／5	近世以降
368	2001	銭貨（開元通寶）	3次	c25	包含層						
370	2002	銭貨（祥符通寶）	3次	d10	SD12						
371	2003	銭貨（皇宋通寶）	3次	d10	SD17						
372	2005	銭貨（皇宋通寶）	3次	c25	pit1						
373	2005	銭貨（元祐通寶）	3次	c25	pit1						
374	2005	銭貨（元祐通寶）	3次	c25	pit1						

tab. 10　出土遺物観察表（第3次－9）

Ⅳ　第４次調査

１　調査区の基本層位

第４次調査区は、第３次調査区の道を挟んだ西側にあたり、第３次調査区と平行している。したがって、基本的な層序は第３次・第４次ともに同様と考えられるが、第４次調査区の南側には古墳時代以降の明瞭な遺構基盤層が存在するので、第３次調査区では明確に分からなかった遺構面下部の状況を知ることができる。

fig. 18に示した土層図は、第４次調査区の東壁に見られた南北土層断面である。南側、つまり図面右手が天花寺丘陵側にあたる。調査区の北部は、古墳時代前期から奈良時代にかけての流路ＳＲ41（第３次調査区ＳＤ４・８と同じ）が見られる。ＳＲ41の遺構底面は標高約8.5mに及ぶ。この時期の遺構面がおよそ標高約10mであるから、第４次調査区における流路ＳＲ41の深さは約1.5mである。ちなみに、第3次調査区における当該流路の最深は標高約8.2mほどである。

遺構基盤の標高を詳細に見ると、北部と南端部とでは20～30cmの差があり、南部ほど高くなっている。これは、天花寺丘陵側から供給された土砂の堆積に起因するものとして、素直に把握しておけばよかろう。この遺構基盤層は、南端部では粘土・シルト・砂などの薄い層が、北部ほど下降しながら整合して堆積している状況が見られる。この薄い縞状の層序からは、緩斜面における丘陵部からの恒常的な土砂供給が観察できよう。

流路ＳＲ41の基盤となるのは、青灰色系の粘土である、これは上記の薄い整合層とは異なり、かなりの厚みを持っていると見られ、上記整合層よりも新しいものである。この土層中には木質を含んでおり、ＳＲ41形成以前に存在していた流路と考えられる。なお、調査中にこの層中から土器などの遺物は認められなかったが、全体にわたってこの層を発掘したわけではなく、古墳時代よりも古い時期の遺物を含んでいる可能性も捨てきれない。

古墳時代における明確な遺物包含層に相当するものは無いが、飛鳥・奈良時代のそれは、黒褐色粗砂質シルト(fig. 18の第7層)が相当する。これは、流路ＳＲ41の上層埋土に相当するもので、ＳＲ41以南にも広がっているものである。

黒褐色粗砂質シルトの上には、淡灰色中砂質シルト(fig. 18の第4層)が堆積している。これは中世の遺物を含む層であり、その状態からは中世の耕作土(水田）と考えられる。

以上のように、第４次調査区で確認された層序は、沖積地遺跡としての堀田遺跡を明確に示すものと考えられる。

２　検出した遺構

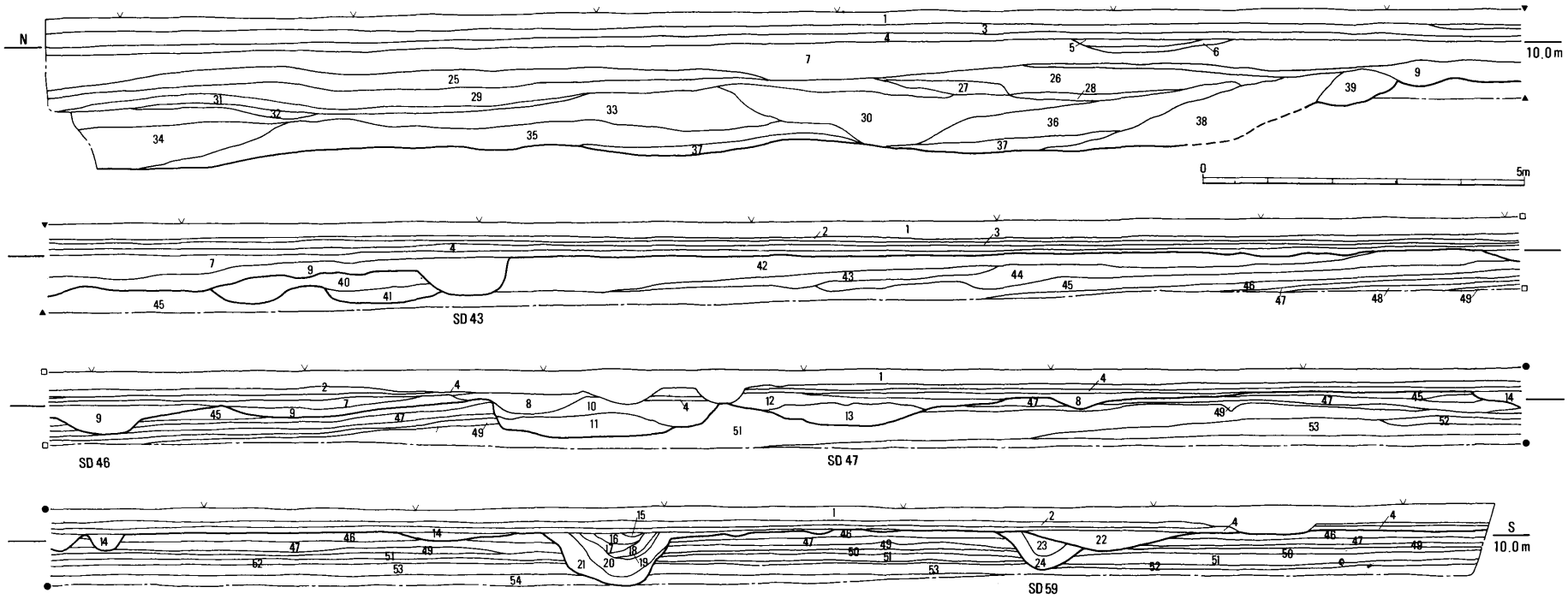
第４次調査区からは、明確に分かるものとしては、古墳時代前期から飛鳥・奈良時代にかけての遺構を確認した。また、遺構の重なり状態から、古墳時代前期以前のものと考えられるものも見られる。なお、実際には中世の溝なども存在していたものと考えられるが、遺構検出面をやや下げ過ぎたために認識することができなかった。

ここでは主立った遺構について記述する。個々の遺構については遺構一覧表（tab. 11）も参照されたい。

１．古墳時代の遺構

流路SR41(fig. 19～21)　調査区北部で確認した遺構で、第３次調査区の流路ＳＤ４・８に続く流路である。人工的なものではなく、自然に形成されたものと考えられるが、便宜上「遺構」と呼称する。

fig. 18　第4次調査区東壁土層（1：100）



1．表土
2．橙灰色中砂質シルト（床土）
3．褐灰色中砂質シルト
4．淡灰色中砂質シルト（中世）
5．炭まじり褐灰色土
6．褐灰色土
7．黒褐色粗砂質シルト（SR41上層）
8．淡褐灰色細砂
9．黒褐色粗砂
10. 淡灰色細砂質シルト
11. 淡黄灰色砂礫
12. 淡褐シルトブロックまじり褐灰色粗砂
13. 淡褐灰色細砂質シルト
14. 灰褐色砂
15. 灰色土
16. 暗灰色土
17. 褐灰色土
18. 黄灰色土
19. 淡灰色土
20. 淡褐ブロックまじり暗灰色シルト質粘土
21. 灰色土
22. 灰色シルト質粘土
23. 灰色中砂質シルト・淡黄色粗砂瓦層
24. 淡褐ブロックまじり黒灰色シルト質粘土
25. 暗灰色粗砂質シルト（SR41、2層）
26. 灰褐色礫まじり粗砂質シルト
27. 淡灰色細砂質シルト、粘質
28. 淡褐灰色粗砂
29. 黒灰色中砂質シルト（SR41、3層）
30. 淡青灰色細砂質シルト
31. 灰色中～粗砂
32. 暗灰色粘土
33. 淡青灰色粘土
34. 暗灰色細砂まじり粘土
35. 有機物多い黒灰色細砂質シルト・灰色中砂質瓦層
36. 灰色粗砂・暗灰色粘土瓦層
37. 灰色中～粗砂
38. 褐灰色粗砂質シルト
39. 淡青灰色粗砂まじり中砂質シルト
40. 淡褐ブロックまじり灰褐色粗砂
41. 淡褐灰色細砂質シルト
42. 黄灰色細砂質シルト
43. 淡褐灰色細砂質シルト（41に同じ）
44. 黄灰色細砂質シルト
45. 淡黄灰色細砂質シルト
46. 黒灰～褐灰色シルト質粘土
47. 黄灰～暗灰色細砂質シルト
48. 黒褐色粘土
49. 淡褐灰色細砂質シルト
50. 灰色細砂質シルト
51. 暗褐色粘土
52. 有機物含む黄褐色細砂質シルト
53. 暗灰色粘土
54. 青灰色粘土

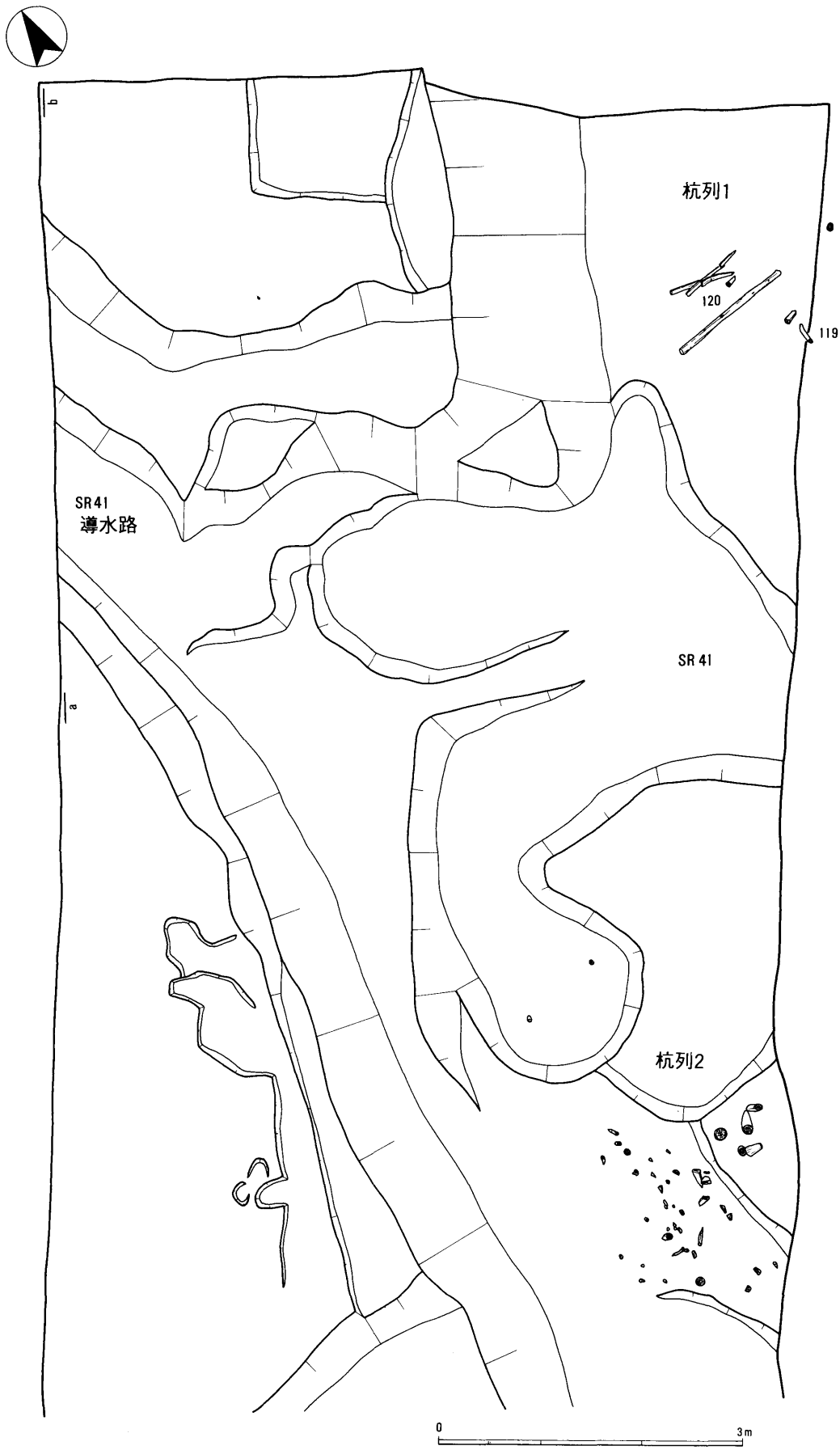
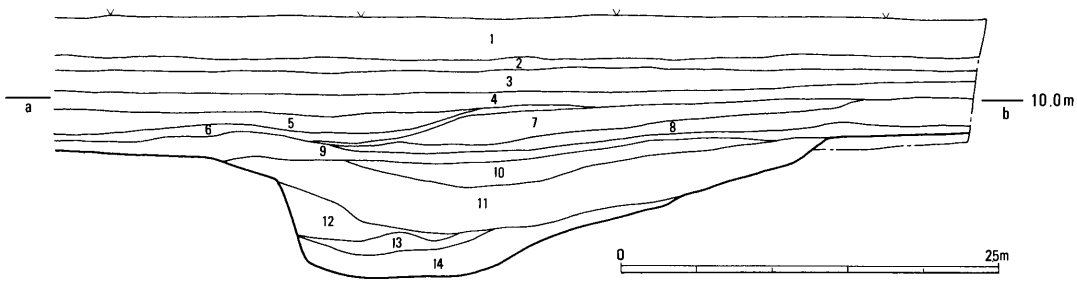


fig. 19　第４次調査区北部 流路ＳＲ41 平面図（１：60）杭列１の数字は遺物番号

fig. 20　第４次調査区流水路ＳＲ 41 杭列２平面・立面図（１：20）



1．表土
2．橙灰色粗砂質シルト
3．淡灰色中砂質シルト（中世）
4．暗黄灰色粗砂質シルト
5．褐灰色粗砂質シルト
6．暗褐灰色シルト、粘性
7．褐灰色粗砂質シルト
8．暗褐灰色粗砂質シルト
9．淡褐色細砂質シルト
10．黒灰色粗砂質シルト（SR41上層）
11．灰褐色粗砂～粗砂質シルト
12．灰色ブロックまじり淡緑灰色中砂質シルト
13．灰色ブロックまじり暗灰色細砂質シルト
14．灰色粗砂質シルト

fig.21　第４次調査区流路SR41導水路土層（１：50）**土層位置は fig. 19**

遺構底面は非常に凹凸が激しい。北端部では２条に分かれているように見えるが、西側に延びる１条は、導水のためにＳＲ41に対して人工的に接続させたものと考えられるものである（以下、「ＳＲ41導水路」と呼称）。ＳＲ41導水路は東の本流部よりも40～50cm高くなっている（fig. 21土層図参照）。

検出範囲では、北部と南部に杭列が認められる。北部の杭列（杭列１）は、遺構がある程度埋没した段階で設定されたもので、３本ほどの打ち込まれた杭が確認できたにとどまる。そのため、杭列の性格は分からない。

南部の杭列（杭列２）は、遺構底面が若干埋没した後に打ち込まれたものであり、杭列１よりは古い時期のものである。杭の頭部は概ね標高8.2～8.3mの高さで揃っており、この高を底面とした水流によって破壊されているものと考えられる。

杭列２の用材は、南西部に細い杭、北東部に太い杭が集中している。検出範囲が限定されているので明確にし得ないきらいがあるが、概ね細杭群はＳＲ41の西岸と平行に、太杭群はそれと直交に打ち込まれているようである。埋土の状況から観察される水流は南から北であり、この杭列はＳR41導水路の手前で終わっている。このことから、ＳR41杭列２はＳR41導水路へと水を導くための施設であると考えられる。

遺構内埋土は、概ね上層・下層の２区分が可能である。

下層埋土は、細砂・粗砂・シルト・粘土がそれぞれ互層になっており、木葉・自然木などの有機物も比較的多量に含んでいる。第３次調査区のＳＤ４がこれに相当する。埋土の状況はかなり複雑に入り組んでおり、中～粗砂が比較的多く観察されることから、水流は比較的激しかったものと考えられる。下層からは、古墳時代前期から後期にかけての遺物が認められ、とくに後期のものがかなりの深さまで確認できる。

上層埋土は、流路の機能がほぼ停止し、溝状の落ち込みとなっていた段階に堆積した土層である。第３次調査区のＳＤ８がこれに相当する。fig. 18では第７層、fig. 21では第10層がこれに相当する。この層からは、飛鳥・奈良時代の遺物が出土している。

遺物の出土状態から見ると、埋土下層からは古墳時代後期の遺物が多く出土しており、これを含む層が杭列２の頭部を破壊していると考えられることから、古墳時代前期頃に主に稼働していた流路と考えられる。

溝ＳＤ42（fig. 22）　調査区北部で確認した溝である。流路ＳR41の西肩に接続する。幅約1.6m、深さ約0.5mの断面逆台形をしている。遺構埋土は砂混じりの粘性が強いシルトで、ＳR41から取水する溝か、あるいはＳR41へ排水する溝と考えられる。後述の出土遺物中に祭祀具と見られるものが含まれていることから、取水溝である可能性が高い。

埋土第２層中に、良好な土器類が見られた。土器類には、小形壺・高杯・壺・甕などがあり、破損した状態ながら完形近くに復元できるものが多く、まとまって一度に投棄されたものと考えられる。

埋土第３層中には陽物形と考えられる祭祀具と思

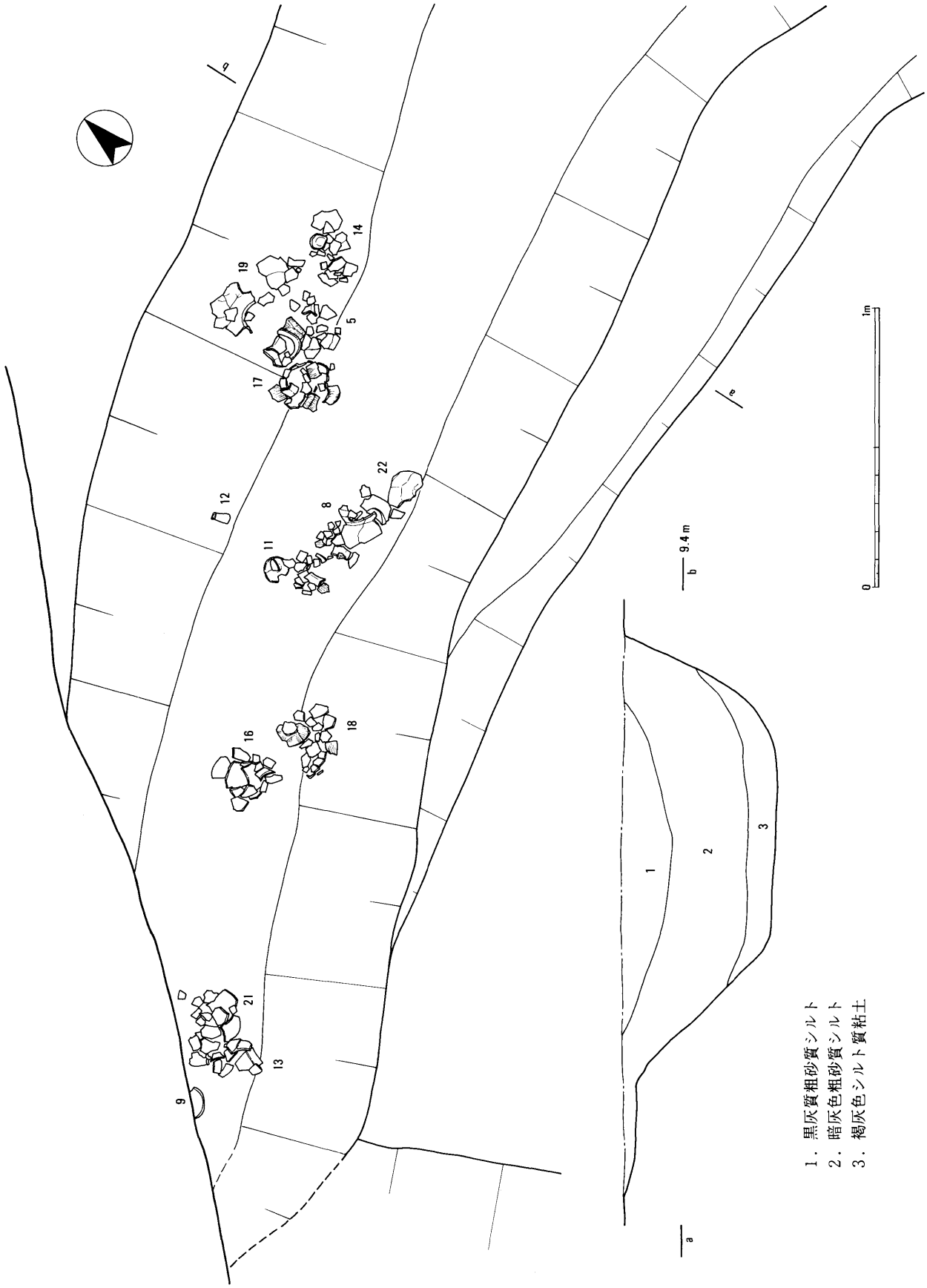


fig. 22　第4次調査区溝SD42遺物出土状況・土層断面図（1：20）

しきものが２点出土している。

出土した土器類は、古墳時代前期後半のもので、当該期の良好な基準資料となろう。

２．飛鳥・奈良時代の遺構

土坑ＳＫ 44・45　調査区北部で確認した遺構である。SK44は不定形で、深さ10cm程度の浅い遺構である。SK45はその南に接している小土坑で、長軸約70cm、深さ約20cmの楕円形の遺構である。両者は一応別の遺構として扱ったが、埋土も同じ黒灰色系粗砂質シルトであり、周辺のピットも含め一連の遺構である可能性が高い。あるいは、竪穴住居の一部なのかも知れない。

須恵器・土師器類が出土しており、飛鳥時代後半頃の遺構と考えられる。

溝SD 46～48・52・53・55・59・62　これらは、調査区中央部から南部にかけて、南北方向に連なる溝である。溝の屈曲具合と方向性で、４つに区分できる。

溝SD47・48は、やや屈曲を持って延びるものである。SD47は、幅約1.2m、深さ約0.5mの断面Ｖ字形のものである。埋土内からは古墳時代前期の土器類が比較的まとまって出土しているが、別の地点からは須恵器片も出土しており、古墳時代前期の土器は近隣の遺構を破壊した際に入り込んだものである可能性がある。

溝SD46・55は、直線的に伸び、溝の軸方位はN５°Eを向くものである。SD46は断面Ｖ字形で、残りの良い部分で幅約1.2m、深さ約30cmの断面逆台形のものである。SD55の埋土内からは奈良時代初頭前後の須恵器が出土している。

溝SD52・53は直線的な溝で、深さ約20～30cmの断面Ｕ字形のものである。溝の軸方向はＮ３°Ｗである。SD53からは、中世前期を中心とした時期の土器片が出土している。

溝SD59・62も直線的な溝で、幅約1.3m、深さ約30cmの断面Ｕ字形のものである。溝の軸方向は、N30°Wである。出土遺物が極めて少なく、時期の特定は難しいが、遺構の重複関係から、奈良時代以降、中世以前と考えられる。

掘立柱建物SB69(fig. 23)　調査区中央北部で検出した遺構である。やや歪であるが、掘立柱建物と考える。西側柱列を北側３本と考えて２間（約3.0m)とするか、それとも南延長部にある軸線上に乗る柱穴を含め、４間ないしは3間（約5.1m)と見るかによって異なる。前者と見れば、東西２間以上、南北２間の東西棟に、後者と見れば、東西２間以上、南北３間ないしは４間となる。いずれも、側柱建物としての復元である。北側柱列の主軸は、N0°で、ほぼ真北を向く。

南ないしは北側柱列は、西側柱列とは直交せず、南へ傾いている。

遺構埋土内からの出土遺物は少なく、須恵器が出土していることが確認できるに過ぎない。しかし、埋土は先述の飛鳥・奈良時代の遺物包含層と同様であり、この時期に大枠では当てはまるものと考えてよかろう。　（伊藤）

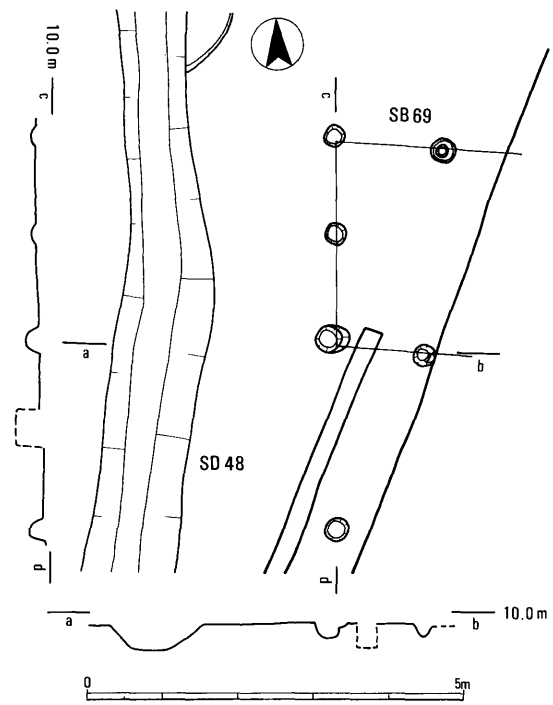


fig.23　第4次調査区掘立柱建物SB69平面図・断面図（1：100)

遺構番号	性　格	時　期	次数	グリット	特徴・形状・計測数値など
SR41	流路	古墳前期～奈良	4次	b2·c2ほか	3次ＳＤ４と一連、杭列２ヶ所、北西方向に流れる
SD42	溝	古墳前期	4次	a·b5·6	埋土下層に炭入る　断面Ｕ字形、Ｓ字甕Ｄ類古
SD43	溝	弥生？	4次	b6～c8	断面Ｕ字形、２条に分流、SD42より古い
SK44	土坑	飛鳥後半	4次	b7·8	埋土は黒灰色粗砂質シルト　浅い
SK45	土坑	飛鳥後半？	4次	b8	皿状に窪むSK44と一連？
SD46	溝	奈良	4次	b11～14	断面逆台形
SD47	溝	古墳前期～後期	4次	a·b13～15	断面逆台形、須恵器あり
SD48	溝	古墳後期以降	4次	a～c9～13	断面Ｖ字形、須恵器あり
SD49	溝	中世？	4次	b12·13	SD46より新、灰色細砂質シルト
SK50	土　坑	中世以降	4次	b16	落ち込み状
SZ51	落ち込み	奈良？	4次	b15	浅い落ち込み状
SD52	溝	奈良？	4次	c17·18	断面Ｕ字形
SD53	溝	～中世前期	4次	b15	粗砂まじり、青磁片・山茶椀片含む
SZ54	落ち込み	奈良以降	4次	b·c16～18	流路？細砂・細砂質シルト互層あり
SD55	溝	奈良前後	4次	b·c19·20	断面緩いＶ字形
SD56	溝	不明	4次	a·b16	細砂の埋土　SZ54と同時期か？
SD57	溝	不明	4次	a·b16·17	SD56と同様
SD58	溝	平安以前	4次	c19	断面浅いＵ字形、古代の平瓦あり
SD59	溝	不明	4次	c20	深い溝、埋土下層に木あり
SZ60	落ち込み	不明	4次	b21～23	灰褐色砂
SD61	溝	中世？	4次	b22	細砂・細砂質シルト　SD66と一連
SD62	溝	不明	4次	b·c21·22	断面Ｕ字形
SZ63			4次	b21～23	SZ60と一連につき、抹消
SD64	溝	奈良以降	4次	b·c23	浅い、断面Ｕ字形、釉着須恵器あり
SK65			4次	b21	SD66と同じにつき、抹消
SD66	溝	奈良	4次	b20～22	弧状にめぐる
SK67	土坑	奈良	4次	a·b23·24	断面Ｕ字形
SK68	土坑	中世後期	4次	a·b24	落ち込み状、南伊勢鍋３－ｂあり
SB69	掘立柱建物	奈良？	4次	c9·10	東西棟、東西２間以上、南北２間（2.8m）

tab.11　第４次調査区遺構一覧表

3　出土した遺物～第４次調査区～

第４次調査区から出土した遺物は、整理箱にして約16箱である。時期的には第３次調査区と同様、縄文時代晩期から中世にまで及ぶが、量としてはやや少ない。土器が大部分で、若干の木製品・石製品などを含む。

以下、各調査区ごとの出土遺物を、遺構単位となるものを中心に記述する。個々の遺物の詳細については、遺物観察表（tab. 12～14）を参照されたい。

a　土器類

弥生時代以前の遺物（１～３）　遺物としては存在するが、この時期の遺構は確認されていない。

１は石鏃。いずれもサヌカイト製で、無茎式のものである。縄文時代相当のものと考えてよかろう。２は突帯文を施す深鉢。突帯上には二枚貝による押し引き刺突文があり、外面には同じく二枚貝による条痕文が見られる。五貫森式に相当しよう。３は弥生時代前期に相当すると考えられる甕で、いわゆる亜流遠賀川式のものである。

溝SD42出土土器(4～22)　古墳時代前期後半の、比較的遺存状況の良好な土器類がまとまって出土している。溝資料とはいえ、一括資料として認識してよいものである。

４はミニチュア壺。口縁部は指オサエによって開かれる。粗製である。５～７は器台。５は椀形の受部、６は二段に屈曲した受部となる。形態的には後述の高杯13と類似すると考えられる。７は台裾部。

８・９は小形丸底壺。ミガキは見られない。９の底部は平たくなっている。10は壺の口縁部。

11～13は高杯。11は杯口縁部が直線的に開き、脚裾は脚柱から屈曲をもって開く形態をなす。12は11と同じ形態のもの。これらは、形態的には元屋敷式系統からの流れではないといえる。しかし、脚柱外面に見られるハケメと面取り状の板ナデは、左上方から右下方に向けて斜めにナデ下ろしており、これは後述のＳ字甕の脚台部に見られるハケメ調整手法と同じである（以下、この手法を「脚部斜ナデ手法」と呼称)。つまり、形態的にはそれまでの伝統上に無いにもかかわらず、脚部斜ナデ手法などの細部にＳ字甕との共通性があることから、形態の相違が生産工人の違いとしては表れていないことを示すといえる。

13は、内弯する杯下部の上端を横へ張り出し、そこに直線的に開く杯口縁部を取り付けている。北陸地方によく見られる形態といえようが、この時期には彼の地でも少なく、短絡的に「北陸系」ということはできない。

14は尖底をなす甕。外面はケズリで調整し、内面には板ナデを施している。口縁部は「く」の字形に開き、端部はやや摘み上げている。第３次調査区の土器番号101と類似したものである。

15～19はＳ字甕である。実用かどうかあやしい超小形品(15)、口径10cm程度の小形品(16)、口径14cm程度の中形品(17)、口径16cm前後の大形品(18・19)の４法量が認められる。口縁部はＳ字状に屈曲し、端部には面を持つ。体部は丸く、体部最大径は体部のほぼ中央に来る。外面は、羽状ハケメを施した後、体部上半に横方向の装飾的ハケメを入れる。脚裾は内側に折り返され、接地部が面をなしている。この特徴から、川崎志乃氏による島貫分類[1]（以下、「島貫分類」と呼称）のＳ字甕Ｄ類に相当する。

なお、18・19は脚台部を意図的に打ち欠いている可能性がある。

20～22は壺で、いずれも二重口縁をなすものである。口縁部上段が短くなる形態をなしている。20は口縁端部が内側に肥厚しており、この形態からは布留形甕や壺からの影響を考慮する必要がある。22は口縁部上段を意図的に打ち欠いていると考えられる。

これらの土器群は非常にまとまりの良いもので、近隣の編年では島貫Ｃ４期[2]、尾張の編年では松河戸Ｉ式[3]に併行するものである。

流路SR41下層出土土器(23～57)　第3次調査区の、流路ＳＤ４と一連の遺構である。古墳時代前期から後期にかけての土器が認められる。23～37・39～41・43～47・49は古墳時代前期、38・42・48・

50～57は古墳時代中後期のもの。53～57は須恵器、それ以外は土師器である。

23は脚付壺。外面には煤が付着している。島貫C1期併行。24は小形丸底壺で、縦方向のミガキを基調とする。島貫C３期古相併行。25は平底の鉢で、粗雑なハケメを施している。

26～38は高杯。26～28は杯部で、杯下部から直線的に開く杯口縁部を持つものであり、近畿地方の布留式の影響を受けたものである。26･27は島貫C3期古相、28は島貫C４期併行である。

29は脚裾が内弯し、脚柱に櫛描横線文を施すもので、この地域の伝統的な高杯形態で、島貫C２期新相併行。それに対し、30～34は近畿地方からの影響を受けたもの。ミガキの状態を見ると、30は横方向、31～34は縦方向であり、30が近畿方面からの搬入品、31～34はその影響を受けたご当地品と考えられる。島貫C３期古相から新相にかけてのものと考えられる。35は先述のSD42と併行する時期のもので、脚柱部には「脚部斜ナデ手法」が見られる。36は古墳時代後期の高杯である。

39は二重口縁壺。口縁屈曲部の擬口縁は、ヨコナデを施して非常に丁寧に作られている。内外面には横方向のミガキがあり、この点は伊勢の通有のものと異なっている。

40～48は台付甕で、S字甕に相当する。40はA類、41･44はC類、42･45～47はD類古、43はA類ないしいはB類、48はE類である。脚台部でC類かD類かを判断した理由は、素地粘土が砂っぽいザラつきを持っている（C類）か、そうでないか（D類）、脚裾の接地部に平坦面をなしている（D類）か、そうでないか（C類）で見分けた。

43は体部下方に明瞭な擬口縁を有しており、それを境に素地粘土が変わっている。48は、口縁部形態を見ると須恵器併行期に相当するS字甕であるが、この時期には基本的に喪失している脚裾端部の折り返しが認められる。脚部全体としてもやや大振りである。また、体部外面上半には、羽状ハケメの後、装飾的ハケメで円弧を描いている。このように、48のS字甕は異質な部分が多い。

49は丸底の甕で、布留形甕である。近畿方面からの搬入品であろう。内面は体部上半にのみケズリが見られる。また、体部外面上部には櫛状工具による刺突が見られる。木下正史氏による編年[4]の布留２式併行期であろう。

50は平たい丸底の甕である。外面底部には籠目の圧痕がある。時期的には古墳時代後期のものと考えられる。

51は平底の鉢で、底部には木葉圧痕がある。52は台付小形鉢の脚部と考えられる。いずれも、島貫D期[5]に併行するものと考えられる。

53は須恵器高杯の脚部。有蓋高杯と考えられる。54～56は須恵器杯蓋で、田辺昭三氏による陶邑編年（以下、「田辺編年」と呼称）[6]のＴＫ10型式からＭＴ85型式に併行するものと考えられる。56の内面には同心円当て具痕が見られる。57は須恵器杯身で、田辺編年のＴＫ10型式に併行する。

流路SR41上層出土土器類(58～72)　第3次調査区の、流路ＳＤ８と一連の遺構である。飛鳥～奈良時代のものがある。飛鳥～奈良時代の土器については、便宜上、飛鳥・藤原・平城京の都城における土器分類と編年（以下、「都城分類」「都城編年」と呼称）[7]を併記する。

58～64は土師器杯皿類。58は杯蓋。59･60は小形の杯で、59は杯A、60は杯Cに相当する。61～63は杯A。61は飛鳥Ⅲに相当すると考えられる。61･63は極めて精緻な土器。64は皿A。

65は弧状を呈する土師器の破片。一応、回転体として図示したが、竈形土器の鍔部分の破片かもしれない。66～68は土師器甕。

69～72は須恵器。69は杯蓋、70～72は杯身である。

溝SD58出土土器(73)　古墳時代前期初頭の近江系の甕である。口縁部外面には浮文が施され、体部外面には櫛・ヘラ状工具による施文があり、その特徴から見て、近江方面から搬入されたものである可能性が高い。

溝SD45出土土器(74)　奈良時代初頭前後の土師器甕である。

溝SD47出土土器(75～77)　75は壺。底部の調整手法や素地粘土の状態から、古墳時代前期前半頃のものと考えてよいが、口縁部と体部のバランスが悪く、異質な印象を受ける土器である。口縁部にはヨコナデが施されておらず、全体に粗雑なつくりで

ある。76は手焙り形土器。体部のみ残る。77はS字甕で、B類ないしはC類である。

土坑SK44出土土器(78～82)　78は須恵器蓋。外面にはカキメが見られる。79は須恵器杯蓋で、内面に返りのあるもの。80は須恵器杯身。

81は「濃尾形甕」[8]と呼称されているもの。平底で、体部下方に擬口縁がある。それを境に内面上部にはハケメが施されており、まるでS字甕B類以前の甕内面のようである。素地粘土が他の土器とは異なっており、濃尾方面からの搬入品と考えられる。内面には炭化物が付着している。82は丸底の甕。体部外面上部は、被熱により器壁が剥離している。

以上の土器群は、概ね飛鳥Ⅳ頃に併行するものであろう。

溝SD48出土土器(83)　土師器壺の口縁部である。時期的には古墳時代前期頃かと考えられる。

溝SD55出土土器(84)　須恵器壺を図示した。奈良時代頃のものであろう。

包含層出土土器(85～90)　遺構に伴わずに出土した土器を、包含層出土土器として記述する。

85は須恵器杯身。飛鳥～奈良時代のものであろう。86は土師器椀で、内面にはミガキが施されている。全体に白っぽい色調であるが、黒色土器の黒化部分が何らかの要因で吸着しなかったものではないかと考える。

87は把手付鉢。口縁部は内弯しており、いわゆる「近江形甕」の類と考えられ[9]、伊賀辺りからの搬入品かと考えられる。

88は鍔付の土器で、甑か竈と考えられる。89は甑の口縁部。90は須恵器の大形鉢である。

遺構に伴わない遺物としては、この他に中世前期の陶器椀(山茶椀)、15世紀代の信楽産擂鉢などもあるが、小片のため、図示しなかった。

(伊藤)

b　木製品

木製品は、流路SR41から出土したものがほとんどで、少量が溝SD42から出土している。杭の類が多い。時期的には、搬出した土器類から、古墳時代中後期を中心とした時期のものと考えられる[10]。

1．祭祀具

2点の祭祀具を図示した。

陽物形(91･92)　いずれも全長約10cmで、その形態から男根を象ったものと考えられる。いずれも先端を膨らませている。木取りは、樹皮を剥がした割材を加工したものと考えられる。この2点はSD42から出土した。

2．　容器類

槽および曲物の底板などが出土している。

槽(93)　一木作りの小形槽で、完形品である。体部から底部にかけてやや内弯気味に立ち上がっている。短辺部分が若干厚い。

曲物底板(94)　側面の上面は切り込まれ、段を設けており、曲物の底板と考えられる。底板の表面と段部分に貫通する孔が認められるほか、底板側面にも1ヶ所穿孔がある。

曲物蓋(95)　平面の残存長が約41cmの、半円形のものである。側面に段が無く、綴じ孔も遺存していないことから、曲物の蓋と考えた。表面の一部は炭化している。

容器?(99)　原材の外縁部を全長約50cmの直方体に加工し、その内側を外部にあわせて刳り抜いている。この形態から、細長い容器が半分のみ残存したものと考える。

3．　生産用具

生産用具としては、農耕具である曲柄鍬の柄および横槌のほか、叩き具・紡績関係用具なども出土している。

横槌(96)　全長約34cm、最大幅約6cmで、槌部が細長い形態である。柄部と槌部との境界は比較的明瞭である。槌部の中央は著しく摩滅しており、柄部には握痕が見られる。用途としては、豆打ちなどに用いられたものであろう。

脚部?(97)　平面が台形で、上端にホゾを設けている。ホゾを含めた全長は11.8cmで、小形腰掛の脚部ではないかと考える。

叩き具(98)　全長29cmの細長い形態である。一面は、柄部を中心に比較的丁寧に削られている。もう一面は木目が明瞭で、使用の際に浮き出たものと考えられる。このことから、これを叩き具と考えた。

曲柄鍬の柄(100)　柄の頭部が、鍬身部の刃とは

逆方向に反る反柄と考えられる。ただし、上端部分がさらに反り返っている点は、柄とするには若干の疑問点でもある。鍬台から握りまで、2片分約63cmが残存している。紐掛けは、鍬台下端の段と、上端にある孔の2ヶ所と考えられる。上端は、この孔に紐を通したものと考えられる。

抉入りの板材(101･102)　ともに板材で、両端に抉りが見られる101と、片側にのみ見られる102とがある。101の側面には、貫通する2ヶ所の孔がある。機織り具の一部である可能性が考えられる。

枠(103･104)　いずれも断面方形の棒状具である。104は、図の上部に段と貫通する円孔が形作られており、十字形に組み合わされたものの中央に円棒状具が通るものと考えられる。この形態から、製糸具である枠と考えられる。103も形態的には同じである。

4．板材・原材など

用途が明確でないものをここに一括する。

有孔の板状製品(105)　方形を意識した形態の板状製品で、一端には1ヶ所孔が開けられている。

板材･原材(106～117)　106～108は、いずれも短く切った丸太材の一端を斜めに削り取っているものである。このうち、108のみが丸太のままで、106･107は半裁ないしはそれ以上の裁断を伴っている。形態的には板材である109も､斜めに削り取る方法は同じである。

110～117は板材の類。110は一端を杭状に加工する。

112は、一端が段状に整形されており、112･113は出ホゾ状の加工もある。

棒状加工品(118)　一端は破損しているが、残っている一端は丸く仕上げている。

5．杭類

SR41に打ち込まれていた杭類である。杭列1･2のものを、ここでは用途が明確でないものをここでは一括する。

杭には、原材となる自然木をそのまま用いているもの(a類;119～131･147～149)と、割材を用いるもの(b類;132～146)、対面する2面を側面に整形するもの（c類;150・151)、の3種類がある。

a類のものは、直径2～15cm内外のものが見られる。b類のものは木取りの方法がいくつかあり、芯から放射状に木取りしているもの、板目のもの、柾目のものなど、様々である。c類は直径15cm内外のものが多い。

簡単に言えば、a類→b類→c類の順に大形のものが増すといえるが、なぜc類のような調整方法を採用する必要があったのかはよく分からない。

（濵辺・伊藤）

＜註＞

(1)　川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」(『嶋抜』Ⅲ　三重県埋蔵文化財センター　2001年)

(2)　註（1）に同じ

(3)　赤塚次郎「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』((財）愛知県埋蔵文化財センター　1994年)

(4)　安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第2号　1974年)

(5)　伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土器」（註（1）文献)

(6)　田辺昭三『須恵器大成』(角川書店　1981年)

(7)　都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器1　都城の土器集成』(1992年）を参照した。

(8)　濃尾形長胴甕については、考古学フォーラム座談会3「長胴甕とその時代」(『考古学ﾌｫｰﾗﾑ』11　1999年）を参照した。

(9)　笠井賢治「北伊賀地域における古代前半期の土師器甕」(『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集　1999年)

(10)　木製品類の記述にあたっては、『木器集成図録』および穂積裕昌『六大A遺跡・木製品編』(三重県埋蔵文化財センター　2000年）を参照した。

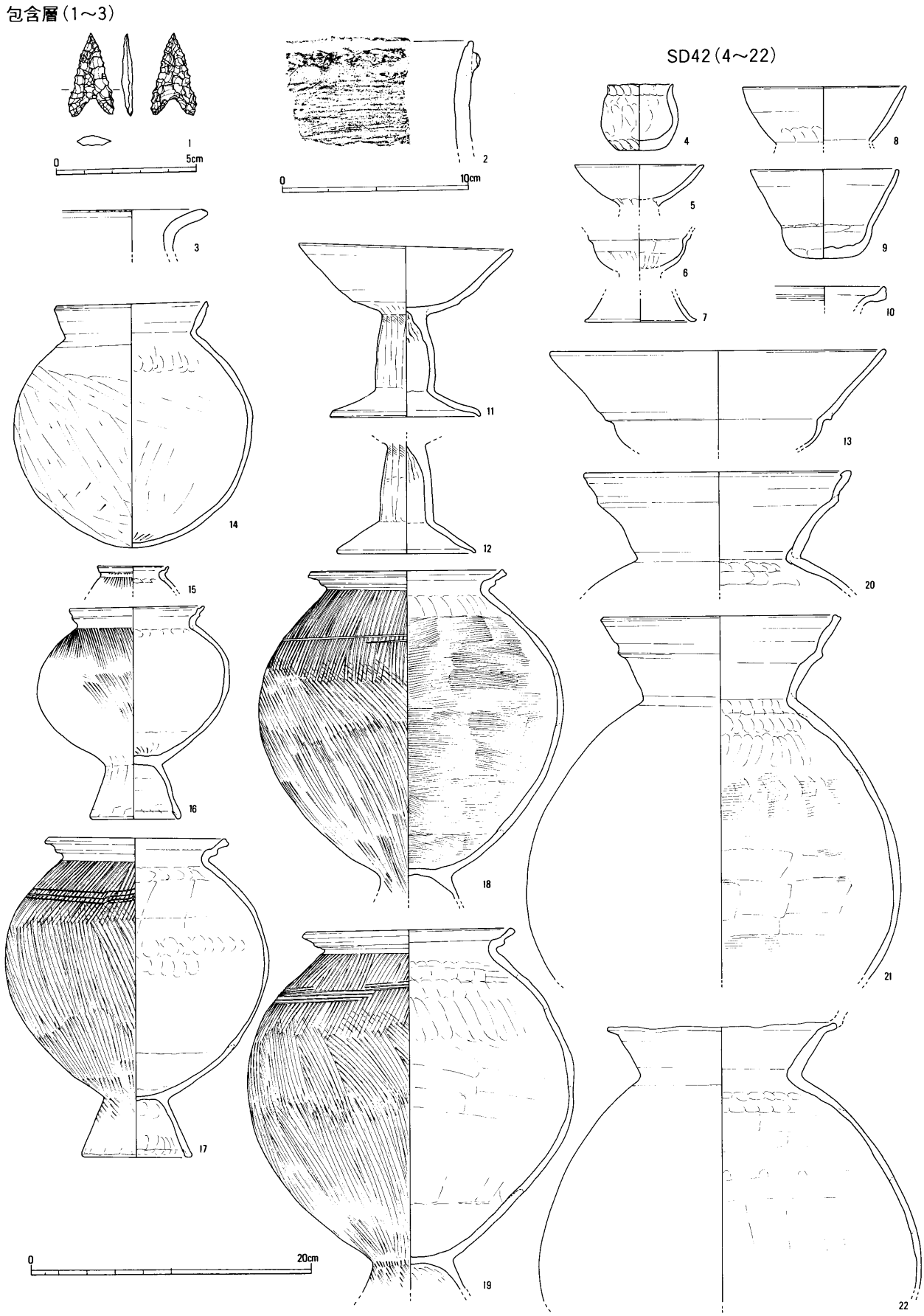


fig. 24　第４次調査区出土遺物(1)（１：４）

SR41下層(23～57)

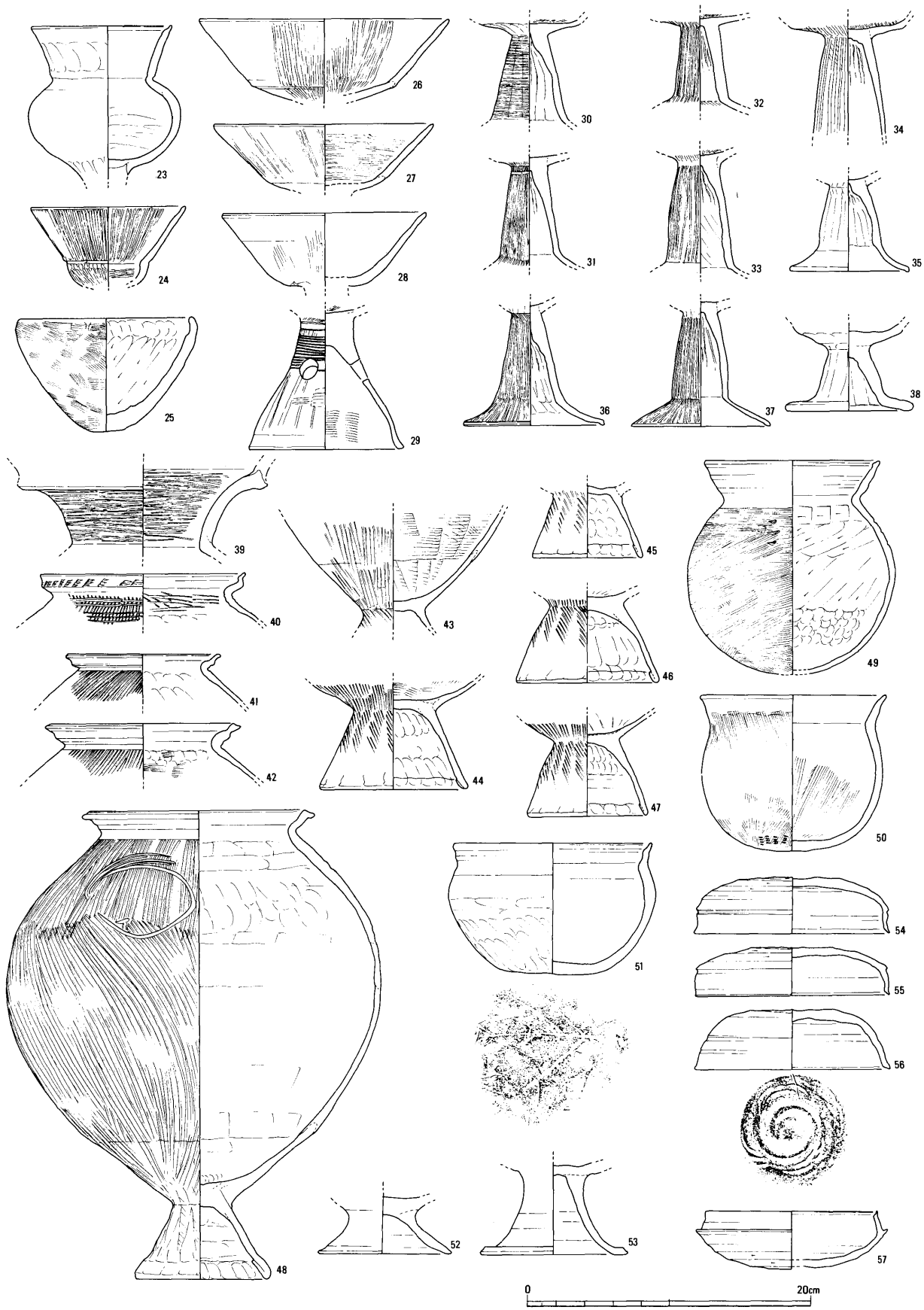


fig. 25　第4次調査区出土遺物(2)（1：4）

SR41上層(58～72)

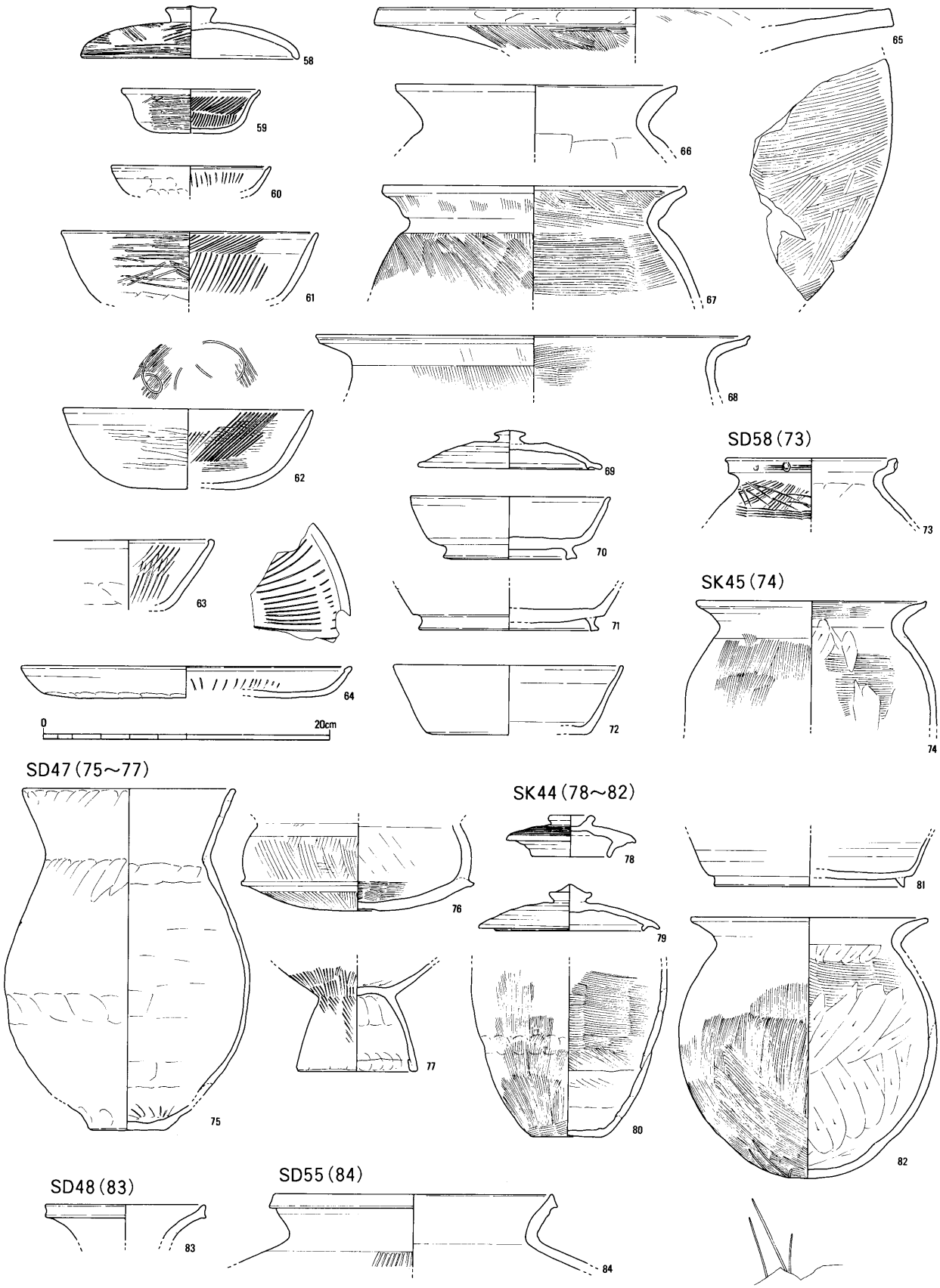


fig. 26　第4次調査区出土遺物(3)（1：4）

包含層(85～90)

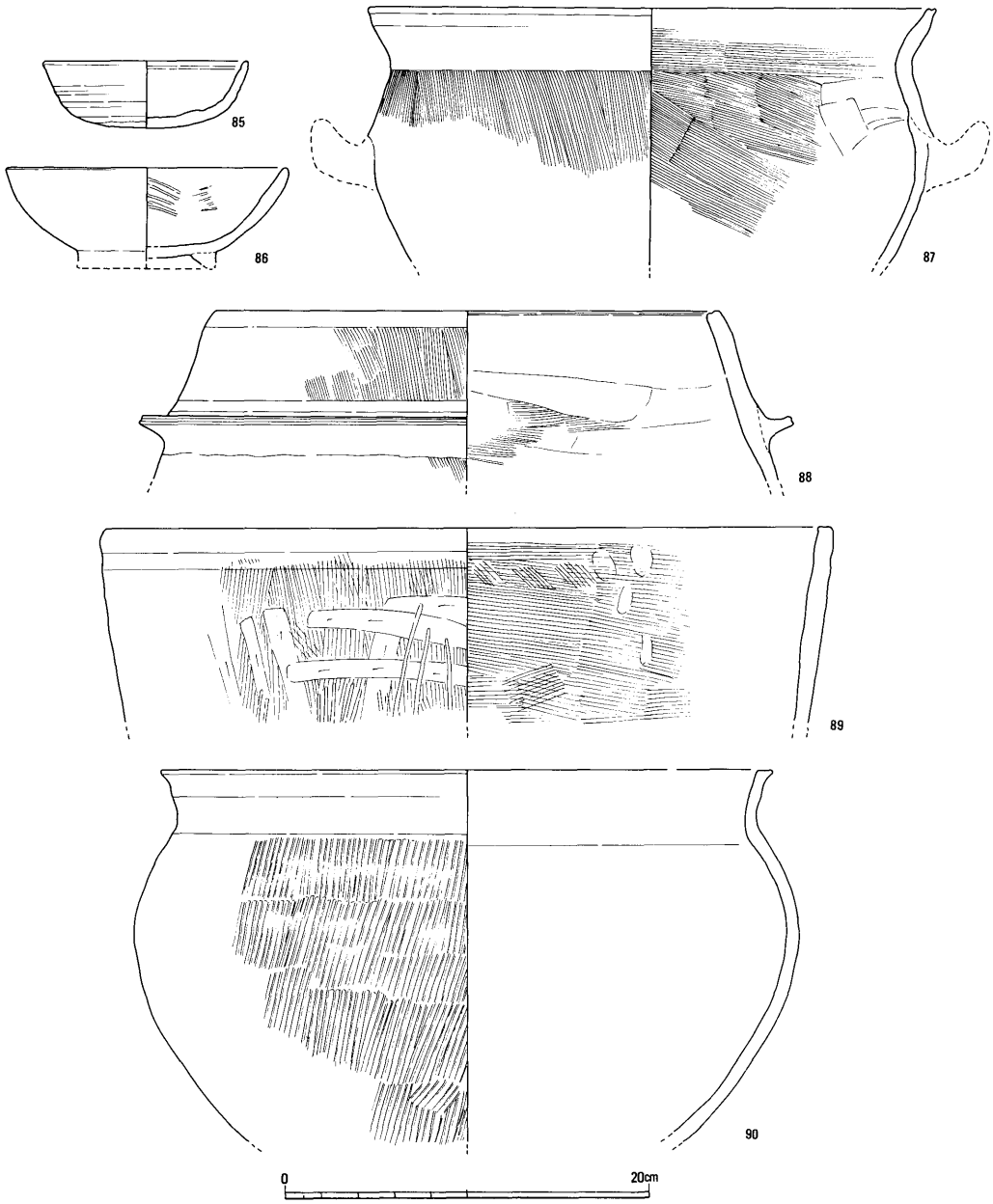


fig. 27　第4次調査区出土遺物(4)（1：4）

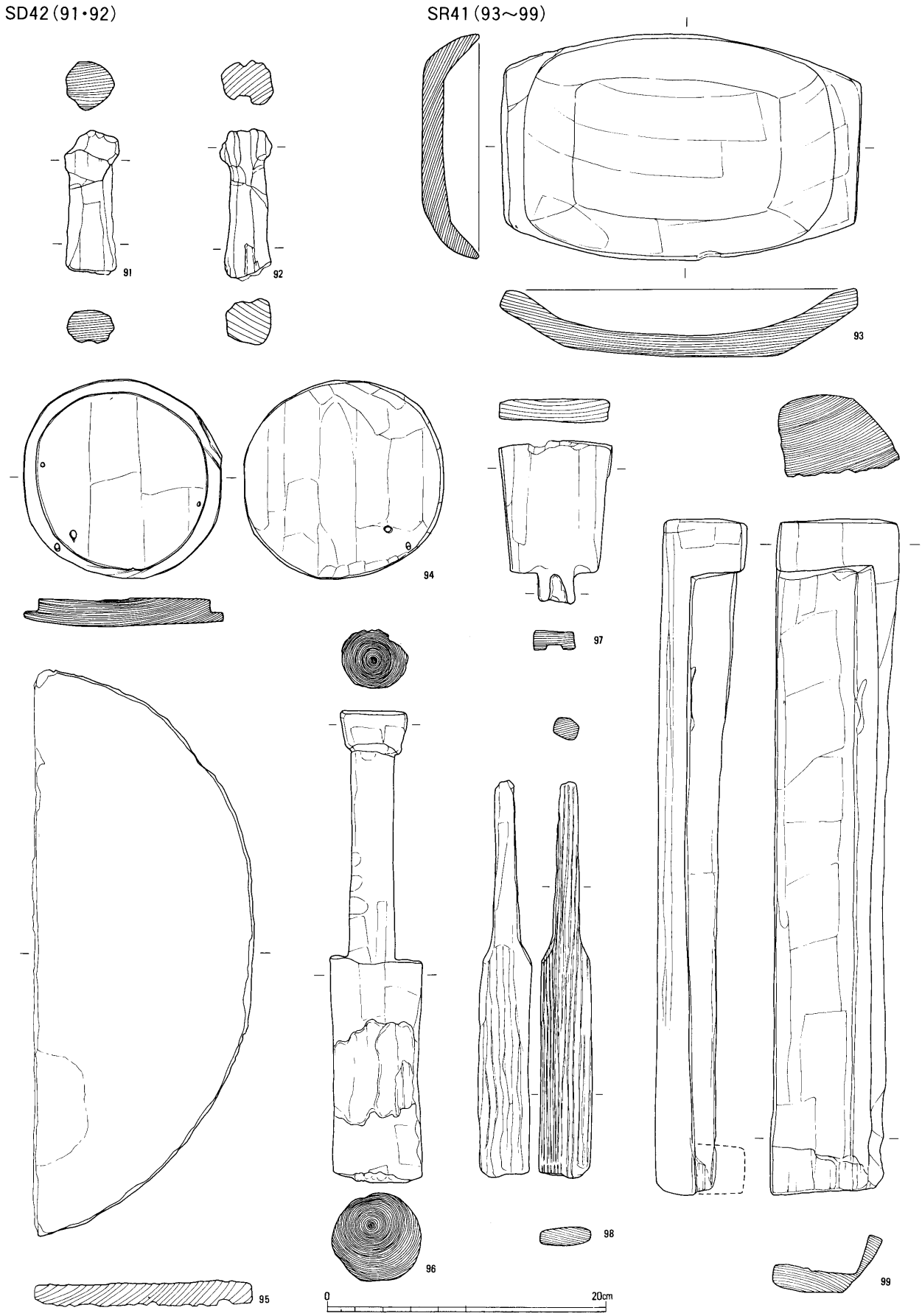


fig. 28　第4次調査区出土遺物(5)（1：4）

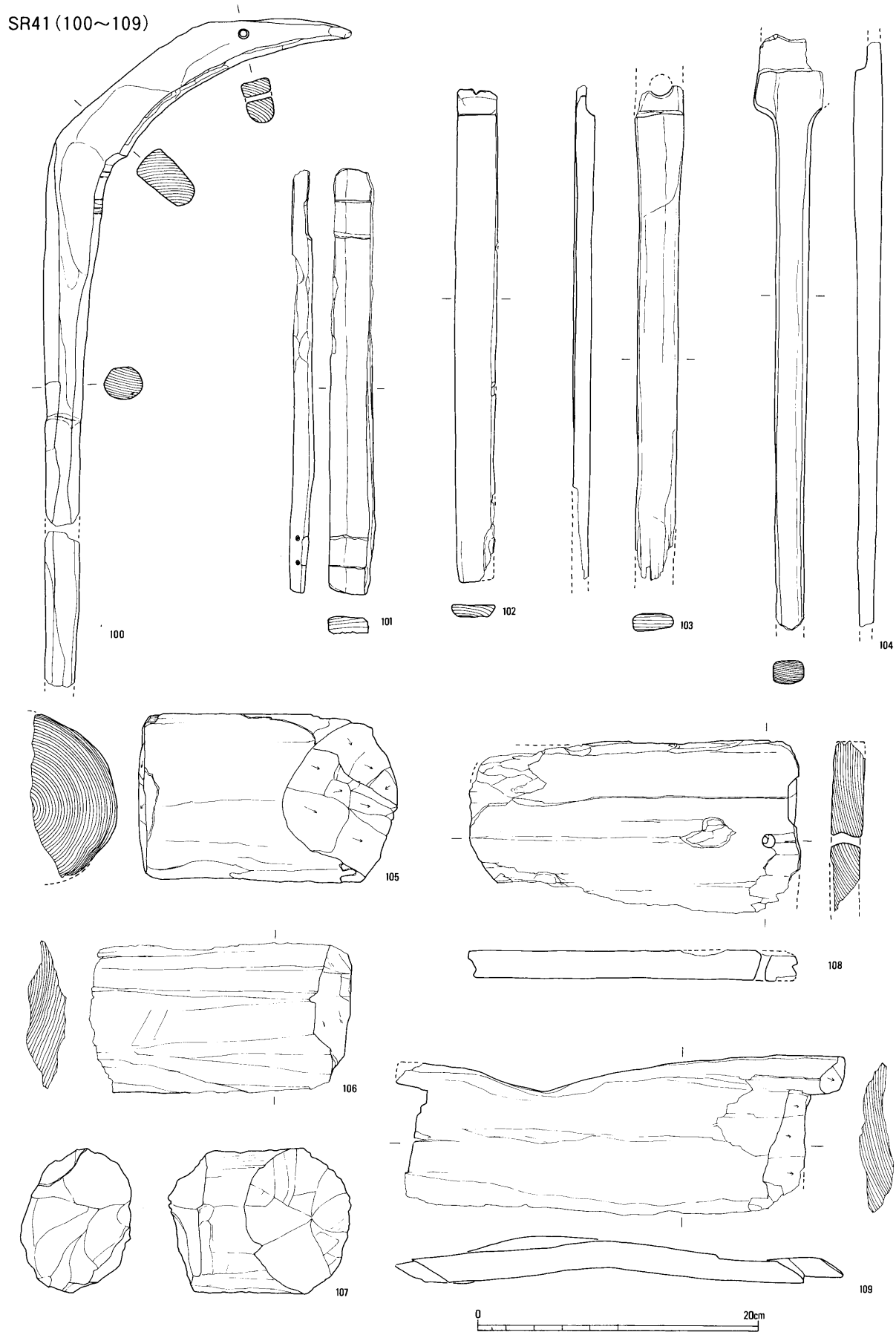


fig. 29　第４次調査区出土遺物(6)（１：４）

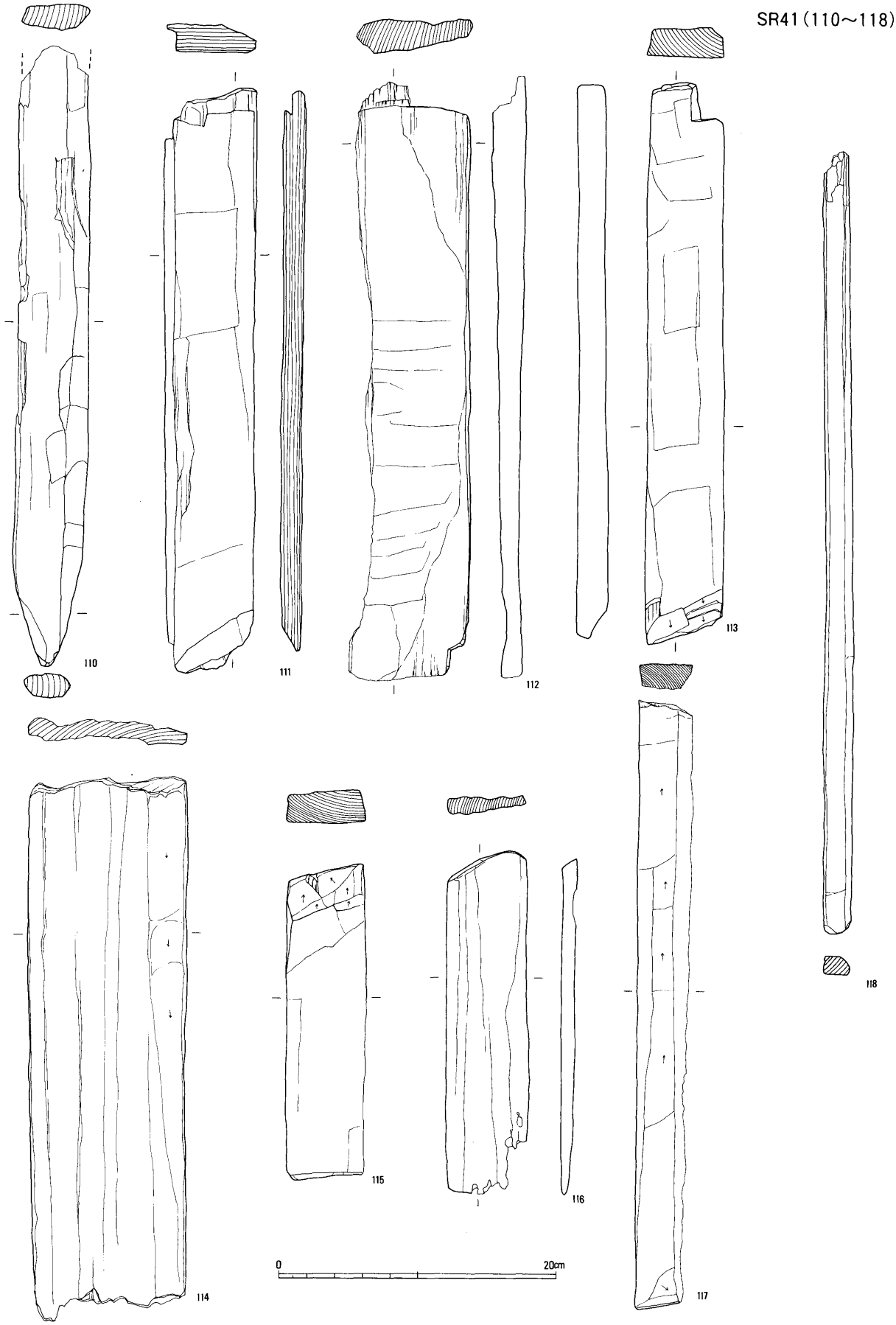


fig. 30　第４次調査区出土遺物(7)（１：４）

SR41(119～131)

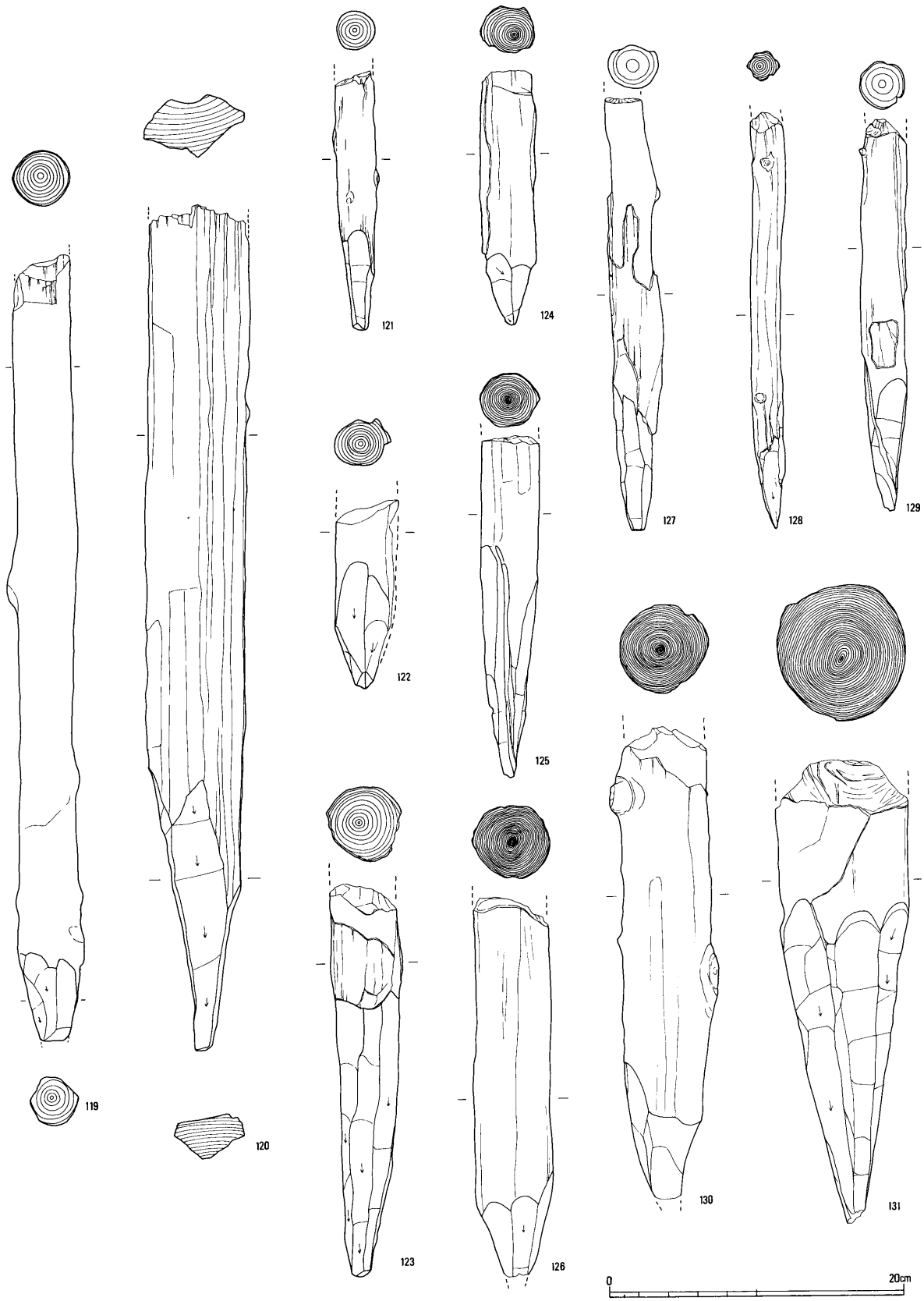


fig. 31　第4次調査区出土遺物(8)（1：4）

SR41(132～143)

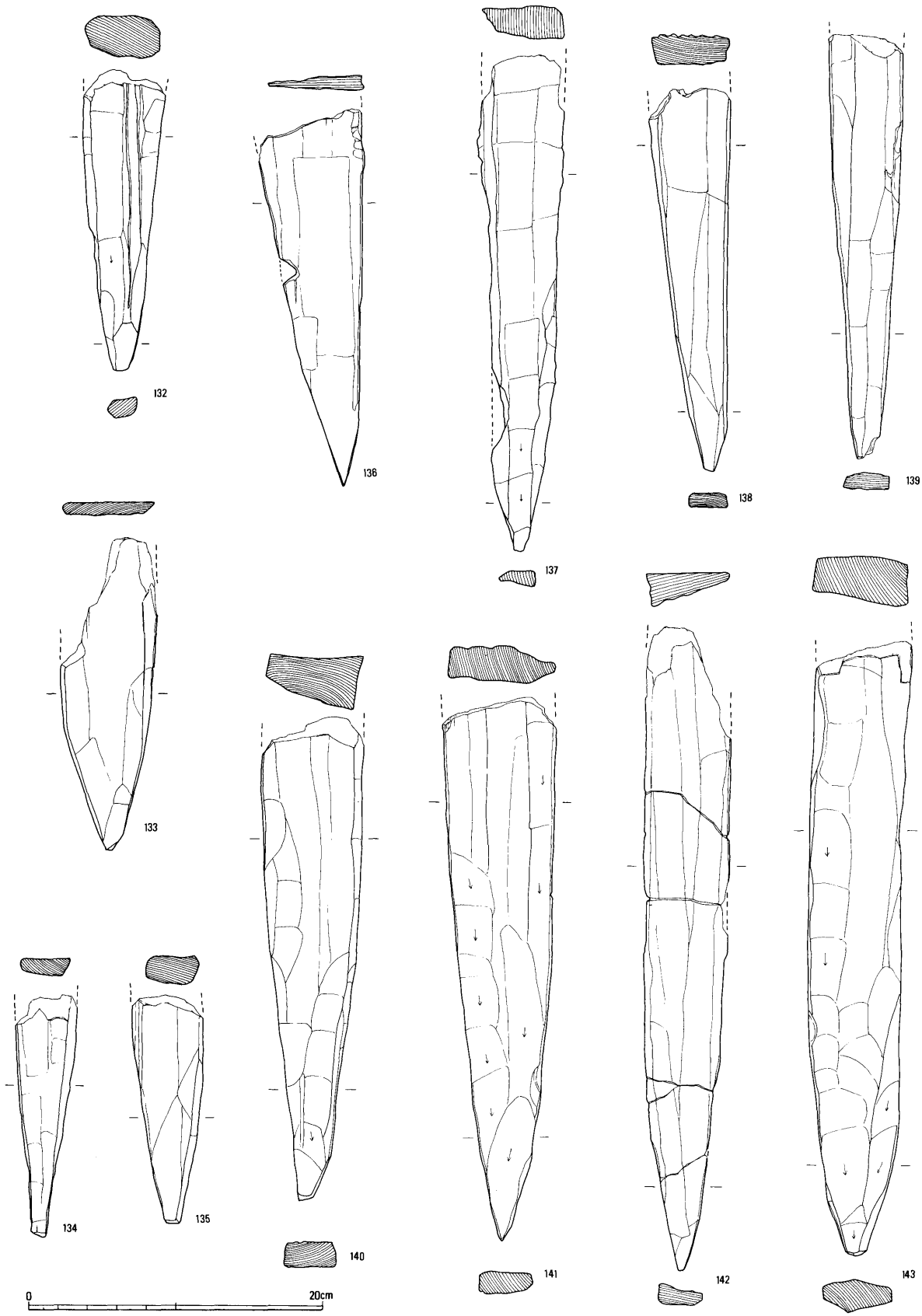


fig. 32　第４次調査区出土遺物(9)（1：4）

SR41(144～151)

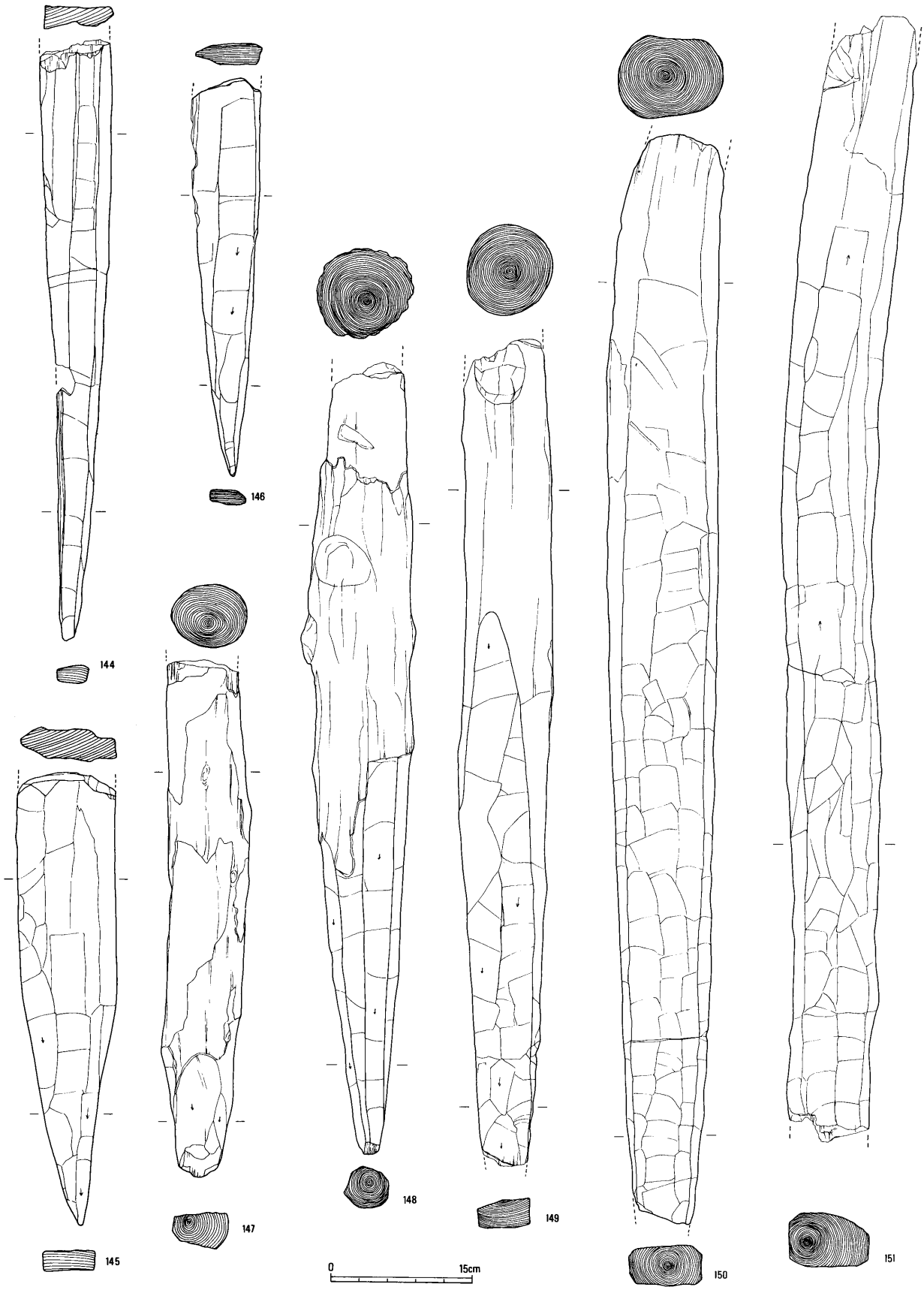


fig. 33　第４次調査区出土遺物(10)（１：４）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
1	5801	石鏃	4次	c5	SR41下層	(長)2.42	チャート製				重さ1．2g
2	2303	縄文土器　深鉢	4次	b13	SD47(混入)	(口)−	外；板状工具による条痕文→突帯上に押し引き施文　内；ナデ	粗	黄灰	口縁部片	
3	2202	弥生土器　甕	4次	b16	SK50(混入)	(口)−	外；ヨコナデ→刻目文 内；ヨコナデ	粗	褐灰	口縁部片	弥生前期
4	403	土師器　ミニチュア壺	4次	b5	SD42	(口)4.8	外；オサエ・ナデ 内；オサエ・ナデ	粗	黄灰	口縁2／3	底部は平底気味
5	103	土師器　小形器台	4次	b5	SD42　p10	(口)9.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／4	
6	704	土師器　小形器台	4次	a6	SD42	(屈曲)7.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	屈曲部1／4	
7	906	土師器　小形器台	4次	a6	SD42	(脚裾)8.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	脚裾1／4	
8	904	土師器　小形壺	4次	b5	SD42	(口)11.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／2	4片
9	402	土師器　小形壺	4次	a6	SD42　p12	(口)10.5	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／2	底部は平底気味
10	703	土師器　壺	4次	a6	SD42	(口)15.1	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	灰褐	口縁1／12	
11	401	土師器　高杯	4次	b5	SD42　p5	(脚裾)9.9	外；ハケメ→ヨコナデ 内；絞り目→ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	脚裾完存	外面のハケメはS字甕脚台部の調整と同じ
12	203	土師器　高杯	4次	b5	SD42　p4	(口)24.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；絞り目→ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	脚裾1／4	外面のハケメはS字甕脚台部の調整と同じ
13	202	土師器　高杯	4次	a6	SD42　p1	(口)11.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／8	
14	102	土師器　丸底甕	4次	b5	SD42　p11		外；ナデ→ケズリ・ヨコナデ 内；オサエ・板ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙淡	口縁3／4	
15	803	土師器　台付甕	4次	b5	SD42	(口)5.1	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	黄橙	口縁1／6	
16	302	土師器　台付甕	4次	b5	SD42　p2	(口)9.6	外；ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁3／4	外面に煤、内面に炭化物
17	101	土師器　台付甕	4次	b5	SD42　p10	(口)13.0	外；ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁3／4	外面に煤
18	301	土師器　台付甕	4次	b5	SD42　p3	(口)14.0	外；ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰黄褐	口縁3／4	外面に煤
19	601	土師器　台付甕	4次	b5	SD42　p11	(口)14.5	外；ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁5／6	外面に煤
20	701	土師器　壺	4次	b5	SD42	(口)19.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	粗	黄灰	口縁1／4	口縁部に布留の影響
21	501	土師器　壺	4次	a6	SD42　p1	(口)17.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰褐	口縁完存	外面に煤
22	201	土師器　壺	4次	b5	SD42　p7	(頸)11.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	頸部完存	
23	1202	土師器　脚付壺	4次	c1	SR41下層	(口)9.7	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡赤褐	体部完存	外面に煤、何か入れて煮ている
24	1404	土師器　小形壺	4次	c3	SR41下層	(口)10.8	外；ナデ→ミガキ 内；ナデ→ミガキ	密	暗灰黄	口縁1／8	
25	1304	土師器　鉢	4次	c3	SR41下層	(口)12.1	外；ナデ・ハケメ 内；ナデ	粗	黄灰	口縁1／5	底部は平底気味
26	1002	土師器　高杯	4次	c2	SR41下層	(口)17.5	外；ナデ→ミガキ 内；ナデ→ミガキ	粗	黄灰	口縁1／10	
27	1402	土師器　高杯	4次	c4	SR41下層	(口)15.2	外；ハケメ→ナデ 内；ナデ→ハケメ	粗	灰黄褐	口縁1／3	
28	1403	土師器　高杯	4次	c4	SR41下層	(口)14.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	
29	2503	土師器　高杯	4次	c4	SR41下層	(脚裾)10.8	外；ミガキ→櫛描横線文 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	脚裾1／5	透かしは3方
30	1308	土師器　高杯	4次	b2	SR41下層	(脚柱)2.8	外；ナデ・ハケメ→ミガキ 内；ナデ	密	淡橙	脚柱完存	布留系
31	1307	土師器　高杯	4次	c3	SR41下層	(脚柱)2.8	外；ナデ・ハケメ→ミガキ 内；ナデ	密	褐灰	脚柱完存	
32	1706	土師器　高杯	4次	c4	SR41下層	(脚柱)2.8	外；板ナデ→ミガキ 内；絞り目→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	脚柱完存	
33	1705	土師器　高杯	4次	c5	SR41下層	(脚柱)2.9	外；板ナデ→ミガキ 内；絞り目→ヨコナデ	粗	灰黄褐	脚柱完存	
34	1605	土師器　高杯	4次	b4	SR41下層	(脚柱)3.4	外；板ナデ→ミガキ 内；絞り目	粗	淡黄橙	脚柱完存	杯下部内面は平行ミガキ
35	1203	土師器　高杯	4次	c4	SR41下層	(脚裾)8.3	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	脚裾1／2	外面のハケメはS字甕脚台部の調整と同じ
36	1301	土師器　高杯	4次	c3	SR41下層	(脚裾)9.8	外；ナデ→ミガキ 内；ナデ→ヨコナデ	密	淡褐	脚裾1／8	
37	1604	土師器　高杯	4次	c5	SR41下層	(脚裾)9.8	外；板ナデ→ミガキ 内；絞り目→ヨコナデ	粗	淡褐	脚裾1／2	
38	1603	土師器　高杯	4次	c2	SR41下層	(脚裾)8.9	外；板ナデ→ヨコナデ 内；ケズリ→ヨコナデ	密	橙	脚裾4／5	
39	1701	土師器　壺	4次	b2	SR41下層	(頸)17.4	外；ナデ→ミガキ 内；ナデ→ミガキ	粗	灰黄	頸3／4	二重口縁壺
40	1704	土師器　台付甕	4次	c3	SR41下層	(口)14.1	外；ハケメ→装飾ハケ・押し引き刺突 内；ナデ・ハケメ→ヨコナデ	粗	暗灰黄	口縁1／4	
41	1003	土師器　台付甕	4次	c2	SR41下層	(口)10.9	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1／5	
42	1401	土師器　台付甕	4次	c4	SR41下層	(口)13.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1／6	
43	1004	土師器　台付甕	4次	c2	SR41下層	(脚柱)4.4	外；ハケメ 内；ナデ→ハケメ	粗	淡黄橙	脚柱1／4	S字甕A・B類　製口縁で素地粘土が変化
44	1502	土師器　台付甕	4次	c5	SR41下層	(脚裾)10.5	外；ハケメ・ナデ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	粗	淡橙	脚裾1／2	
45	1505	土師器　台付甕	4次	c1	SR41下層	(脚裾)7.9	外；ハケメ・ナデ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	粗	淡黄橙	脚裾2／3	

tab.12　出土遺物観察表（第4次ー1）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
46	1503	土師器　台付甕	4次	c2	SR41下層	(脚裾)10.1	外；ハケメ・ナデ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	粗	灰黄褐	脚部完存	脚部内面に砂含む素地を補填
47	1504	土師器　台付甕	4次	c3	SR41下層	(脚裾)8.5	外；ハケメ・ナデ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	粗	暗灰黄	脚部完存	体部内面底にハケメ後に砂含む素地を補填
48	1101	土師器　台付甕	4次	c3	SR41下層	(口)16.2	外；ナデ・ハケメ→ヨコナデ・装飾ハケ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁11／12	円弧状の装飾ハケは珍しい
49	1001	土師器　丸底甕	4次	c2	SR41下層	(口)12.4	外；ハケメ→ヨコナデ・刺突（文） 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ	粗	灰黄褐	体部1／2	布留系、搬入？
50	1501	土師器　丸底甕	4次	c4	SR41下層	(口)13.0	外；ハケメ→ヨコナデ・籠目圧痕 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁2／3	底部外面に籠目圧痕あり
51	1201	土師器　鉢	4次	c4	SR41下層	(口)13.9	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	ほぼ完存	底に木葉圧痕
52	1302	土師器　台付鉢	4次	b2	SR41下層	(脚裾)9.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡褐	脚裾2／3	
53	1602	須恵器　高杯	4次	b1	SR41下層	(脚裾)10.4	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	暗灰	脚裾3／4	
54	1305	須恵器　杯蓋	4次	b2	SR41下層	(口)13.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	青灰	口縁3／4	外面に煤付着
55	1306	須恵器　杯蓋	4次	b3	SR41下層	(口)13.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／2	
56	1303	須恵器　杯蓋	4次	b2	SR41下層	(口)13.8	外；回転ナデ→回転ヘラ起こし 内；回転ナデ	密	灰白	完存	
57	1601	須恵器　杯身	4次	b3	SR41下層	(口)12.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；ナデ	密	灰	口縁1／4	
58	1702	土師器　杯蓋	4次	b1	SR41上層	(口)15.1	外；ナデ→ミガキ 内；回転ナデ	密	淡黄橙	口縁1／3	
59	2002	土師器　杯	4次	c2	SR41上層	(口)9.8	外；ナデ→ミガキ 内；ナデ→暗文	密	淡黄橙	口縁1／3	
60	1906	土師器　杯	4次	c2	SR41上層	(口)11.0	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／4	
61	1905	土師器　杯	4次	c2	SR41上層	(口)17.9	外；ナデ→ケズリ→ミガキ 内；ナデ→暗文	密	橙	口縁1／10	
62	1801	土師器　杯	4次	c2	SR41上層	(口)17.2	外；ナデ→ミガキ 内；ミガキ→暗文	密	橙	口縁1／8	
63	2003	土師器　杯	4次	c2	SR41上層	(口)－	外；ナデ→ケズリ→ミガキ 内；ナデ→暗文	密	橙	口縁部片	
64	1703	土師器　皿	4次	b2	SR41上層	(口)23.1	外；ナデ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	淡橙	口縁1／10	
65	2001	土師器　竈？	4次	c2	SR41上層	(口?)25.2	外；ハケメ→ケズリ 内；ハケメ→ナデ	粗	淡橙	口縁?1／6	カマドの庇部分か？
66	1803	土師器　甕	4次	c4	SR41上層	(口)19.5	外；ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	外面に煤付着
67	1802	土師器　甕	4次	c2	SR41上層	(口)21.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／4	外面に煤付着
68	1901	土師器　甕	4次	c4	SR41上層	(口)30.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／8	外面に煤付着
69	1904	須恵器　杯蓋	4次	c2	SR41上層	(口)13.0	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
70	1804	須恵器　杯身	4次	北部	SR41上層	(口)13.8	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／3	
71	1903	須恵器　杯身	4次	c4	SR41上層	(高台)12.5	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／6	
72	1902	須恵器　杯身	4次	c2	SR41上層	(口)16.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁1／6	
73	905	土師器　甕	4次	b18	SD58	(口)12.0	外；装飾ハケ・浮文（口縁部） 内；ナデ→ヨコナデ	粗	淡褐灰	頸部1／6	近江系甕、搬入？
74	702	土師器　甕	4次	b8	SK45	(口)16.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／6	外面に煤
75	2101	土師器　壺	4次	a12	SD47	(口)14.7	外；ナデ→ヨコナデ 内；ハケメ→ナデ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1／3	外面に煤付着
76	2201	土師器　手焙形	4次	b13	SD47	(体)16.1	外；ハケメ→ナデ 内；オサエ・ナデ→ハケメ	粗	淡黄橙	体部1／5	
77	2103	土師器　台付甕	4次	b13	SD47	(脚裾)8.4	外；ハケメ・ナデ 内；オサエ・ナデ・ハケメ	粗	淡黄橙	脚裾1／6	脚部内面に砂含む素地を補填
78	903	須恵器　壺蓋	4次	b8	SK44	(口)5.6	外；回転ナデ（カキメ）→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	褐灰	口縁3／4	
79	902	須恵器　杯蓋	4次	b8	SK44	(口)10.3	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	口縁1／2	
80	901	須恵器　杯身	4次	a8	SK44	(高台)13.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ 内；回転ナデ	密	灰白	高台1／3	
81	802	土師器　長胴甕	4次	b8	SK44	(底)5.4	外；ハケメ 内；ナデ→ハケメ	粗	淡黄橙	底2／3	濃尾形甕　外面に煤、内面に炭化物
82	801	土師器　甕	4次	b8	SK44	(口)16.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ケズリ→ヨコナデ	粗	淡橙	体部1／3	外面に煤
83	705	須恵器　壺	4次	c12	SD48	(口)11.2	外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1／4	
84	2601	須恵器　壺	4次	c22	SD55	(口)20.0	外；タタキメ→回転ナデ 内；ナデ→回転ナデ	密	灰	口縁1／3	
85	2203	須恵器　杯身	4次	中央	包含層	(口)11.2	外；回転ナデ→回転ヘラ起こし 内；回転ナデ	密	灰白	口縁3／4	
86	2102	黒色土器？　椀	4次	a6	包含層	(口)15.4	外；剥離（ナデ） 内；ミガキ？	密	淡黄橙	口縁1／3	
87	2502	土師器　把手付鍋	4次	北部	包含層	(口)31.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1／5	伊賀近江系
88	2501	土師器　鍔付鍋	4次	北部	包含層	(鍔)35.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	鍔部1／5	
89	2602	土師器　甑	4次	北部	包含層	(口)40.0	外；ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1／10	
90	2401	須恵器　鉢	4次	中央	包含層	(口)33.2	外；タタキメ→回転ナデ 内；ナデ→回転ナデ	密	灰白	口縁1／4	

tab.13　出土遺物観察表（第４次－２）

番号	実測番号	名　称	調査次	グリッド	計測値（cm）	材　　質		備　　考
91	4403	陰陽物	4次	b5	SD42	残存長10.1		
92	4402	陰陽物	4次	b5	SD42	残存長10.7		
93	4601	槽	4次	c5	SR41南4層	長25.8		
94	4701	曲物底板	4次	b3	SR41南3層	直径14		側面と底部に穿孔
95	2901	曲物蓋	4次	b2	SR41北3層	直径46		表面炭化
96	4801	横槌	4次	c4	SR41	長34		
97	4904	指物腰掛？	4次	c5	SR41南3層	残存長11.8		平面形は台形　端部に溝を穿つ
98	4702	叩き板	4次	c5	SR41南3層	長29		片面のみ木目明瞭
99	5304	樋状製品？	4次	b2	SR41北4層	長44		
100	3301	曲柄	4次	c2	SR41北5層	長60.5		柄の先端付近に穿孔
101	3102	抉付棒材	4次	c2	SR41北3層	長30.2		両端に抉入る　側面に穿孔
102	4102	抉付棒材	4次	c3	SR41南4層	長34.7		先端に抉り
103	3902	かせ	4次	c4	SR41南3層	残存長36		孔周辺が太い
104	3901	かせ	4次	b3	SR41南3層	残存長43		
105	4001	板材	4次	c5	SR41南3層	長23.5		側面の近くに1箇所穿孔
106	4201	原材	4次	b3	SR41南3層			
107	3002	板材	4次	b2	SR41北3層	残存長18.5		
108	3101	原材	4次	b2	SR41北3層	長12.5		丸木の両端加工
109	4101	板材	4次	b3	SR41南3層	長31.5		把手つく？　歪み激しい
110	5202	杭	4次	b2	SR41北5層	残存長45		板材加工
111	2902	板材	4次	b3	SR41南3層	長42		
112	3201	板材	4次	b2	SR41北3層	長42.5		炭化する。先端に出ホゾ
113	4303	杭	4次	b3	SR41南3層	長41		
114	3001	板材	4次	b3	SR41南3層	残存長38.5		
115	4002	板材	4次	b3	SR41南3層	長22.7		
116	4202	板材	4次	b2	SR41南4層	長24.5		
117	3202	板材	4次	b2	SR41北3層	長さ44		
118	4302	板材	4次	c4	SR41南3層	長56.5		
119	4503	丸杭	4次	c2	SR41杭列1　w2	残存長53.6		樹皮残る。自然木加工
120	4502	角杭	4次	c2	SR41杭列1　w4	残存長57		
121	5102	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w8	残存長17.5		樹皮残る。自然木加工
122	4903	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w6	残存長12		自然木加工？杭先端のみ
123	4401	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w5	残存長26.5		樹皮残る。自然木加工
124	5604	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w4	残存長17.4		樹皮残る。自然木加工
125	5603	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w37	残存長23.5		自然木加工
126	2701	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w29	残長25.7		樹皮残る。自然木加工
127	5003	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w3	残存長29		樹皮残る。自然木加工
128	4803	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w20	残存長28.3		樹皮残る。自然木加工
129	5002	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w22	残存長26		樹皮残る。自然木加工
130	3801	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w1	残存長32		樹皮残る。自然木加工
131	3701	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w31	残存長31.5		樹皮残る。自然木加工
132	4901	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w18	残存長20.3		板材を加工。先端のみ残
133	5201	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w21	残存長21.5		板材加工
134	5203	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w9	残存長16.5		板材加工　先端のみ残存
135	5101	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w10	残存長15.5		板材を加工　先端のみ残存
136	2702	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w33	残存長25.8		板材加工
137	5601	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w23	残存長34		板材加工
138	3802	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w19	残存長26		板材を加工
139	5001	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w25	残存長28		板材を加工
140	5103	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w35	残存長33		板材加工
141	3401	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w30	残存長37.5		板材を加工
142	4802	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w16	残存長43.6		板材を加工。半分は欠損
143	3402	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w27	残存長42		板材を加工
144	3501	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w24	残存長63		割材を加工
145	2801	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w26	長42.5		板材を加工
146	3602	板杭	4次	c4	SR41杭列2　w11	長42		板材を加工
147	3502	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w14	残存長54.3		樹皮残る。自然木加工
148	5702	丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w41	全長84		樹皮残る。自然木加工
149	5701	板丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w38	長87		丸木を加工　先端は平に整形
150	5401	板丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w39	長115		板材加工
151	5703	板丸杭	4次	c4	SR41杭列2　w40	全長120		板材加工。やや反り気味

tab.14　出土木製品観察表（第4次）

V　第５次調査

1　検出した遺構

第５次調査区は、第４次調査区の西隣に位置している。地形的には北側に向かって緩やかに傾斜し、調査区北端で標高約9.5mである。基本的な層序については、第３・４次調査区と大差はない。

調査区内では、第４次調査で検出した溝の延長を確認したほか、掘立柱建物・土坑・流路などを検出している。時期的には飛鳥・奈良時代のものが中心であると考えられる。

以下、主要な遺構について個別に記述していく。それ以外は、遺構一覧表(tab. 15)を参照されたい。

溝SD70　調査区の南端で確認した幅2～3m、深さ約20cmの南北溝である。断面は逆台形状を呈している。溝の南側部分で分流し、北側に向かって序々に浅くなる。溝の主軸方向はＮ５°Ｅである。溝の上面では軒丸瓦（６）が出土したほか、埋土内からは奈良時代初頭頃と考えられる須恵器がみつかっている。

溝SD73･74　SD70を切る南北溝である。SD73は途中西側に屈曲して途切れる。いずれも幅約0.7m、深さ約20cmでほぼ直線的に延びる。溝の主軸方向はN10°Eとなる。埋土内からは須恵器や土師器片が出土しており、飛鳥・奈良時代を中心とした時期のものと考えられる。

掘立柱建物SB75(fig. 34)　調査区南側のb～c･19～20グリッドで検出した南北４間（5.8m）、東西2間（3.8m）の南北棟の側柱建物である。棟方向はN10°Eとなり、SD73･74とほぼ同一の主

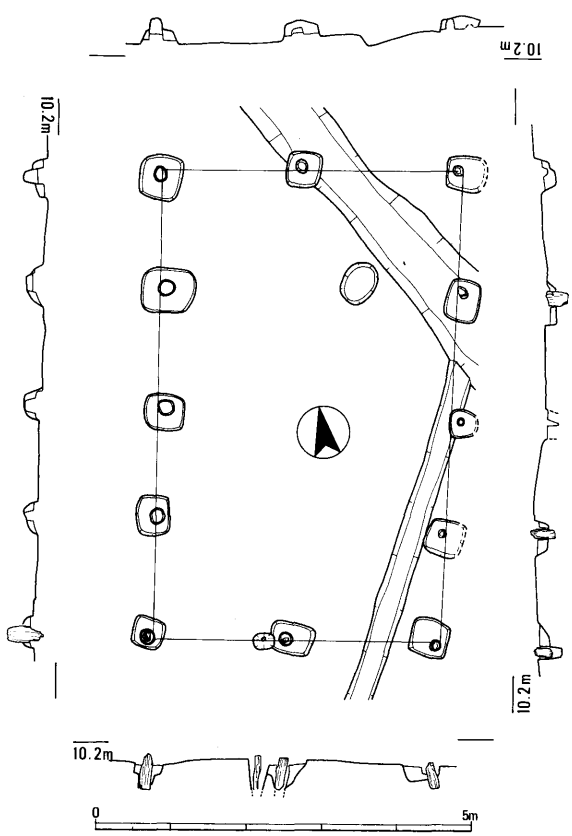


fig.34　第５次調査区掘立柱建物SB75
平面・断面図（１：100）

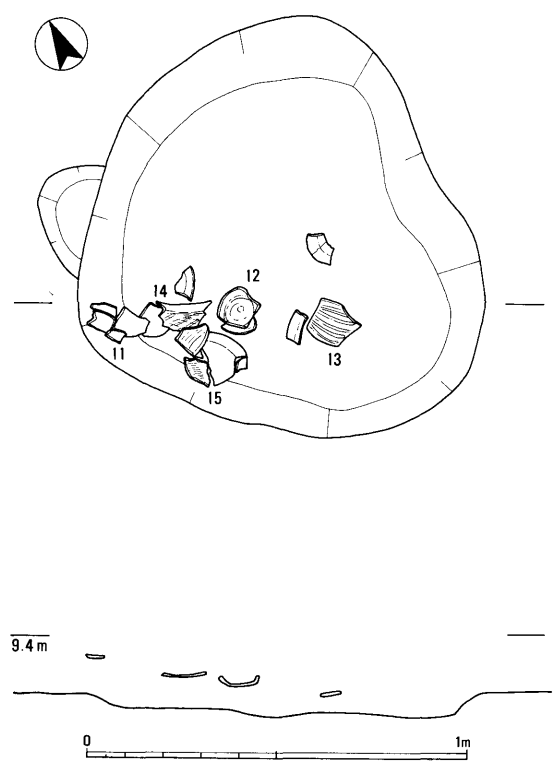


fig.35　第５次調査区土坑SK81遺物出土状況
（１：20）

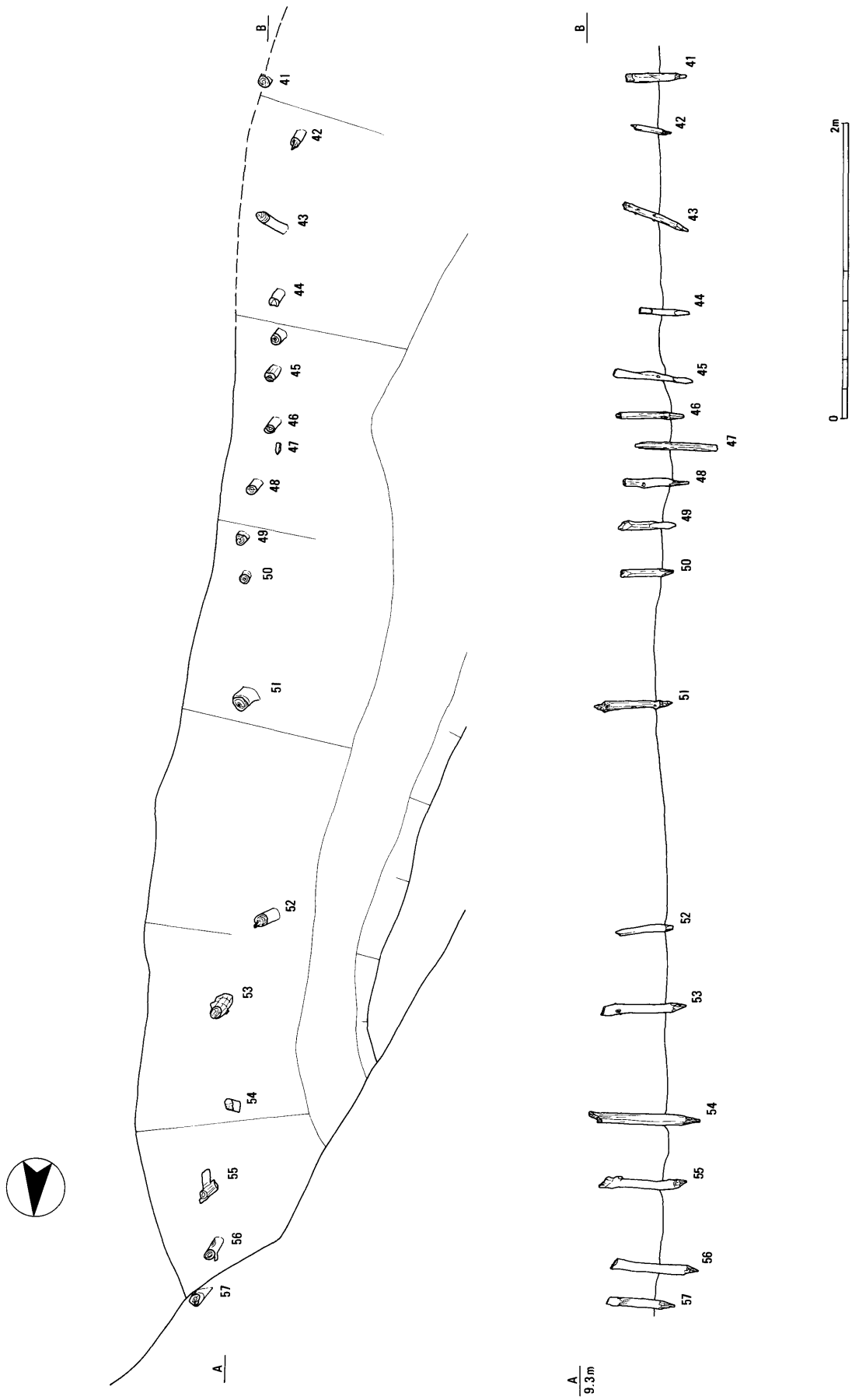


fig. 36　第５次調査区流路 SR77 杭別平面・立面図（1：40）

軸方向をとる。柱掘形は正方形ないし、長方形のもので、最大のもので1辺が約0.6mとなる。南側柱列と西側柱列を中心に柱根が残存している。柱根の残存径は13～15cm、長さは約40cmである。なお、柱間は柱根の心芯で計った場合、桁間が北からそれぞれ1.4m+1.4m+1.4m+1.6m、梁間は1.9mの等間となる。柱掘形内からは図示し得なかったが、把手など土師器片が出土している。明確な時期は不明だが、飛鳥・奈良時代の遺構と考えられる。

流路SR77(fig. 36)　調査区中央の西壁よりで確認した。検出されたのは一部分に止まり、全体的な規模は不明であるが、ほぼ南北方向に延びる流路になると考えられる。中央部と南端部では第4次調査区で検出されたＳＤ47・53と接続する。

流路の岸には約9mにわたって平行する杭列が認められる。杭の頭部は概ね標高9.5～9.6mの高さで揃っている。この杭列は岸の上端部分で検出されているため、流路自体がある程度埋没した段階で設定されたものと考えられる。杭の用材は径約5cmほどの細い丸木杭である。

流路の深さは約0.6mで、埋土は上層の暗灰色粘質シルト土と下層の灰色シルト土に区分される。下層には粗砂が多く混じるほか、流路底面には有機物も含まれる。遺物は上層埋土から須恵器類が、下層埋土からは微量であるが、古式土師器の小片が出土している。

土坑SK81(fig. 35)　調査区の北端で確認した長さ約1.2m、幅1mの不整形土坑である。深さは約10cmと浅い。土坑の埋土上面からは、やや浮いた状況であったが、須恵器杯身(12)や土師器椀(11)・高杯(15)などがまとまって出土している。これらの遺物から飛鳥時代後半頃の遺構と考えられる。

(濵辺)

遺構番号	性　格	時　期	次数	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD70	溝	飛鳥～奈良	5次	b24～23	深さ0.2～0.3m、最大幅約3m。途中z・a22付近で分流する。軒丸瓦出土。
SD71	溝	不明	5次	a24～23	SK72を切る溝。
SK72	土坑	飛鳥～奈良?	5次	a25	浅い不整形土坑。
SD73	溝	飛鳥～奈良?	5次	y.z19～24	SD70を切る南北溝。SD74にほぼ併行している。
SD74	溝	飛鳥～奈良	5次	y.z19～24	SD70を切る南北溝。
SB75	掘立柱建物	飛鳥～奈良	5次	c.b20·21	東西2間×南北4間の側柱建物。柱根が残存する。
SD76	溝	不明	5次	b24	4次・SD64と並行して走る東西溝。
SR77	流路	古墳～奈良	5次	z·a9～13	流路。西側の一部に杭列あり。
SD78	溝	不明	5次	b19	4次・SD59に繋がる南北溝。
SD79	溝	不明	5次	b17	4次・SD55に繋がる東西溝。撹乱溝か？
SD80	溝	飛鳥～奈良	5次	a·b15	4次・SD53に接続する。土坑状となる。
SK81	土坑	飛鳥～奈良	5次	a9	ほぼ楕円状の土坑。遺物比較的多い。
SD82	溝	飛鳥～奈良	5次	b16	4次・SD53とSD55に繋がる東西溝。
SD83	溝	不明	5次	b16	4次・SD53とSD55に繋がる東西溝。

tab.15　第5次調査区遺構一覧表

2　出土遺物～第５次調査区～

第５次調査区で出土した遺物の総量はかなり少なく、整理箱に換算しておよそ25箱である。土器類については、古墳時代前期から近世までのものが認められ、飛鳥～奈良時代の遺物が大部分を占める。木製品は、杭材や柱材が若干出土したに過ぎない。

以下、遺構単位を中心に主要な遺物について記述していく。詳細については遺物観察表(fig. 16・17)を参照されたい。

a　土器類

溝SD70出土遺物(1～6)　1･2は須恵器杯身である。1は口縁部が直線的に立ち上がり、端部がわずかに外反する。底部はヘラ切り未調整である。2は底部外端に低い高台がつく。土師器高杯（3・4）はいずれも脚柱部のみで、内面にシボリ目を残す。甕(5)は緩やかに外反し、内外面にハケメが施される。

6は軒丸瓦片である。摩滅が激しく、中房の蓮子が不明瞭だが、複弁重弁八葉蓮華文軒丸瓦になると考えられる。瓦面は比較的平面的である。いわゆる藤原宮式に属し、天花寺廃寺の分類によるＭ３Ａ[(1)]ｂに相当するものと考えられる。

流路SR77出土遺物(7～9)　7は古式土師器の壺の底部になると考えられる。8・9は上層埋土から出土した。8は底部に回転ヘラケズリ調整を施す。9は高杯の脚柱部と思われ、外面に沈線を一条巡らせている。

溝SD80出土遺物(10)　土師器甕である。口縁部は外傾する。

土坑SK81出土遺物(11～15)　須恵器や土師器類がまとまって出土し、一括性が高いものと考えられる。時期的には飛鳥時代後半頃のものであろう。

土師器椀(11)はやや粗製の椀で、外面に指オサエ痕を明瞭に残す。13は杯である。内面にミガキを施す。4は高杯である。一見して古墳時代の高杯を思わせる脚部がつき、類例をあまり見ない。杯部の内面にはミガキが施される。甕(14)は口縁端部を丸くおさめるものである。須恵器杯身(12)は都城分類[(2)]の杯Gに相当するものである。

包含層･その他の遺物(16～40)　包含層など明確な遺構に伴わない遺物を一括して記す。

16･17はS字状口縁台付甕の脚台部である。16は古墳時代前半、17は後期のものである。

18～22は須恵器。18･19は内面に返りがつくものである。20･21は高台がつくもので都城分類の杯Ｂに相当しよう。

22は鉢になると考えられ、外面に沈線をもつ。

23･24は土師器である。摘みがつく杯蓋になろう。25～27は把手。26は甕あるいは鍋につくものと考えられる。28は緩やかに外反する甕で、端部外面に沈線をもつ。内外面はハケメ調整である。29は土錘。

30～35は中世前期の遺物である。30は陶器小皿、31～35は無釉陶器椀(山茶椀)で、いずれも渥美産のものである。33は高台部に籾殻痕を明瞭に残す。

38･39は加工円盤。陶器椀の体部や高台部を利用している。207は瀬戸美濃系の擂鉢である。内面には○に「丈」の刻印が見られる。近世後半頃のものであろうか。　(濵辺)

b　木製品

杭　類(42～57)　いずれもＳＲ77に打ちこまれていたものである。直径約5cm、長さ50cm前後の細い杭が大半で、自然木の先端を加工している。側面は整形せず、樹皮をそのまま残すものが多い。

柱　材(60)　ＳＢ75の柱掘形から出土したものである。樹種はヒノキと考えられる。残存径は約17cm、長さは47cmほどで、側面には工具痕を明瞭に残す。

板　材(59)　ＳＤ70から出土したものである。木取りなどから判断すると、建築部材を転用した可能性が考えられる。全体的に欠損が激しく、具体的な用途は不明である。　(中川・濵辺)

＜註＞

(1)　山田猛「天花寺廃寺」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981

(2)　古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』1992

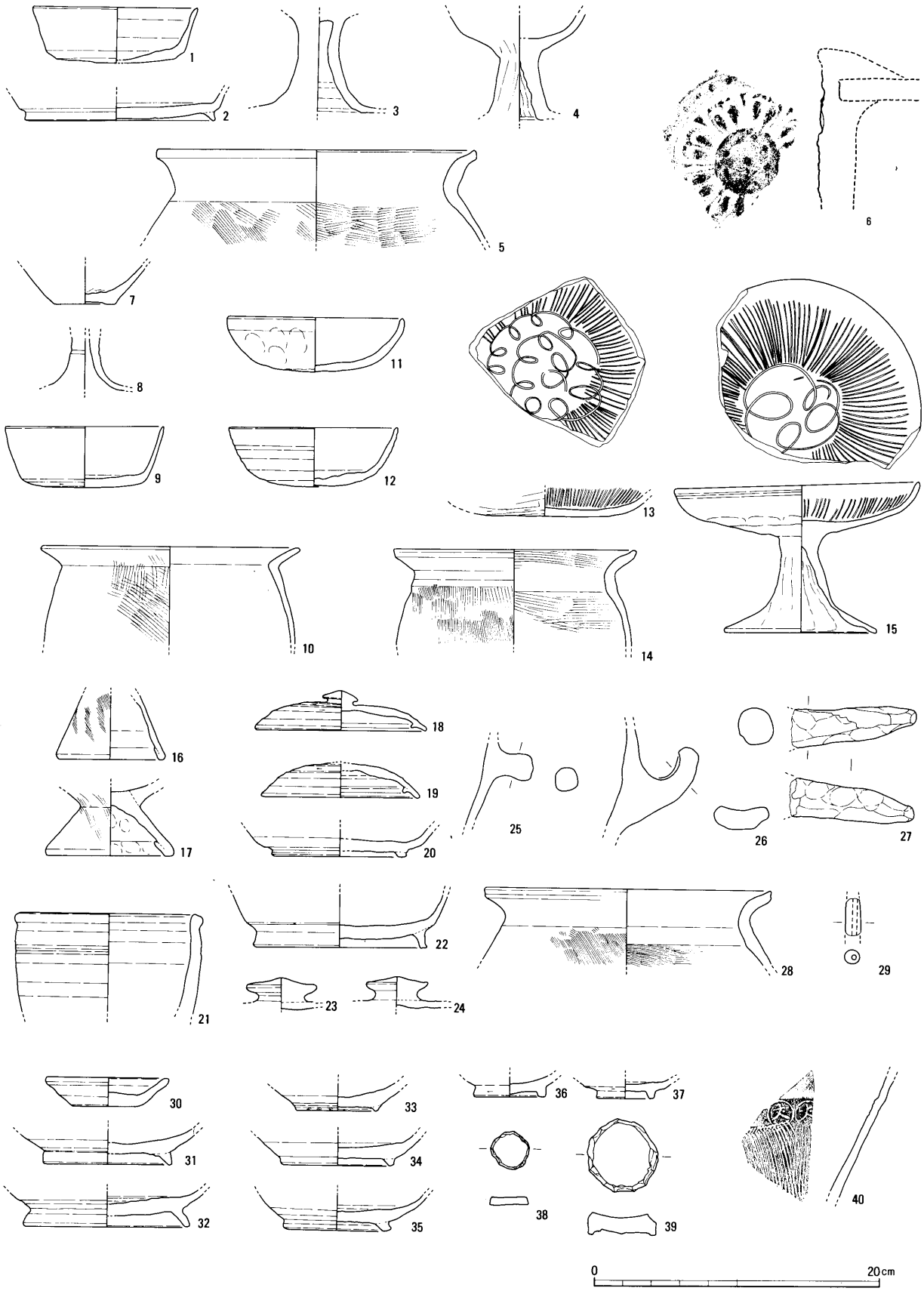


fig. 37　第５次調査区出土遺物(1)（１：４）

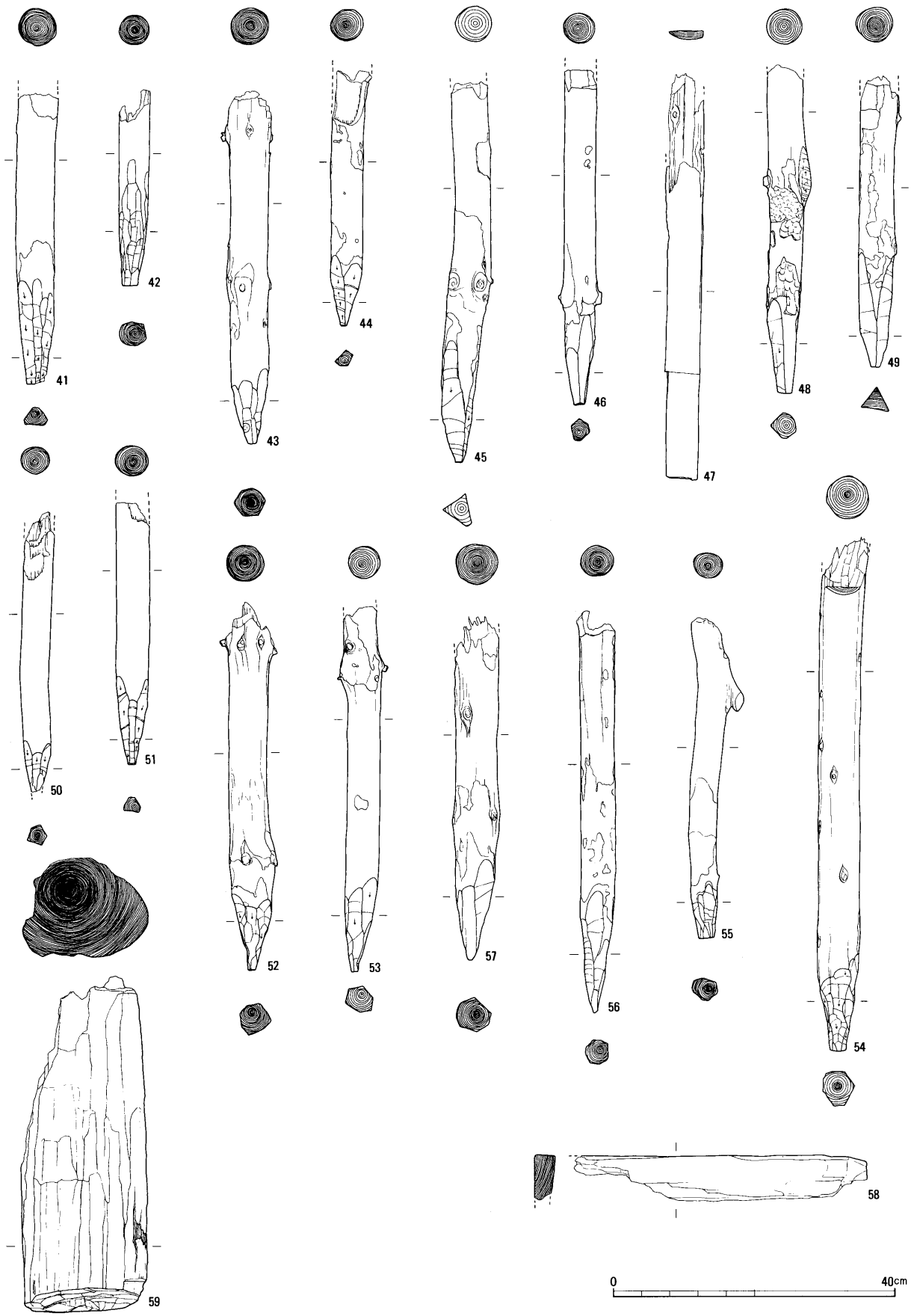


fig. 38　第５次調査区出土遺物(2)（１：８）

番　号	実測番号	器　種　等	次数	グリッド	遺構・層名等	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	備　　考
1	1607	須恵器　杯身	5次	b23	SD70	(口)11.4	外；回転ナデ→ヘラ切り 内；回転ナデ	やや密	灰白	口縁部片	
2	1605	須恵器　杯身	5次	b23	SD70	(台)13.2	外；回転ナデ→高台貼付 内；回転ナデ	やや密	灰白	高台 1/3	
3	1608	土師器　高杯	5次	b23	SD70	—	外；ナデ 内；シボリ→ナデ	やや密	灰白	脚柱部	
4	1603	土師器　高杯	5次	b23	SD70(上面)	—	外；ナデ 内；シボリ	やや粗	にぶい褐色	脚柱部	
5	1601	土師器　甕	5次	a23	SD70(上面)	(口)22.2	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ナデ→ハケメ	やや密	にぶい黄橙	口縁 1/8	
6	1503	軒丸瓦	5次		SD70(上面)		外；複弁重弁八葉蓮華文・珠文帯 内；ナデ	やや密	灰	瓦当 3/5	
7	1604	土師器　壺?	5次	a10	SR77(下層)	(底)4.3	外；ナデ 内；ナデ→工具アタリ	やや密	黄灰	底部完存	
8	1609	須恵器　高杯	5次	a13	SR77(第1層上)	—	外；回転ナデ→沈線 内；回転ナデ	やや密	灰白	脚柱部	
9	1606	須恵器　杯身	5次		SR77(上層)	(口)11.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	やや粗	灰	口縁 1/8	
10	1602	土師器　甕	5次		SD80	(口)18	外；ヨコﾅﾃﾞ→ハケメ 内；ナデ	やや密	にぶい黄橙	口縁小片	
11	1702	土師器　椀	5次	z11	SK81　P3	(口)12.3	外；ヨコナデ→指オサエ 内；ナデ		灰黄褐	口縁 3/8	
12	1703	須恵器　杯身	5次	z11	SK81　P4	(口)11.8	外；回転ナデ 内；回転ナデ	やや密	灰白	口縁 7/8	
13	1801	土師器　杯	5次	z11	SK81　P2	—	外；ヘラケズリ 内；ミガキ	やや密	明赤褐	底部片	
14	1701	土師器　甕	5次	z11	SK81　P4	(口)16.8	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ナデ→ハケメ	粗	褐灰	口縁 1/3	
15	1704	土師器　高杯	5次	z11	SK81　P1	(口)17.2	外；ナデ→脚部貼付→指オサエ 内；ヘラミガキ→ナデ	やや密	にぶい橙	口3/8台1/2	
16	1405	土師器　台付甕	5次	a15	包含層	(裾)7.6	外；ハケメ→ナデ 内；ナデ	やや粗	にぶい黄橙	台 1/2	
17	1408	土師器　台付甕	5次	b24	包含層	(裾)9.0	外；工具ナデ→ヨコナデ 内；指オサエ→ナデ	やや粗	浅黄橙	台 1/6	
18	1404	須恵器　杯蓋	5次		表土	(口)12	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘部貼付　内；回転ナデ	密	灰	口縁 2/3	
19	1205	須恵器　杯蓋	5次	b24	包含層	(口)11	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	灰	口縁 1/3	
20	1103	須恵器　杯身	5次		重機掘削	(台)12.1	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付　内；回転ナデ	やや粗	灰	台部 1/2	
21	1204	須恵器　鉢	5次	b23	包含層	(口)13.0	外；回転ナデ→沈線 内；回転ナデ	密	灰	口縁 1/8	外面に自然釉
22	1403	須恵器　杯身	5次		重機掘削	(台)12.1	外；回転ナデ→高台貼付 内；回転ナデ	やや粗	灰	底部 1/2	
23	1407	土師器　杯蓋	5次	b24	包含層	—	外；回転ナデ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	にぶい黄橙	摘部のみ	
24	1406	土師器　杯蓋	5次	a23	包含層	—	外；回転ナデ→摘部貼付 内；回転ナデ	密	淡黄橙	摘部のみ	
25	1206	土師器　把手	5次	b24	包含層	—	外；ヨコナデ→把手貼付 内；ヨコナデ→オサエ	やや密	にぶい黄橙	把手のみ	
26	1402	土師器　把手	5次		表土	—	外；ハケメ→把手貼付 内；ハケメ→オサエ	やや粗	灰褐	把手のみ	
27	1502	土師器　把手?	5次	a24	包含層	—	外；ケズリ	やや密	浅黄	把手のみ	
28	1401	土師器　甕	5次		表土	(口)20.0	外；ヨコナデ→ハケメ 内；ヨコナデ・ハケメ	やや粗	灰黄褐	口縁部片	
29	1501	土錘	5次	a23	包含層	(長さ)2.6	外；ナデ 内；ナデ	密	にぶい黄橙		重量；2.5g
30	1201	無釉陶器　小皿	5次		重機掘削	(口)8.5 (高さ)4.0	外；回転ナデ→底部糸切り 内；回転ナデ	やや密	灰白	口縁部1/4	
31	1102	無釉陶器　椀	5次		表土	(台)9.0	外；回転ナデ→底部糸切り→高台貼付　内；回転ナデ	やや密	灰	底部 3/8	渥美産
32	1104	無釉陶器　椀	5次	b24	包含層	(台)11.5	外；回転ナデ→底部糸切り→高台貼付　内；回転ナデ	粗	灰黄	底部 1/6	渥美産
33	1106	無釉陶器　椀	5次	b24	包含層	(台)6.0	外；回転ナデ→底部糸切り→高台貼付　内；回転ナデ	粗	灰白	底部 1/2	籾殻痕つく　知多産か
34	1105	無釉陶器　椀	5次		重機掘削	(台)8.0	外；回転ナデ→底部糸切り→高台貼付　内；回転ナデ	密	灰白	底部 2/3	渥美産
35	1101	無釉陶器　椀	5次		表土	(台)7.5	回転ナデ→底部糸切り？→高台貼付　内；回転ナデ	やや密	灰白	底部完存	渥美産
36	1202	陶器　椀	5次	b16	撹乱溝	(台)5.0	外；施釉→高台削り出し 内；施釉	やや密	浅黄	底部完存	
37	1203	陶器　椀	5次	b16	撹乱溝	(台)4.0	外；施釉→高台削り出し 内；施釉	密	灰オリーブ	底部完存	
38	1303	加工円盤	5次	b20	包含層	(径)4.2	外；打ち欠き	密	浅黄	完存	陶器椀の体部を転用 重量；5.63g
39	1302	加工円盤	5次	b20	包含層	(径)5.0	外；打ち欠き	密	黒	完存	天目茶碗底部を転用か 重量；44.62g
40	1301	陶器　擂鉢	5次	b17	包含層	—	外；回転ナデ→施釉→刻印 内；回転ナデ→施釉	密	にぶい赤褐	口縁片	

tab.16　第５次調査区出土遺物観察表（土器類）

番号	実測番号	名　称	次　数	グリッド	遺構・層名	計測値（cm）	材質・その他
41	902	丸杭	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 1	残長 40.4　幅 4.5	芯持材、樹皮残る
42	1005	丸杭	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 2	残長 27.9　幅 4.2	芯持材、樹皮残る
43	1002	丸杭	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 3	残長 50.2　幅 5.3	芯持材、樹皮残る
44	906	丸杭	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 4	残長 36.3　幅 4.5	芯持材、樹皮全面
45	702	丸杭	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 5	残長 54.2　幅 5.9	芯持材、樹皮残る
46	901	丸杭	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 6	残長 47.5　幅 4.5	芯持材、樹皮残る
47	704	割材	5次	C11	ＳＺ77・Ｗ 7	残長 57.8　幅 5.1	割材を加工
48	802	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ 8	残長 46.9　幅 5.1	芯持材、樹皮残る
49	904	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ 9	残長 39.6　幅 4.0	芯持材、樹皮残る
50	903	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ 9	残長 41.1　幅 5.5	芯持材、樹皮残る
51	905	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ10	残長 37.0　幅 4.5	芯持材
52	703	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ11	残長 52.5　幅 5.5	芯持材、樹皮残る
53	801	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ13	残長 52.1　幅 4.5	芯持材、樹皮残る
54	701	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ14	残長 73.3　幅 6.0	芯持材、枝材、樹皮残る
55	1004	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ15	残長 45.7　幅 4.1	芯持材、樹皮残る
56	1001	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ16	残長 57.0　幅 4.7	芯持材、樹皮残る
57	1003	丸杭	5次	C10	ＳＺ77・Ｗ17	残長 56.7　幅 4.8	芯持材、樹皮残る
58	803	割材	5次	C10	ＳＤ70	厚 3.0	板目材、上面の劣化激しい
59	1101	柱材	5次	C11	ＳＢ75　Ｐ3	長 47.7　幅 17.2	芯持材、樹皮残る

tab.17　第５次調査区出土木製品観察表

Ⅵ　調査のまとめと検討

堀田遺跡第３～５次調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を確認することができたが、なかでも古墳時代前期・飛鳥～奈良時代の遺物が最も充実した内容を示していた。

今回の報告対象となった一連の事業による堀田遺跡の発掘調査は今年度も実施している。ここでは、今回の調査成果の中で注目できる事柄を２・３抽出して検討し、これまでの調査区内におけるまとめとする。

1　堀田遺跡の地形状況

堀田遺跡の所在する地は、中村川下流左岸であり、中村川が本流の雲出川に合流する1kmほど手前の標高約10mほどの低地である。今回の調査地は、国土地理院[(1)]の区分では低位段丘面、高橋学氏の区分では「沖積平野Ⅰ下位面」[(2)]とされている地点である。

現在の当遺跡周辺は圃場整備事業が完了しており、具体的な地形を見るのは困難である。仲見秀雄氏の分析によると、遺跡北西の一志町片野地区北部は条里型地割とされており[(3)]、圃場整備前の地形図（fig. 39）を見ると、遺跡東側には旧河道と思しき地割が展開していることが明確に把握できる。

調査区の付近をもう少し細かく見ると、遺跡の東側と同様な旧河道と思われる地割が存在し、すぐ西側には真北方位を基調とすると見られる地割が展開していることが見て取れる。調査区相当箇所に見られる旧河道痕跡は、今回の調査で確認できた流路（第３次調査区のＳＤ４・８、および第４次調査区のＳＲ41、以下、ここでは「流路Ａ」と呼称する）とほぼ揃っている。このことから、調査区内で確認できた旧河道は、圃場整備直前までの当地に、その痕跡を留めていたと評価してよい。

さて、流路Ａは古墳時代前期頃までには成立しており、その後、奈良時代頃までには埋没しているものであった。ということは、奈良時代までの河道が、つい最近の地割にまで影響を及ぼしていることを意味している。奈良県の大和盆地では、古代以前の旧河道は概ね中世以降の土地改変によりその痕跡が見いだせなくなり、現在でも確認できる旧河道痕跡は中世後半以降のものであるとされている[(4)]。大和地域のように開発が頻繁な場所とそうではない場所があることを明確に意味している。

2　古墳時代前期の堀田遺跡

今回の調査区では、古墳時代前期に相当する時期の遺構・遺物が最も充実している。

a　河道と導排水路について

流路Ａに接続する溝が何条か確認されている。これらは導排水路と考えられ、流路Ａ内に設置された杭列の存在から、導水路を含んでいることは間違いない。

確実に導水路と考えられるものは２条あり、それぞれで少しずつ機能の違いが指摘できる。

第4次調査区河道aの北端西寄りに曲がる流路は、ちょうど流路ａが東へと蛇行する地点に開削されているものである（以下、これを「導水路ａ」と呼称）。埋土には流路Ａと同様の砂礫層があり、本来は河道そのものであった可能性がある。これは位置的に見て、流路Ａの水流のうちの主要な部分を西側へ取り込もうとする施設であると評価され、導水路のなかでも極めて重要な機能を果たしたものと考えられる。

溝ＳＤ42は、同じく導水路と考えられるものの、その幅は狭い。流路Ａの中に杭列を打ち込み、その障壁作用によってSD42へと導水したものと考えられ得る（以下、これを「導水路ｂ」と呼称）。導水路ｂは、導水路ａにも接続されるような性格のものであると考えられる。SD42からは陽物を象ったと考えられる木製品が出土しており、導水路での祭祀形態のひとつとして評価できるのではなかろうか。

これらの水路は、調査地が南西側に天花寺丘陵を望む位置にあたることから見ても、調査区西側へと導水するための施設であると考えられる。基本的に

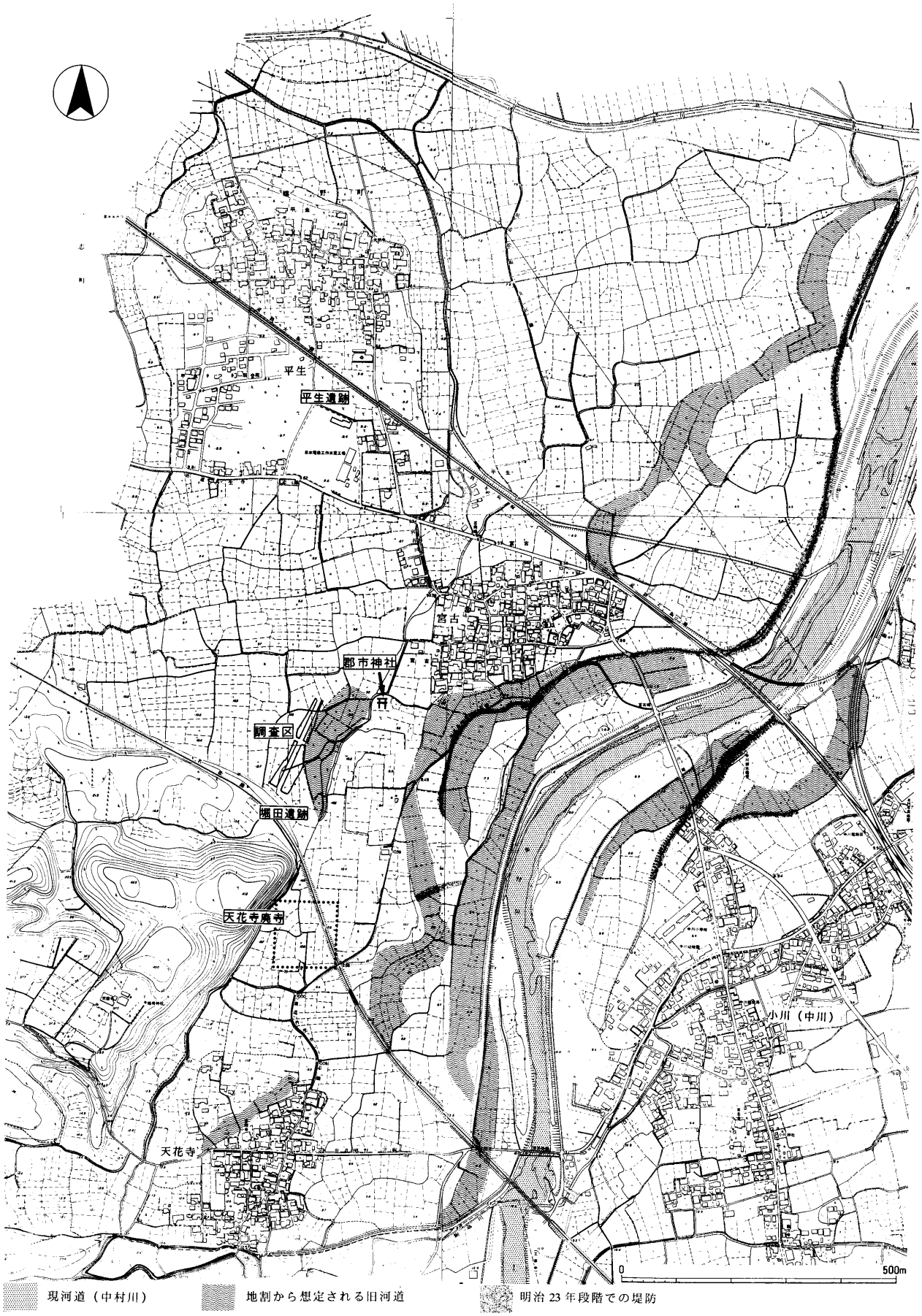


fig. 39　堀田遺跡周辺の旧河道を中心とした旧地形（1：10,000）（嬉野町都市計画平面図(1976)を合成）

は耕作地への導水機能を果たすものと考えて大過なかろう。

なお、今回の調査区内からは、鋤・鍬類がほとんど出土していない。これは、当施設が可耕地域へと導水する場所＝最上流部にあたるためと考えられる。

b　古墳時代前期の土器

流路Ａからの出土土器は、古墳時代前期初頭頃から量を増している。おそらくはこの頃から流路Ａに対して人の手が本格的に加えられてきたのであろうが、量的に最も充実するのは古墳時代前期後半頃である。

①　溝ＳＤ42出土の土器

溝ＳＤ42からは、小形壺・壺・高杯・甕などの資料がまとまって出土している。これらは完形品もしくはそれに近いものを多く含んでおり、溝出土資料とはいえ、一括資料ないしはそれに準じる資料として取り扱ってよかろう。

この土器群を既存の編年観に照らし合わせれば、尾張地域では赤塚次郎氏の松河戸Ｉ式[5]、近畿地方では木下正史氏による編年の布留３式[6]、近隣では川崎志乃氏の島貫Ｃ４期[7]に相当する。

この資料から見るこの時期は、伝統性の継続と破壊とが同時進行している、と表現できる。Ｓ字甕を中心とする台付甕が大小の法量構成を保つという伝統性を保持して生産されている一方、この地域で製作されたと考え得る丸底甕が確実に認められる。また、高杯はこれまでの形態的伝統性を完全に払拭し、おそらくは近畿方面からの影響による器形へと変化している。壺についても、その製作技法的特徴は伝統を引き継いでいるものの、口縁端部内面の肥厚(fig. 24－20など)は前代からの型式的系統ではなく、近畿布留式の影響と見るのが妥当であろう。

つまり、島貫Ｃ４期は様式上の大きな画期としても評価できるものと考えられるのである。

これまで、雲出川流域ではこの時期の良好な一括資料に恵まれなかったが、松本権現前遺跡竪穴住居ＳＨ４３出土資料[8]、およびこの資料をもって基準とすることが可能である。

②　堀田遺跡における布留系の受容

さて、島貫Ｃ４期併行期における変化は、いくつかの土器で観察できる。これらは総じて、在来系の土器における布留系要素の受容という形態をとる。堀田遺跡で確認できるのは、前述の二重口縁壺のほか、高杯・丸底甕・台付甕に見られる。

高杯は、その形態は当該地域の伝統から追うことができず、明らかに近畿方面からの影響と見なせる。ただし、脚柱外面の最終調整前に行われる縦方向のハケメは、Ｓ字甕の脚台部外面に見られるハケメと同様、右側にひねりながら下へと施すもの（脚部斜ナデ手法）で手法的には伝統性を保持している。

同じことは丸底甕にもいえる。丸底甕には、体部外面調整に斜め方向の粗いハケメを施すものがあり、これはＳ字甕に見られる手法と考えられよう。

以上の２器種は、形態的には在来の系譜を追えないものの、手法上は在来の連続性が確認できるものである。

次に、形態的には在来の系譜で追えるものに、手法的に布留系要素が付加されたものを挙げる。その典型が台付甕である。fig. 7の102～104の台付甕は、台付甕であること、そして体部外面に羽状ハケメを施していることから、伊勢地域における当該時期の特徴を備えている。しかし、口縁部が「く」の字形に外反することや脚台部の処理方法は、従来この地で見られる台付甕とは異なっている。そして、口縁端部が内面に丸く肥厚すること、とくに105の土器に顕著な傾向として、体部内面のヘラケズリが見られること、などは、布留系の要素として認識できるものである。

なお、ここで見た台付甕の傾向は、先述の二重口縁壺も同じものとして見ることができよう。

また、手法的に付加されるものではないが、在来の器形であるＳ字甕にも類似した要素を見つけることはできる。fig. 5－71は、脚台部を破損した状態での使用が明らかなものである。破損部が非常に丁寧に研磨されていることを考えると、あるいは意図的に脚台部を除去し、丸底甕風に用いたと考えることもできる。

このような脚台部を欠損した状態～丸底の状態～で用いられている土器は、三重県内からもいくつか確認できるのであるが、とくに雲出島貫遺跡からは多くの例が見られる。雲出島貫遺跡は、三重県内でもとくに布留式土器の出土が顕著といえる遺跡であ

	布留系要素＋在来系要素 ＝ 形態
高杯	形態 ＋ 手法 ＝ ・屈折脚　・脚柱調整（S字甕的ハケメ）
丸底甕	形態 ＋ 手法 ＝ ・丸底　・ハケメの手法 ・「く」の字口縁
台付甕	形態・手法 ＋ 形態 ＝ ・口縁部肥厚　・台付 ・内面ケズリ　・S字甕的ハケメ
二重口縁壺	形態 ＋ 手法 ＝ ・口縁部肥厚　・擬口縁を多用

fig.40　堀田遺跡における布留系要素の受容（島貫C４期並行）

り[9]、今回の堀田遺跡の例を含めれば、雲出川流域一帯がそのような地域として措定できるものと考える。

以上のように、堀田遺跡における島貫C４期併行期は、布留系の要素について、器形（高杯・丸底甕）だけでなく、手法（台付甕・二重口縁壺）をも取り入れた段階として、大きく評価できる時期といえる（fig. 40）。とくに、台付甕の形態に見られる布留系と在来系の見事な融合は、それを象徴するものとして評価できる。

なお、このような台付甕は今のところ堀田遺跡以外では確認されておらず、さらにその後系譜がたどれない一過性のものと考えられる。つまり堀田遺跡は、布留系と在来系との融合がより先鋭的かつ局地的に表現された場といえよう。

以上のことは、次に見る二重口縁壺と朝顔形埴輪との関係からも窺われる。

③　二重口縁壺と埴輪

流路Aからは底部穿孔二重口縁壺（以下、単に「二重口縁壺」と呼称）と埴輪が出土している。朝顔形埴輪と考えられるこの埴輪は、それ自体伊勢における最古の事例として重要なものであるが、その意義については、前述の視点で見ることによってさらに興味深いものがある。

まず、所属時期である。二重口縁壺は、破片から復元したものではあるが、その形態は、頸部から体部にかけての傾斜が比較的きつく、体部最大径部分があまり横へ張り出さないという特徴がある。この特徴から、第４次調査区のＳＤ42出土土器群と併行する時期、つまり島貫C４期併行期と考えられる。朝顔形埴輪についても、頸部から壺形体部にかけての形態が同じ状況であることから、やはり島貫C４期併行であろう。つまり、両者は同時期に存在していたものと評価できる。

つぎに製作技法を見る。二重口縁壺は、土器製作技法的に見ても、明らかに堀田遺跡を含む当地での製作によるものである。[10]一方の朝顔形埴輪についても、口縁部の外反形態や口縁屈曲部の擬口縁の状況などから、概ね在来の二重口縁壺を製作する手法に拠っていると評価してよい。

とはいえ、朝顔形埴輪の形態的イメージは明らか

に初現的な埴輪の影響下にあり、その源流を辿れば近畿地方、とくに大和地域との関係を想定せざるを得ない。つまり、堀田遺跡では、在来的な手法による二重口縁壺と外来的な要素を含む朝顔形埴輪とが共存しているのである。この共存現象は、つい最近まであまり知られておらず、二重口縁壺のみ、あるいは朝顔形埴輪と円筒埴輪の組み合わせ、といったように、それぞれが別個に構成されていた事例が知られるのみであった。しかし、近年の松阪市宝塚1号墳の発掘調査により、二重口縁壺と埴輪との共伴が知られるようになった。[11] また、青塚古墳（愛知県犬山市）でも、同様な組み合わせを見ることができる。[12]

では、このような在来要素と外来要素の混在は何を意味するのであろうか。

大和との関係を考える上で興味深いのは、奈良県天理市に所在する東殿塚古墳から出土している二重口縁壺[13]である。これらは、その形態および東殿塚古墳出土資料に見られるような土器成形上の特徴から見て、伊勢の二重口縁壺との関係が深いものと考えられる。大和地域を含む近畿地方の二重口縁壺は、箸墓古墳や桜井茶臼山古墳出土資料に典型的に見られるような、直立する頸部から横へ強く開く形態を基本とするのものであろう。[14] そして何より、底部が丸底であることがその最たる特徴である。底部が平底をなす東殿塚古墳のような資料は、伊勢地域からの影響のもと、成立したと考えられる。

ただし、二重口縁壺の形態そのものは元来伊勢にあるものではなく、大和地域を含む近畿地方で成立した形態であろう。つまり、東殿塚古墳で見られる二重口縁壺は、大和地域で発生したものでなはなく、伊勢からの影響と見ることができるが、それは状況的にはいわばUターン現象といえる。

以上のことを総合すれば、当該時期の土器類に見られる伊勢⇔大和の相互関係のなかで、堀田遺跡の二重口縁壺と朝顔形埴輪が存在していると評価されよう。なかでも堀田遺跡の例は、前述した台付甕などの土器群の動向とも絡めることによって、このところ列島規模で注目を集めている宝塚1号墳の埴輪群が成立する前段階を象徴的に示すものとして、極めて貴重な事例といえる。

④ 古墳時代前期における中村川流域の再評価

以上の事例を見ると、堀田遺跡における島貫C4期併行期とは、土器様式上での画期を見せる以上に大きな意味を持つことが指摘できる。当遺跡の特徴である在来系と布留系との融合が、当該時期前後の前方後方墳が密集する中村川下流域の一角で展開していることは注意されてよい。東海地方や関東地方の独自性を言う際に使われることの多い前方後方墳であるが、それを地域の独自要素を示す資料として用いるためには、このような現象を積極的に評価する必要がある。少なくとも堀田遺跡の事例は、当地における古墳文化が東海地域の独自様相として把握されるものではなく、大和地域を含めた近畿地方との極めて密接な関連の下にあることを示しているのである。

3 古代の遺構・遺物と一志郡家への展望

a 「郡一神社」と周辺遺構

堀田遺跡で確認された古代の遺構には、流路Aのほか、掘立柱建物と溝がある。掘立柱建物は2棟確認されており、溝も2・3条存在する。これらはその軸方向が真北（N0°EW）前後であり、真北方位をかなり意識して設定されているものと考えられる。調査区の周辺には条里型地割と考えられるものが展開しており、それとの関係において考察することも可能であろうが、今回は真北を意識した地割が奈良時代前後の当地で確認されることを指摘するに留める。

さて、土器類が出土した遺構は、その大部分が流路Aである。ここから出土した土器はほとんどローリングを受けていない。この段階の流路Aはほとんど水流の無い、いわば湿地状の部分であったものと考えられる。とくに第3次調査区側から多数出土していることから考えると、第3次調査区の東に隣接する場所で使用されたものがここへ投棄されたと考えるのが妥当であろう。fig. 39を見ると、第3次調査区の東側に東西約150m、南北約230mの、見ようによっては方形に見える微高地が存在する。ここは昭和56年度の堀田遺跡第1･2次調査で竪穴住居や掘立柱建物と考えられる遺構が確認されているとこ

ろであり、居住域としては最も適切な場所である。

堀田遺跡の脇を流れる中村川の何処かでは、斎王群行（つまり往路）時に祓いの行われた場所として記録があり[15]、その地に一志郡家も所在していたとされる[16]。遺跡付近の大字は宮古（みやこ）といい、何らかの公的施設が所在していた場所を匂わせる。そこで重要となるのが、今回の調査区東側にかつて存在していた「郡市神社」である（fig. 39）この神社は今では見ることはできず、明治40年に小川神社（嬉野町中川）に合祀されている[17]。「郡市（こおりいち）」という名称は、当地が律令期一志郡の中枢的な場で、「市」からは郡規模の物資が集散する場であることを想起させる。第３次調査区の東側微高地こそが一志郡家関連の中枢施設が存在する場であると考えても不思議ではない。しかし、後述のように、そう考える際にもいくつかの限定が存在している。

b　暗文土師器と搬入土器の問題

さて、堀田遺跡近隣地域が、当該時期の「畿内系（型）」暗文土師器[18]を多量に出土する遺跡の多いことはこれまでにも触れられてきたが、どの程度「畿内系」と言えるのかについては未だ検討の余地が残されている。「畿内系」の定義を、「精緻な暗文を施すもの」という意味で捉えるならば確かにそうなのであるが、実際には鳥居本遺跡（一志町八太）などでは、この地で変容したと考えられる製品も確実に含まれている[19]。

それに対し、堀田遺跡の土器類には、調整・手法の点からは、都城のものと大差のない製品がかなり含まれている。しかし、素地粘土の状況を見ると、いくつかの分類ができそうである。

堀田遺跡の杯皿類に見られる胎土を、肉眼観察によって分類すると、次のようになる。なお、このＡ～Ｄの区分については、遺物観察表に記しておいたので参照されたい。

素地Ａ類　白っぽい発色で、小石粒の多いもの。

素地Ｂ類　小石粒をほとんど含まない精製された素地であるが、白っぽい。また、黒斑の見られるものが多い。

素地Ｃ類　赤っぽい発色で、精製された素地に赤色粒が入るもの。

素地Ｄ類　緻密で極めて締まった素地であり、小石粒の含有も少ない。

素地Ａ類は粗製の椀・杯類が含まれるものであり、堀田遺跡近隣の地域系統上にある土器類に用いられるものと見られる。素地Ｂ・Ｃ類は、白っぽい発色が特徴のもので、堀田遺跡近隣で生産された精製土器であろうと考える。素地Ｄ類は事例が最も少ないもので、大和地域方面をも含めた搬入品の可能性がある。

以上の区分のうち、素地Ａ類には精緻な暗文を施すものがほとんど見られないが、素地Ｂ～Ｄ類には極めて丁寧な暗文のあるものが数多く認められる。素地Ｂ・Ｃ類を堀田遺跡近隣で生産されたものと考えると、堀田遺跡には都城方面から暗文土師器に関する豊かな情報が直接入り込んでいたと考えられる。このことは、堀田遺跡近隣地域が、都城方面との連絡の極めて緊密な地域であることを示していよう。この段階の堀田遺跡が、かなり密接に中央と結びついていた場であることを示している。

この一方、今回の調査では暗文土師器とは別の意味で興味深い他地域の土器もある。第４次調査区からは、濃尾形長胴甕と「近江型」甕が出土している。濃尾形長胴甕は濃尾平野がその中心地域とされており[20]、「近江型」甕は伊賀地域からの搬入と考えられる[21]。濃尾形長胴甕の搬入経緯には、当該時期における須恵器分布との絡みで副次的に運ばれた可能性もあるが、当該時期における煮沸具の搬出は極めて珍しいと考えられる。

この事実を先の暗文土師器の状況と絡めるならば、堀田遺跡近隣では、土器に関する各地域の情報が流入している、と把握してよい。単純な比較はできないが、先に触れた雲出島貫遺跡における古墳時代前期の状況と古代における堀田遺跡とは、大枠で類似した状況下にあったと見ることも可能である。

当該時期の搬入土器については、須恵器類の検討は深まっているものの、土師器については実態の把握がはじまった段階である。したがって、堀田遺跡における搬入土器の存在について、今のところあまり強調するのは控えなければならない。しかし、少なくとも筆者の見ている範囲で、当該時期における

土師器の移動は稀なものであり、「畿内系暗文土師器」の動向と絡めてこれら搬入土器の評価も行うことができるものなのであろう。

ただし、これらの遺物が、都城編年[22]の飛鳥Ⅲを最古とし、平城Ⅱまでには終結していることは極めて重要である。雲出島貫遺跡の動向からは、都城編年の平城Ⅱを境に、それまでの中央との密接な結びつきを払拭して、地域色を発現している[23]。堀田遺跡では平城Ⅱ以降の状況が明確ではないものの、中央的な要素の欠落、という視点から言えば、雲出島貫遺跡の動向に一致すると見ることもできる。

斎王群行に際する史料にしてもあくまでも平安時代後期の史料であり、直接当遺跡と結びつけるのは危険である。堀田遺跡における奈良時代以降の動向については、今後の調査進展に期待したい。

おわりに

以上、これまでに調査してきた堀田遺跡の成果から、いくつかの検討を行ってきた。冒頭で述べたように、堀田遺跡の調査は今年度にも行われる。小稿はそれを見る以前に記しているものであり、いくつかの齟齬が生じる可能性もあるが、一応この段階でのまとめとしておく。

（伊藤）

＜註＞

(1) 国土地理院発行『土地条件図』松阪（1969年）
(2) 高橋学「先史・古代における雲出川下流域平野の地形環境」（『人文地理』 31−2 1979年）
(3) 仲見秀雄「一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』（東京堂出版 1979年）
(4) 南部荘シンポジウムでの、山川均氏の発言による（『中世探訪紀伊国南部荘と高田土居』和歌山中世荘園調査会 2000年）
(5) 赤塚次郎「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（(財) 愛知県埋蔵文化財センター 1994年）
(6) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』60−2 1974年）
(7) 川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」（『嶋抜』Ⅲ 三重県埋蔵文化財センター 2001年）
(8) 村田匡『松本権現前遺跡発掘調査報告』（三雲町教育委員会 1999年）
(9) 伊藤裕偉・川崎志乃「雲出島貫遺跡の古式土師器」（『嶋抜』第１次調査 1998年）
(10) 伊藤裕偉「古墳時代前期に置ける土器製作技法の検討」（『天花寺山』一志町嬉野町遺跡調査会 1991年）
(11) 福田哲也ほか『宝塚1号墳発掘調査概報』（松阪市 2001年）
(12) 赤塚次郎ほか『史跡青塚古墳調査報告書』（犬山市教育委員会 2001年）
(13) 青木勘蒔ほか『西殿塚古墳・東殿塚古墳』（天理市教育委員会 2000年）
(14) 資料については、第２５回埋蔵文化財実行委員会編『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』（研究集会資料 1989年）を参照した。
(15) 田中家本『春記』長暦２（1038）年９月条。古瀬奈津子「『田中家本春記』について～長暦２年８・９月条の紹介」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 1993年）、および榎村寛之「十一世紀斎王群行の社会的背景～『田中家本春記』に見る伊勢への旅～」（『Miehistory』vol.8 1996年）
(16) 前掲田中家本『春記』長暦２年９月条。なお、断定こそしていないが、榎村寛之氏は史料に見える「小河禊」を中村川と推測している（前掲榎村氏論文）。
(17) 『一志郡史』下巻（1995年）p231「小川神社」の項
(18) 林部均「東日本出土の畿内産土師器」（『考古学雑誌』72-1 1986年）など。なお、この「畿内系（型）」の範疇は研究者によって様々であるため、ここでは土器の内面に放射状・螺旋状の暗文を施すもので、それに形態的に類似するものをも含めた総称として認識しておく。
(19) 稲生進一・吉村利男『鳥居本遺跡発掘調査報告』（一志町教育委員会 1975年）のＰＬ８－68の土器など。
(20) 城ヶ谷和広・上村安生ほか「考古学フォーラム座談会長胴甕とその時代」（『考古学フォーラム』no.11 1999年）
(21) 笠井賢治「北伊賀地域における古代前半期の土師器甕」（『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』 1999年）
(22) 都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器１ 都城の土器集成』（1992年）を参照した。
(23) 伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古代の土器」（註(7)文献に同じ）

報告書抄録

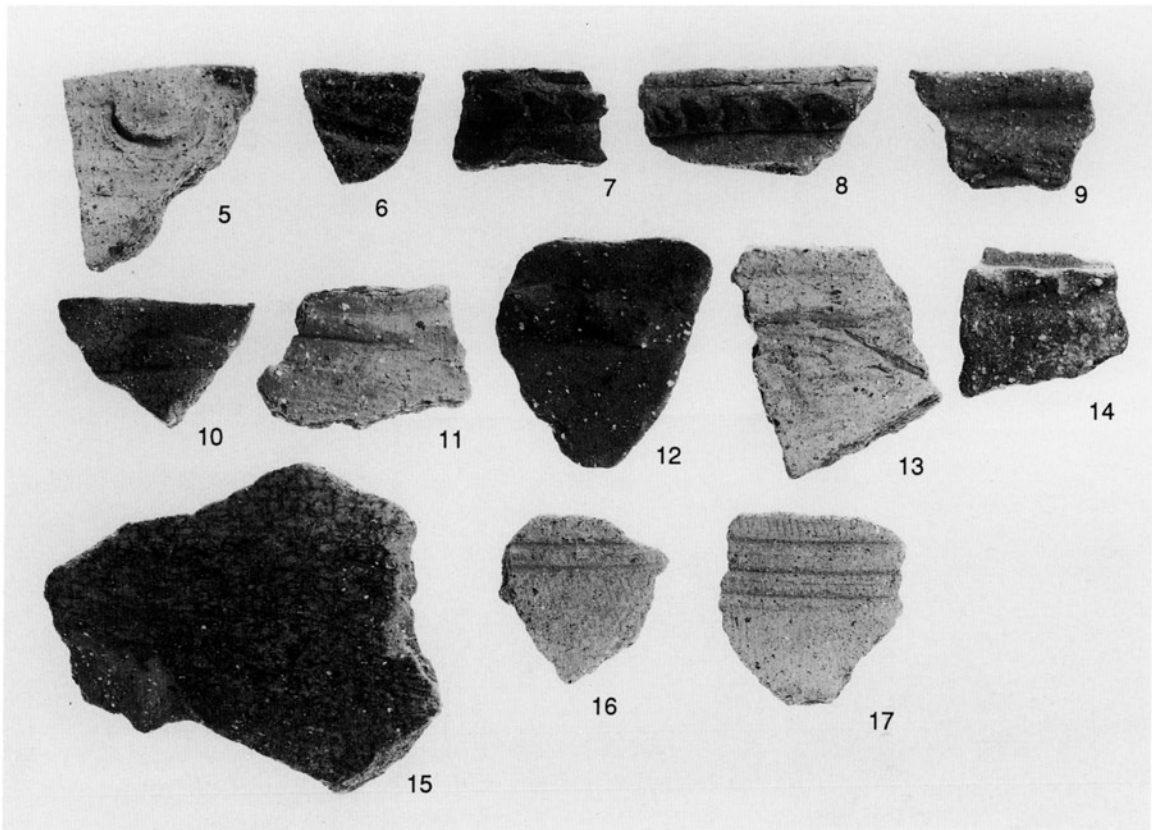
ふりがな	ほっただい3～5じちょうさ
書名	堀田第3～5次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	229
編著者名	伊藤裕偉・中川明・濵辺一機
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596 (52) 1732
発行年月日	2002年　3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ほったいせき 堀田遺跡	いちしぐんうれしのちょう 一志郡嬉野町 みやこあざつきやま 宮古字築山ほか	24405	224	34度 38分 05秒	138度 38分 07秒	19951002～ 19960209 19991018～ 19991125 20001018～ 20001204	3次 1,500 4次 850 5次 600	県道（主要地方道）松阪一志線国補緊急道路整備A工事

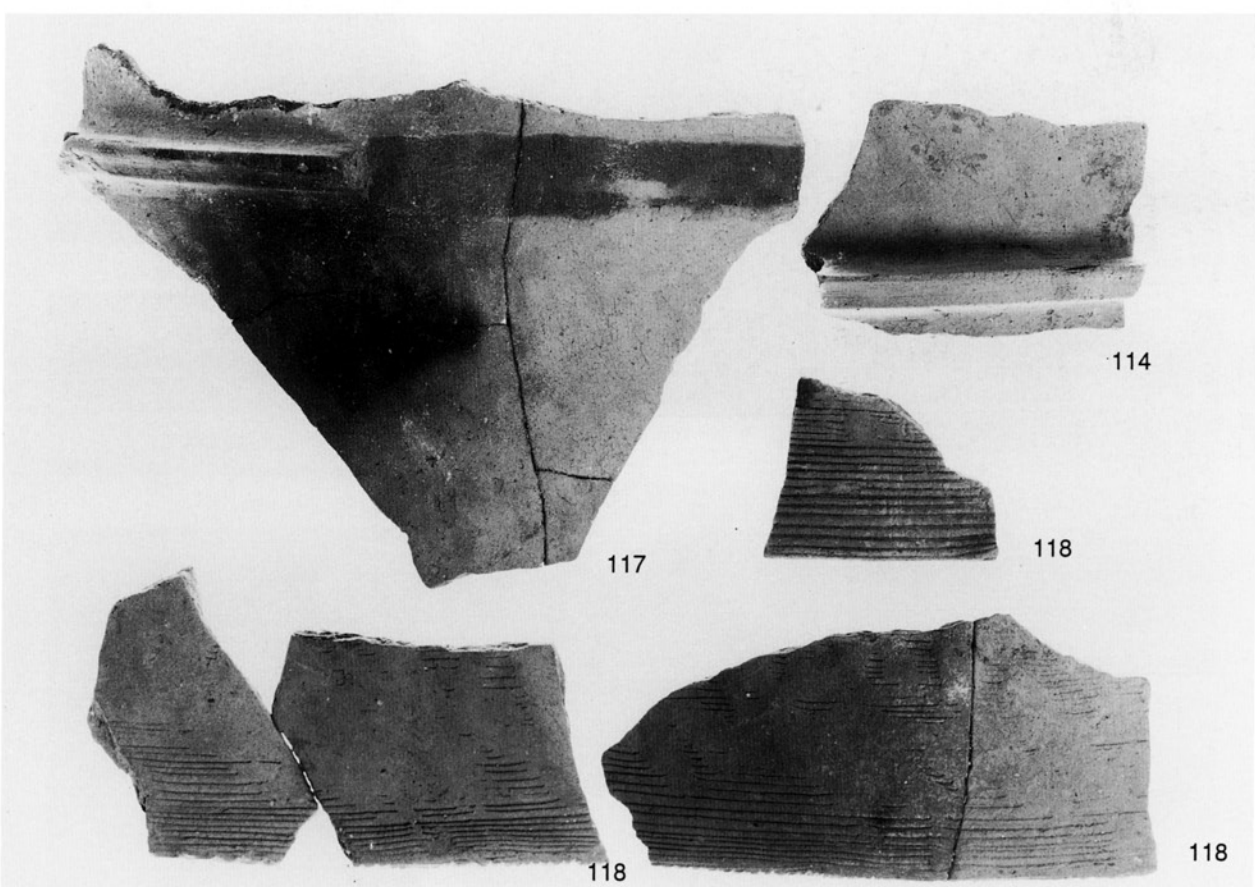
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀田遺跡	集落跡 （河道）	縄文時代		突帯文土器	
		弥生時代		遠賀川系土器	
		古墳前期	河道・水路	土師器・朝顔形埴輪・底部穿孔壺・木製品	朝顔形埴輪と底部穿孔二重口縁壺の共伴
		古墳後期	河道	土師器・須恵器 木製品	木製品良好
		飛鳥奈良	掘立柱建物・溝	土師器・須恵器 （暗文土師器多量）	暗文土師器極めて良好
		中世前期	溝	土師器・陶器	

PLATE

暗文土師器（第３次調査区）



縄文・弥生土器



埴輪

PL. 2

第3次調査区　遺物(2)

27

69

86

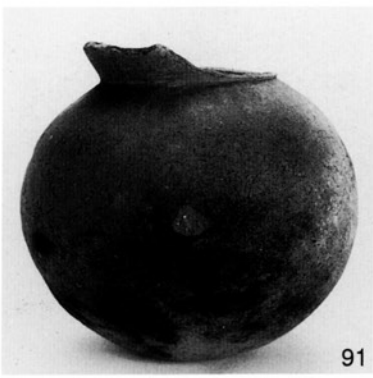
41

72

81

45

80

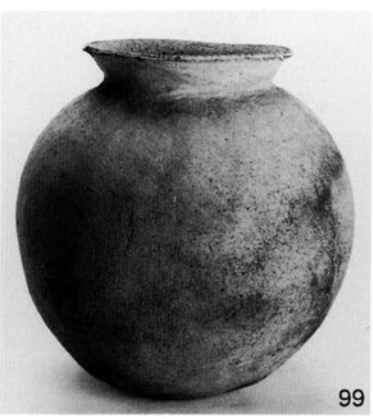

91

43

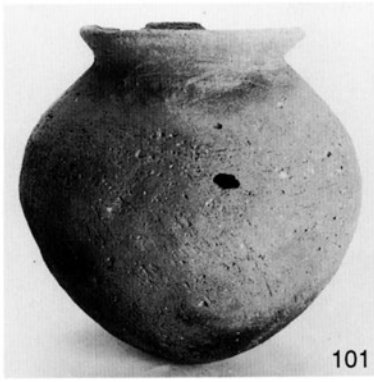
95

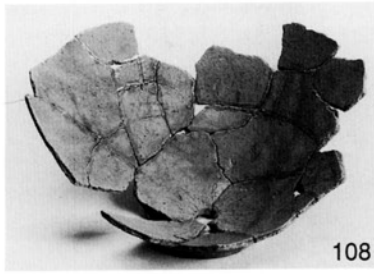
47

81

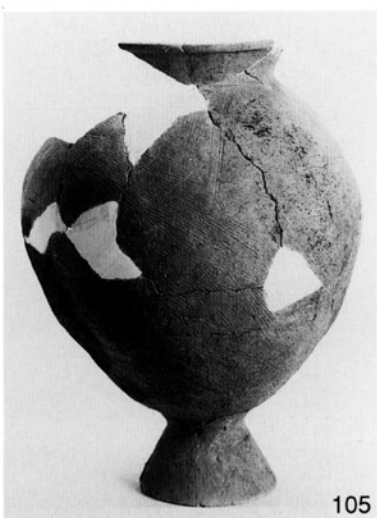

99

103

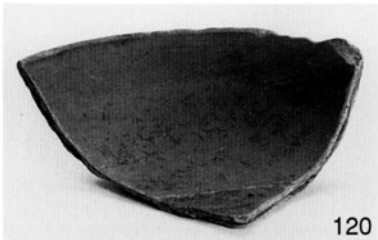

101

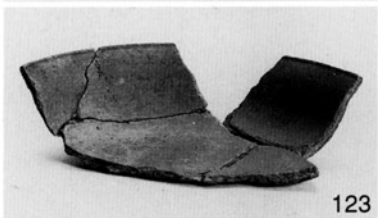

108

104

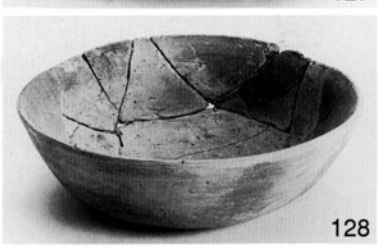

105

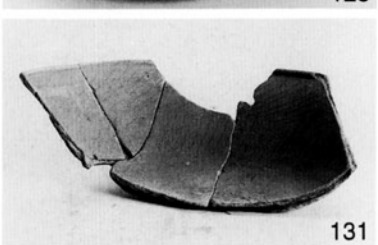
113

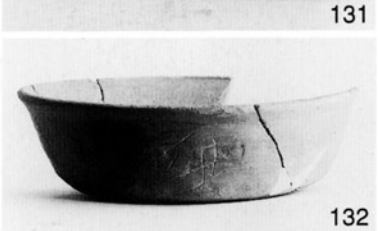

120


123

127


128


131


132

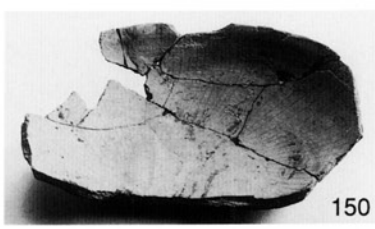
133

134

139

145

148


150

151

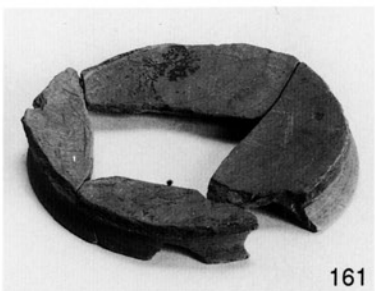
152

153

155

156

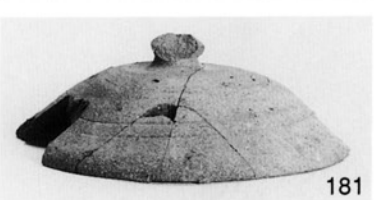
157


161

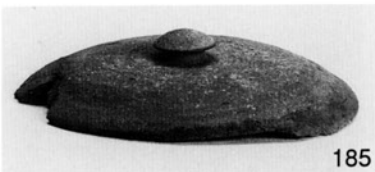
165

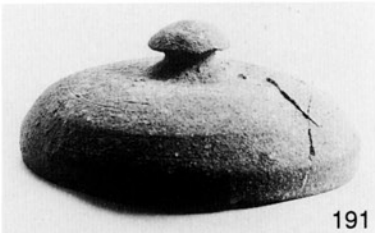
172

180

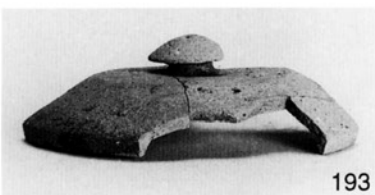

181

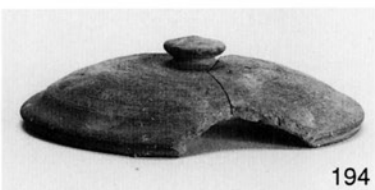
183


185


191

192

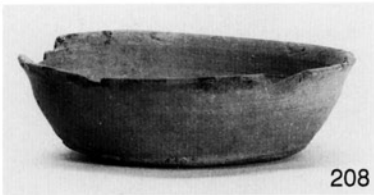

193

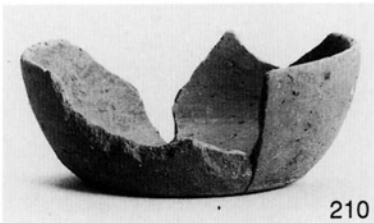

194

201

202

205

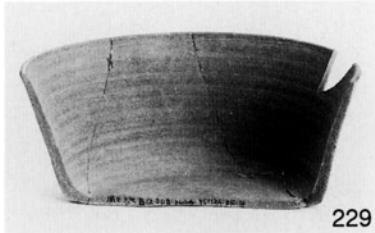

208


210

212

218

220

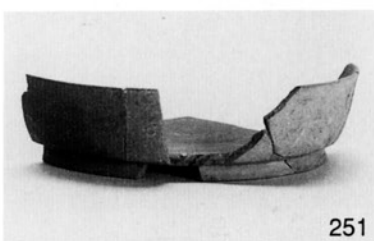

229

231

233

235

238


251

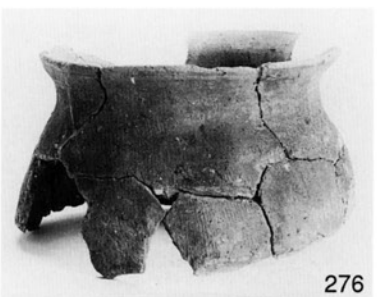
254

257

258

259

261


276

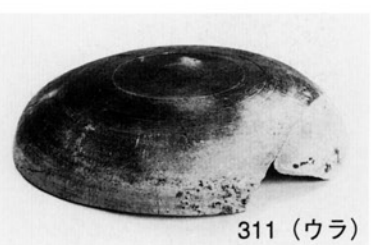
277

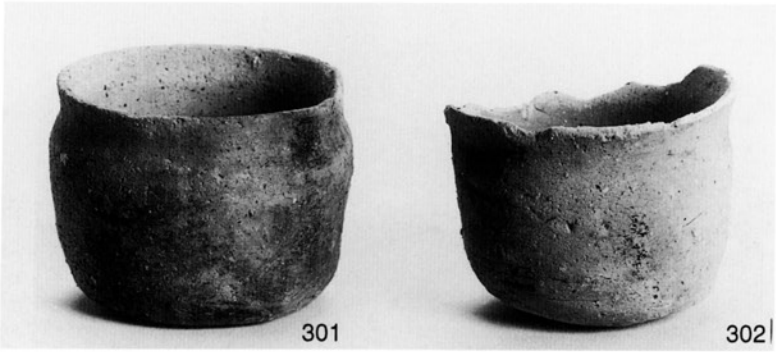
278

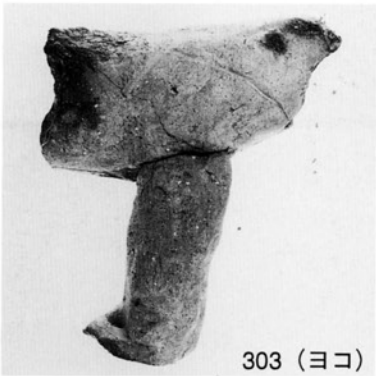
280

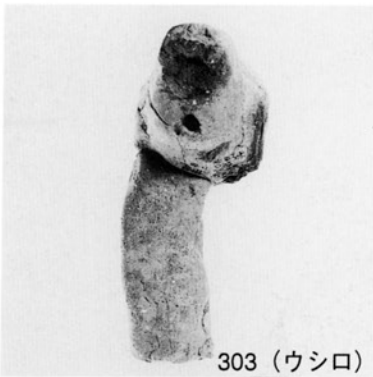
296

298


311（ウラ）

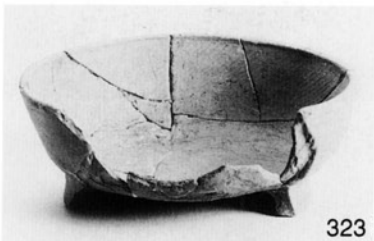

301　302

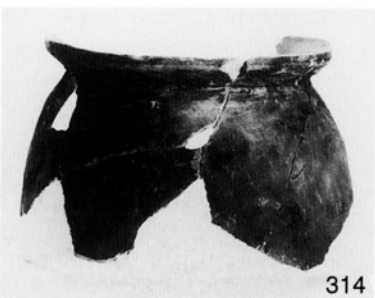

303（ヨコ）

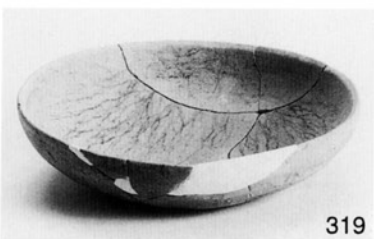

303（ウシロ）

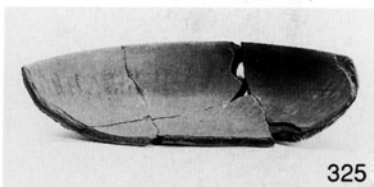
313

316


323


314


319

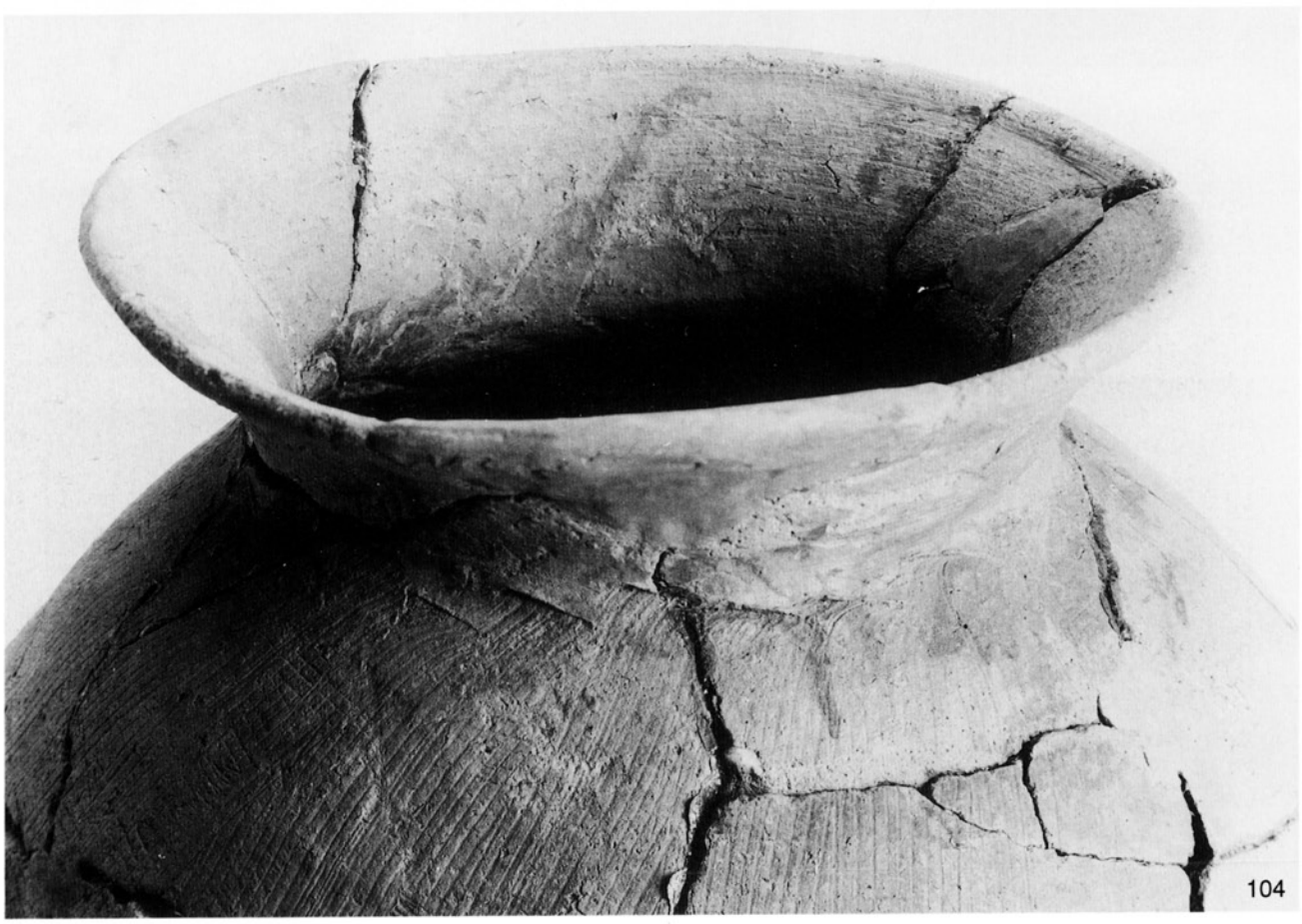

325

317

322

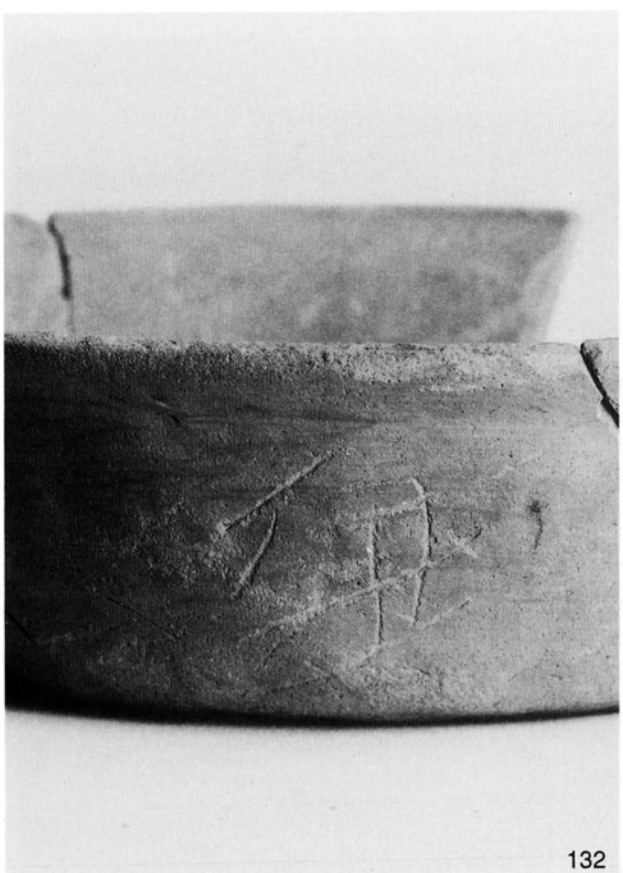
344

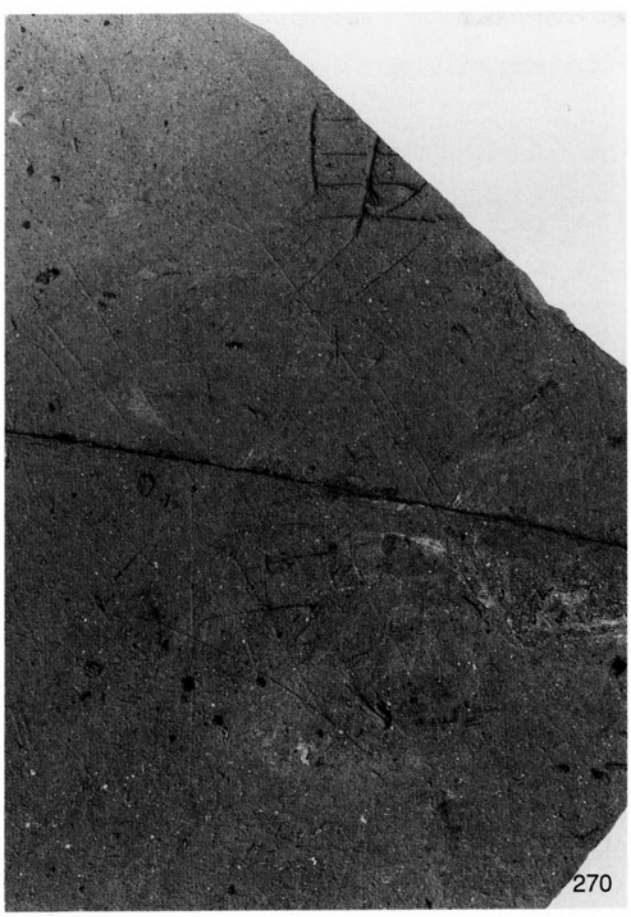
103


104

130

131


132


270

調査風景

東壁土層（南西から）

全景（北から）

全景（南から）

中央部溝群（北から）

中央部溝群（南から）

北部の遺構（南から）

溝 SD42 土器出土状況（東から）

PL. 14

第4次調査区　遺物(1)

4

9

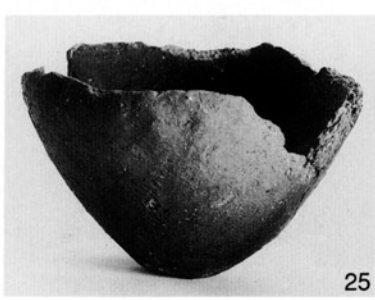
12

14

16

17

18


25

19

21

22

23

44

47

48

49

50

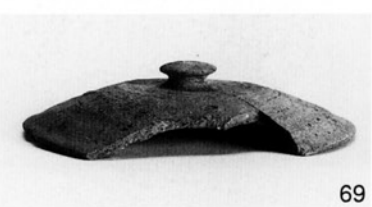
51

54

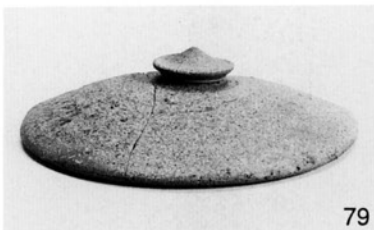
55

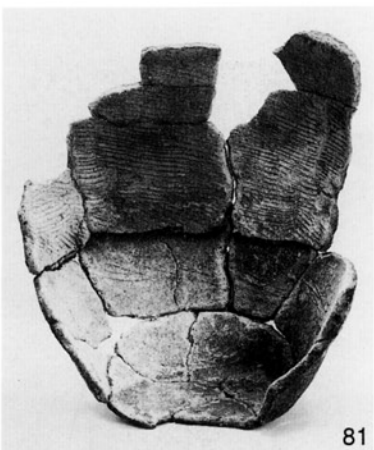
56

58


69

78


79


81

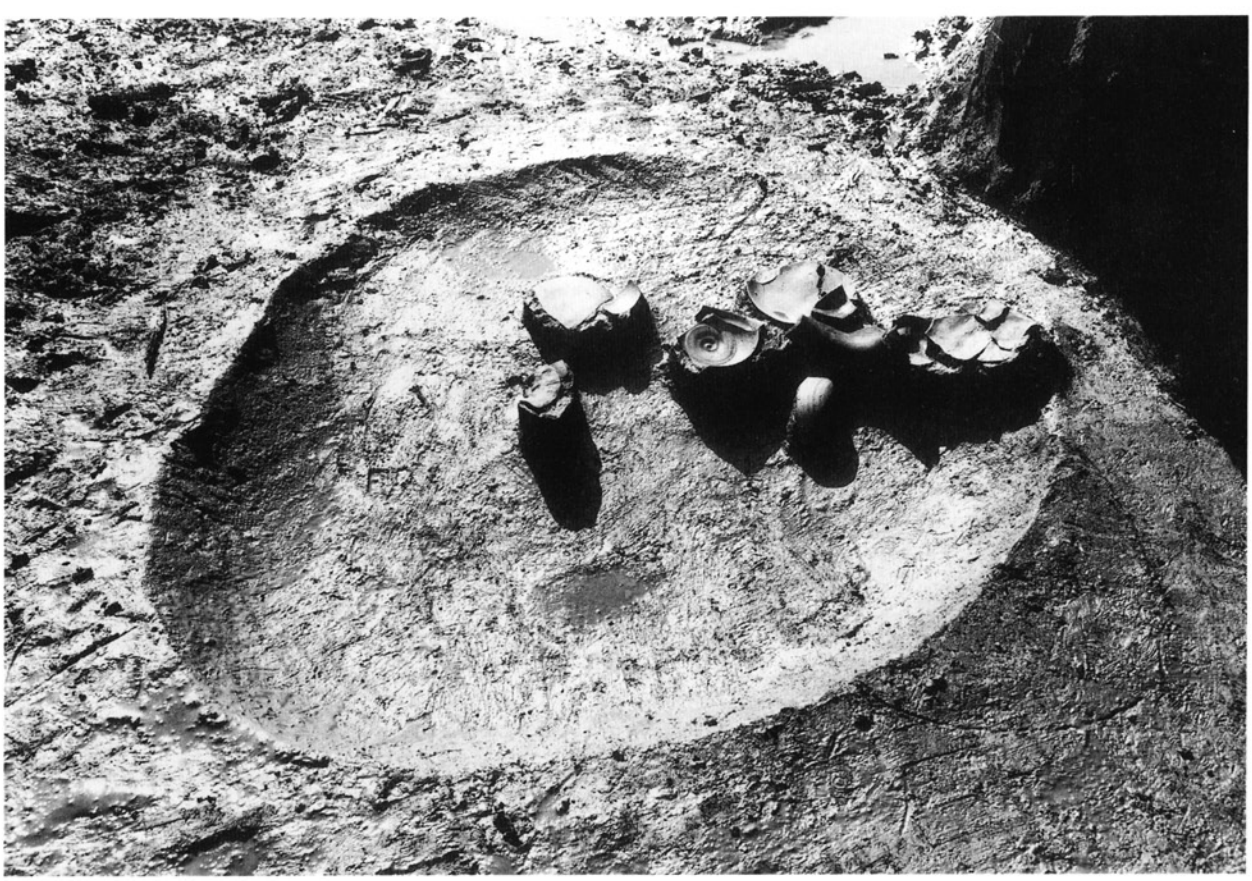
82

85

調査区全景（南から）

SB75（北から）

SR77（北から）



SK81 土器出土状況（北から）

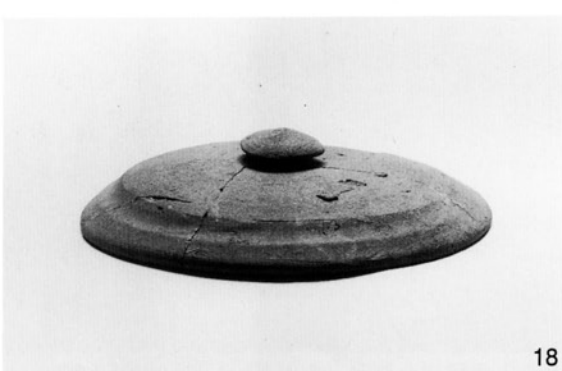
SD70・73（北から）

6

15

59

12



18

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 11 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　２２９

堀　　田

第３～５次調査

２００２年３月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　者　　東 海 印 刷 株 式 会 社